

平成 25 年度～平成 27 年度 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究

Translational Studies for Inclusive Society

研究成果報告書

平成 28 年 5 月

学 校 法 人 名：学校法人立命館

大 学 名：立命館大学

研 究 組 織 名：人間科学研究所

研 究 代 表 者：稲葉 光行

（立命館大学政策科学部教授）

**文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」**

最終報告にあたって

本プロジェクトでは、人文・社会・自然科学の諸領域の研究者と、福祉・更生・対人支援などの現場で活躍する実務家が数多く集結し、それらの人々が密接に連携しながら、具体的な課題解決に取り組んできた。プロジェクトリーダーとして私自身がその活動に直接貢献できたことは少ないが、〈学＝実〉連環研究のための場づくりの手伝いをする中で、実際の社会問題の解決に間接的に貢献できたことは大変貴重な経験であった。

また、プロジェクトが展開する中で、これまで全く接点がなかった研究者と実務家の間で連携のための新しい「結び目 (knot)」が形成され、その結果としてさまざまな問題解決や新しい対人支援のスタイルが提示され、さらにそれらの活動から多くの若手研究者や実務家が育つ様子を目の当たりにしてきた。このような過程を振り返る時、本プロジェクト全体としては、「〈学＝実〉連環」のための拠点形成という目標について一定の成果を得ることができたと考えている。

研究成果については、本報告書に概要をまとめているが、膨大な数の論文発表、学会報告、著書発行、市民への発信など様々なかたちで公開された。また、プロジェクトにかかわる様々な研究の記録を学術刊行物『インクルーシブ社会研究』として逐次刊行してきており、その全てを冊子発行と同時に人間科学研究所のウェブサイトで公開している。3年間で15号に渡ったその内訳は、以下のとおりである。

全体で企画した公開研究会の記録を元にしたもの： 第3号・4号・8号・15号
各チームで企画された研究会等の記録を元にしたもの：

第1号・2号・5号・6号・7号・10号・11号・12号・14号
3年間の活動のまとめなど、総括的なもの： 第9号・13号

*公開元 URL：http://www.ritsumei-human.com/publications/index/cat_id/35

これらの記録は今後の議論の発展のための貴重な資料であり、プロジェクトの研究成果が地域や社会に広く公開・還元された証でもある。本報告書もまた、インクルーシブ社会の実現、〈学＝実〉連環、あるいはそれらに関わる様々な活動が前進するための一つの礎となることを願ってやまない。

なお、これまでに形成された拠点を基盤として、さらなる〈学＝実〉連環のアイデアに

についての議論がすでに始動しつつある。また、研究者・実務家に加えて市民の力を取り込む「学・実・民」を志向するプロジェクトも始まりつつある。これらの新しい動きによって、本学が私立総合大学としての社会的使命を果たしつつ、真の意味で社会全体を巻き込んだインクルーシブネス、つまり包摂型の社会にむけた大きな運動の発信基地となるよう、私自身も引き続き貢献をしていくことができればと考えている。

2016 年 5 月

「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
プロジェクトリーダー・立命館大学政策科学部教授
稲葉 光行

目 次

■ 最終報告にあたって-----	1
■ 研究成果の概要-----	5
■ 各チームの研究成果報告-----	76
■ 外部評価の結果-----	100

研究成果の概要

※本項目は、事業元の文部科学省の指定した様式で作成しています。

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

平成 25 年度～平成 27 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」 研究成果報告書概要

- 1 学校法人名 学校法人 立命館 2 大学名 立命館大学
- 3 研究組織名 衣笠総合研究機構 人間科学研究所
- 4 プロジェクト所在地 京都市北区等持院北町 56-1
- 5 研究プロジェクト名 インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究
- 6 研究観点 大学の特色を活かした研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
稲葉 光行	政策科学部	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数 32 名

- 9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
稲葉 光行	政策科学部・教授	インクルーシブ社会に向けた対人支援のための総合的実践研究／裁判員制度における証拠・証言の視覚化手法の確立	〈学＝実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進 ／調停・調整援助の修復的支援に関する研究
松田 亮三	産業社会学部・教授	トランスレーショナル対人支援学の方法論	〈学＝実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進
佐藤 達哉	文学部・教授	学融的研究とトランスレーショナル研究の方法論的接合	〈学＝実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進
土田 宣明	文学部・教授	予見的支援におけるトランスレーショナル方法論／高次精神機能の維持と社会性に関する研究	〈学＝実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進 ／高齢者の予見的支援に関する研究
東山 篤規	文学部・教授	感覚・知覚の心理学的研究	認知心理学における予見的支援に関する研究
星野 祐司	文学部・教授	注意・記憶・推論・判断に関する認知心理学的研究	認知心理学における予見的支援に関する研究
八木 保樹	文学部・教授	援助行動の実験社会心理学	援助行動における予見的支援に関する研究
矢藤 優子	文学部・准教授	行動計測機器を用いた幼児の描画に関する発達的研究	障がい者（児）の予見的支援に関する研究

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

岡本 直子	文学部・准教授	表現がもつ治療的意味の研究	障がい者（児）の予見的支援に関する研究
谷 晋二	文学部・教授	伴走的支援におけるトランスレーショナル方法論／発達障がいのある人とその家族への包括的行動支援	〈学=実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進／発達障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
望月 昭	文学部・教授	就学，継続的就労支援，行動的 QOL 拡大に向けた援助方法に関する理論的，実証的研究	障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
中村 隆一	応用人間科学研究科・教授	乳幼児期における発達過程の評価方法の開発	発達障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
荒木 穂積	産業社会学部・教授	人間発達における質的転換期の研究	発達障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
竹内 謙彰	産業社会学部・教授	学童期における発達の質的転換期に焦点を当てた発達の特徴に関する研究	発達障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
津止 正敏	産業社会学部・教授	男性介護者支援の包括的研究	高齢者の伴走的支援に関する研究
小澤 亘	産業社会学部・教授	多文化共生社会の社会学的研究	障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
山本 耕平	産業社会学部・教授	ひきこもる若者の社会的支援策の研究	障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
櫻谷 真理子	産業社会学部・教授	児童虐待とリスクアセスメント・家族援助に関する研究	障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
朝野 浩	教職教育推進機構・教授	障がい者の継続的就労を実現する理論的，方法論的研究	障がい者（児）の伴走的支援に関する研究
中村 正	産業社会学部・教授	修復的支援におけるトランスレーショナル方法論／家庭内暴力に関する臨床社会学・社会臨床学的アプローチ	〈学=実〉連環型研究の方法論の確立と研究テーマ間の連携の推進／被害・加害における修復的支援に関する研究
篠田 博之	情報理工学部・教授	視覚特性の研究とその応用	調停・調整援助の修復的支援に関する研究
松本 克美	法務研究科・教授	潜在的被害の民事責任論，時効論，損害論	調停・調整援助の修復的支援に関する研究
廣井 亮一	文学部・教授	司法臨床論の構築	調停・調整援助の修復的支援に関する研究
村本 邦子	応用人間科学研究科・教授	虐待，性被害など女性のトラウマ，戦争加害・被害によるトラウマの世代間連鎖と平和教育	被害・加害における修復的支援に関する研究
斎藤 真緒	産業社会学部・准教授	男性介護者と家族の実態に関する質的調査研究	被害・加害における修復的支援に関する研究
野田 正人	産業社会学部・教授	子どもと障がい者の非行・犯罪の予防と介入的支援のあり方に関する研究	被害・加害における修復的支援に関する研究

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

小泉 義之	先端総合学術研究 科・教授	トランスレーショナル方法論について の人文的検討／現代生命科学と生命 技術の進展に対応する生命論の探求	〈学=実〉連環型研究の方法論の確 立と研究テーマ間の連携の推進 ／生命倫理や生存学に関わるイン クルーシブ基礎的研究
立岩 真也	先端総合学術研究 科・教授	生老病異の共生に関する研究	生命倫理や生存学に関わるイン クルーシブ基礎的研究
松原 洋子	先端総合学術研究 科・教授	支援技術の倫理的・科学史的理論研究	生命倫理や生存学に関わるイン クルーシブ基礎的研究
天田 城介	中央大学文学部・ 教授	身体の差異に関する倫理的基礎研究	生命倫理や生存学に関わるイン クルーシブ基礎的研究
大谷 いづ み	産業社会学部・教 授	生命倫理の社会的研究	生命倫理や生存学に関わるイン クルーシブ基礎的研究
大川 一郎	筑波大学大学院人 間総合科学研究 科・教授	認知機能低下に関する予防的研究	高齢者の予見的支援に関する研 究
(共同研究機 関等)	なし		

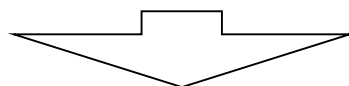
法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



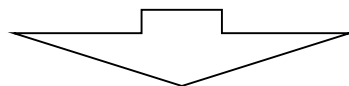
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
子どもと障がい者の 非行・犯罪の予防と 介入的支援のあり 方に関する研究	産業社会学部・教授	野田 正人	被害・加害における修 復的支援に関する研究

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
身体の差異に関する倫 理的基礎研究	立命館大学先端 総合学術研究 科・教授	天田 城介	生命倫理や生存学に関わ るインクルーシブ基礎的 研究

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
立命館大学先端総 合学術研究科・教授	中央大学文学部・教授	天田 城介	生命倫理や生存学に関 わるインクルーシブ基礎 的研究

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【本研究プロジェクトに至る背景】

本学は 2000 年以降、人間科学研究所を中心として、文部科学省の各補助金事業を通じ、高齢者、障害者(児)、(男性)介護者、外国人、といった人たちのウェルビーイングを向上させ、インクルーシブな社会の実現に向けた基礎的・実践的研究を、地域に開かれた手法で実施してきた。また、本学では立命館グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)を展開する中で『法と心理』研究拠点の創成プロジェクトを発足させ、法と人間科学(とりわけ心理学)に関する社会的な重要課題を扱うための学融的研究に、全国に先駆けて取り組んできた。そしてその成果を発展させる形で 2013 年度に発足した R-GIRO「法心理・司法臨床センター」は、本学に所属する多分野の研究者が結集し、研究者と実務家との連携を志向することで、司法被害者サポートや加害者臨床といった、インクルーシブな司法・社会制度のための総合的ワンストップサービス実現に向けた取り組みを始めた。その他にも、当事者が課題を設定しつつ問題を提起し、解決に向かうという研究上の取り組みも活発に推進されてきている。

【本研究プロジェクトの目的・意義・計画の概要】

今回のプロジェクトの目的は、本学におけるこれまでの実績と現在の活動を基盤として、私立総合大学として本学が持つ豊富な知的資源の更なる結集を図ると共に、地域で様々な現実課題に関わる実践家・実務家との協働を追求することで、「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」のための新しい枠組みを創り上げることである。即ち、高齢者ウェルビーイング・自閉症児サークル・学生ジョブコーチ・男性介護者・バリアフリー・加害者支援・司法被害者サポートといったこれまでの研究の高度化をはかるとともに、様々な立場に置かれた人々が、社会的活動への正統的な参加者として位置づけられるために、物理的・社会的・情動的・制度的にどのような設定や支援が最も有効かを組織的・系統的に検討していく。

このように、本プロジェクトは、本学のこれまでの臨床人間科学的な研究の蓄積と、私立総合大学としての学融的な知の結集に加え、地域の実践家・実務家との協働によって、我が国の社会歴史的な文脈に即した新しいインクルーシブ社会のあり方を、広く社会に呈示していくものとするものである。

(2) 研究組織

【プロジェクトの構成】

5つのチームで構成される。方法論を検討し、またプロジェクトの司令塔的役割も果たす①方法論チーム、現場と密接に連携しつつ、対人支援の3つの側面から実践的研究をすすめる②予見的支援チーム、③伴走的支援チーム、④修復的支援チーム、そして基礎的な研究を行う⑤基礎研究チームである。それぞれのチームに若手研究者や大学院生が参画した。

全体では専任教員ベースで 32 名の構成である。各チームは多くとも 10 名以内(専任教員ベース)であり、少人数での密接なコミュニケーションを図ることで確実に成果を達成できる体制を整備した。複数のチームによる研究会や共同研究が行われることもある。

【研究代表者の役割とリーダーズ会議の設置】

研究代表者は、プロジェクト全般を統括し、自らもチームで研究の一つを推進するとともに、チームリーダーの協力を得ながら広いテーマの各研究成果を収斂させる役割を担う。具体的には、後述のリーダーズ会議での方針共有、年に一度の公開研究会の企画・提案、各チームの研究の内容と成果の把握などの役割を果たした。

プロジェクトリーダーと各チームリーダー、それに本プロジェクトの申請母体である人間科学研究所所長を加えたメンバーで、プロジェクトの意思決定機関でもある「リーダーズ会議」を

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

不定期(実績としては2-3ヶ月に1度)に開催し、チーム横断的な連携を強め、拠点形成を確実に遂行できる体制を構築した。各チームリーダーは、チームを統括すると同時に、リーダーズ会議を通してチームとプロジェクトの方向性に差異が出ないように調整する役割を担う。

【研究支援体制】

プロジェクトの事務局が本学研究部衣笠リサーチオフィス内に置かれ、3人の事務職員が配置されている。日常的な事務やイベント運営を行うと同時に、プロジェクトとして逐次発行している学術誌『インクルーシブ社会研究』の編集や、日本語・英語での情報発信などの側面からもプロジェクト運営を補佐する体制が組まれている。

【各チームの概要】

①対人支援における<学=実>連環型(トランスレーショナル)研究の方法論チーム(方法論チーム)

松田亮三をチームリーダーとし、他チームの各チームリーダーと、研究と社会実践との連携(トランスレーショナル)研究を行う2人にプロジェクトリーダーを加えた計7人の研究者で構成される。プロジェクトの司令塔的な役割と各チームでの研究を連携・融合させる役割を担う。

②社会的包摂に向けた予見的支援の研究チーム(予見的支援チーム)

実践的な研究を行う3チームのうちの1つで、機能の低下が予見される人たちを対象として、ウェルビーイングを向上させ、インクルーシブな社会の実現に向けた基礎的・実践的研究を行う。土田宣明をチームリーダーとし、認知・発達・社会・臨床心理学系の研究者計7名で構成される。

③社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム(伴走的支援チーム)

実践的な研究を行う3チームのうちの1つで、1)支援を必要としている当事者に対する直接支援、2)当事者を支援する支援者への支援、3)支援を継続させていくための情報移行の3分野で実践的、理論的研究を行う。谷晋二をチームリーダーとし、発達心理や障がい者(児)支援、引きこもり、外国人児童への学習支援を実施する研究者計10人で構成される。

④社会的包摂に向けた修復的支援の研究チーム(修復的支援チーム)

実践的な研究を行う3チームのうちの1つで、修復的正義・司法を軸にした<学=実>連携をとおして司法と社会の関係の再組成にむかう実践的理論研究を行う。中村正をチームリーダーとし、法学、(法)心理学、加害・被害に関する研究者計8名で構成される。本学の法心理・司法臨床センターと緊密な連携を行っている。

⑤社会的包摂と支援に関する基礎的研究チーム(基礎研究チーム)

インクルージョン(包摂)という課題設定に含まれる困難性や実際の課題と理論的な課題との関係を、哲学・生命倫理学・社会学などでのさまざまな議論の中に位置づけ、学際的に検討する。小泉をチームリーダーとし、生命倫理や哲学、そして「生存学」にかかわる研究者計5名で構成される。本学の生存学研究センターと緊密な連携を行っている。

【若手研究者の参画(PD・大学院生等)】

プロジェクト全体を通し、本学専門研究員(PDに相当)は17人、研究助手相当職が5人(いずれもプロジェクト途中で加入/転出した者を含む)参加している。なお、本プロジェクトでは研究員の独自雇用は行っておらず、上記はいずれも参加教員が各自で確保した雇用原資によって雇用されているものである。ただ、本プロジェクトへ参画したことで若手研究者の研究業績・外部資金獲得状況は飛躍的に伸びており、研究ネットワークも格段に広がった。これらの

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

効果は、次項に示す就職実績にもつながっていると考えられる。

また、教員を通し大学院生からも多くの参加があり、前期課程・後期課程・一貫制博士課程含め 2015 年度は 51 人が参加している。プロジェクト期間中に、5 名が新たに日本学術振興会特別研究員(DC1・DC2)として採用された。期間中に本学の修士課程から他大学(京大・大阪大・広島大など)の博士後期課程へ進学した学生もいる。また、若手研究者の中には、特別研究員の過去採用経験者も多い。

上記若手研究者のうち、6 人がプロジェクト期間中に、3 人が期間終了と同時に、本学または他大学/研究機関の教員/研究職へ就職した。

(3) 研究施設・設備等

本事業で新たに整備された施設はもちろんのこと、過年度までの私立大学学術研究高度化推進事業・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業で整備された施設・設備を研究基盤として活用した。

【施設・設備の概要】

本事業で新たに整備された施設はもちろんのこと、過年度までの私立大学学術研究高度化推進事業・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業で整備された施設・設備を研究基盤として活用した。

本学衣笠キャンパス創思館(465 m²)を、上述の 5 チームで使用している。チームごとにプロジェクト室を 1 室以上配し、若手研究者や大学院生、プロジェクトに関わる実務家等約 70 名が研究スペースとして入れ替わり活用するとともに、ミーティングや分析作業に使用するなど、チームでの研究を遂行するにあたっての拠点となっている。その他、3 つの実験室、9 部屋にまたがる実習・観察室(天井カメラ等の設備を含む)、会議室や共用スペースを備える。

また、大型外部資金を獲得したことにより大学より別の建物(衣笠キャンパス修学館)内にあるプロジェクト室を 1 室(24.3 m²)貸与されており、これも同様の用途で活用した。

【本プロジェクトで多く活用された施設・設備】(全て創思館内。＊印は本プロジェクトで新たに整備されたもの)

①視知覚鑑定のための実験室(実験室3) ＊

「調光専用蛍光灯器具」(色温度や光量を調整できる照明器具)と実験室内外から操作できるコントローラを設置している。「色彩輝度計」「分光放射照度計」といった計測器具も備え、視知覚臨床のための実験が可能となった。中心となって使用しているのは修復的支援チームの研究者であり、例えば犯罪現場を再現した環境下での視覚特性の計測や、その環境下における目撃証言の整合性の検証などに大いに役立っている。実験室は週 4-5 日使用(うち視知覚鑑定実験設備の利用は 1 日 3 時間程度)している。

②多機能ブースと観察設備 ＊

社会臨床実習室とトレーニングルーム4に備えられた天井カメラ(「ドーム型プリセットコンビネーションカメラ」)を通した映像を、多機能ブースのモニタにて確認することで、従前のマジックミラーによる観察に加え、より細部に渡る観察や映像の記録が可能になった。主に伴走的支援チームの発達障がい者(児)支援の研究を行っている研究者が使用しており、月 6-8 回程度(1 回あたり 2-3 時間程度)、PCIT(親子相互交流療法)の実施を行っている。

③会議システム(多文化臨床ラボ) ＊

学内外とのTV会議が可能なシステムを備える。②で言及した天井カメラの映像を、会議先の相手に見せることも可能である。また、多機能ブースを翻訳ブースとして活用することで、同時通訳をつけながら会議を行うこともできる。TV会議の予約を優先としているが、空いている時間はプロジェクトに関わる研究会やミーティングのためにも開放している。

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

※②③の設備一式を「ビジュアルコラボレーションシステム」と呼んでいる。

④支援者支援オフィス *

本プロジェクトは「＜学＝実＞連環型研究」を掲げており、学外の実務家と連携するための窓口として設置した。修復的支援チームの研究者が常駐(平日 9-17 時)し、電話・Eメールでも問合せに対応している。法心理・司法臨床センターと密な連携をとっており、取材対応などもこのスタッフが行うことが多い。さらに、日本版イノセンス・プロジェクト(えん罪救済センター)を発足させるための予備研究を開始し、試行的に相談を受け付けている。電話相談への対応だけでなく、関係者間への連絡や連携調整なども担った。

⑤模擬住居型トレーニングルーム(トレーニングルーム1)

浴室・トイレ・キッチン・食堂・和室などを含む 1LDK の住居を模した部屋で、住居の中での人(高齢者・障がい者・車椅子使用者などを想定)の動きを観察できる施設。過年度までのプロジェクト時点で既に保有していたが、本プロジェクトでも、伴走的支援チームで自閉症児の療育プログラム開発を行う研究者らが使用した。

⑥トレーニングルーム 2, 3

プレイセラピーが可能な部屋。可動式の机・椅子を設置でき、比較的自由に空間を設定できる施設。地域高齢者への認知リハビリテーションの実践のため、毎週月曜日・水曜日・金曜日の午前中に予見的支援チームが使用し、研究データを蓄積すると同時に、研究成果を地域に還元している。

(4)研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

【各チームの成果】

本プロジェクトは、適切な支援によって多様な人々が社会参加できる「インクルーシブ社会」の実現に向けた拠点形成を目的として取り組んできた。各チームごとに、以下のような成果を挙げている。

①方法論チーム

本チームでは、学術研究の発展と対人支援実践の連鎖(トランスレーション)のあるべき姿について、介護者支援等の具体的対人支援サービスの現場を念頭におきつつ情報を収集し、方法論的観点から検討した。また本チームは、病院と大学間で研究協定を締結し、協働的な研究計画の立案とその実施に基づく研究知見の還元を行った。そこでは、日本の医療保健政策における問題点だけでなく、地域住民や実際に勤務する医療スタッフ双方のニーズをとらえた組織的な支援や援助実践の可能性を検討した。さらに、現場での実践研究を推進する 3 チーム(予見的支援、修復的支援、伴走的支援)と連携し、特に国境・文化を越えた支援手法の移転に関する課題を検討した。これらの研究成果については、学会報告の他、公開研究会・連続セミナー・国際研究集会などを主催し発信した。例えば、日英公衆衛生機構比較会議(2013 年 10 月 3-4 日)、“Health Policy and Politics in Diversifying Societies: Asian and Global Issues(*1) (28-29, November, 2014)を本学にて開催した。また修復的支援チームと共同で「東アジア法心理学シンポジウム」を毎年 10 月中旬に企画・開催してきた。

②予見的支援チーム

過年度から継続して行っている大学周辺の地域高齢者を対象とした認知リハビリテーションの取り組み(*2)に加え、主として 3 点の研究を実施した。①音読・計算を主たる媒介とした認知リハビリテーションの継続効果について、これまで蓄積されたデータを分析した。②同志社女子大学・京都府立医科大学と共同して高齢者うつ予防の取り組みに参加し、その介入の

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

効果について、認知機能の変化から分析した。③高齢者の認知的特性について、実験的な研究を実施した。その他、継続して実施している高次精神機能の基礎研究について、諸側面から実験的検討を行った。日本心理学会・日本老年行動科学会を中心とした全国学会においてその成果を発表、また European Congress of Psychology (ECP) (*3), The International Congress of Applied Psychology(*4)において発表を行い国内外への普及も試みた。①の認知リハビリテーションについては、「心理学研究 Vol.85(*5)」,「高齢者のケアと行動科学 Vol.19(*6)」でその成果を公表した。②の高齢者うつ予防については「心理臨床学研究 Vol.33(*7)」で、その成果を公表した。また③の高齢者の認知特性については、「Journal of Motor Behavior Vol.45(*8)」においてその成果を公表した。

③伴走的支援チーム

直接支援、支援者支援、情報移行の3つの試みを実践してきた。直接支援では、総合支援学校の高校生を対象に学生ジョブコーチによる就労支援に関する研究、介護する男性(ケアメン)を対象とした会や集いなどを主催するグループの全国的な実態把握とそこで取り組まれているプログラムの効果検証、日本語の習得に困難を抱える外国にルーツを持つ児童に向けたデジタル教科書政策の在り方の検討児童養護施設退所者へのアフターケアに関する調査、自閉症スペクトラム障害児を対象とする遊びを用いた療育プログラム開発、ならびに、発達における階層-段階理論を基盤とする発達チェックリストの作成が行われた。また、ビジュアルコラボレーションシステムを利用して PCIT(親子相互交流療法)の実施を行った。支援者支援の試みでは、ひきこもりの家族を支援する若者サポートステーションの職員の専門性に関する研究を行った。情報移行の分野では、業務内容改変に参加するセルフマネジメント行動を促進する援助変数、そして支援内容を含んだキャリア形成の推移を情報として残せる機能的ポートフォリオの内容やその運用システムが実証的に検討された。学術報告のほか、研究成果還元の場合として、実務家や被支援者を交えた多くの企画(*9)を開催した。

④修復的支援チーム

本チームでは、様々な社会問題に対する「修復」のあり方を検討した。その主なものとしては、(1)情報の不均衡と「情報の正義」に関わる諸問題の整理、(2)東日本大震災の法的救済の心理-社会的検討、(3)被害者支援における大学らしいワンストップサービスの提供、(4)PTSD の時効に関する法と人間科学の見地からの検討、(5)司法臨床・加害者臨床と「治療的司法」の研究、(6)社会復帰のあり方の研究、(7)心理学鑑定に基づく司法被害救済、などが挙げられる。これらの成果は次のような形で発表した。2014年5月に国際サイコセラピー学会(上海市)で震災と回復にかかわるテーマで発表した。同年7月に国際シンポジウム「取調べと可視化—新しい時代の取調べ技法・記録化と人間科学—(*10)」を開催し、その記録を『インクルーシブ社会研究』第7号(*10)としてまとめた。同年8月にユースワーカー養成公開研究会「ユース・スタディーズ(若者学)構築に向けて(*11)」, 同年11月には「家族のかたちシンポジウム—里親制度・生殖医療／多様な家族を形成するための関係機関との連携と協働に向けて(*11)」を開催した。

⑤基礎研究チーム

基礎研究として(1)アーカイビング構築(2)公開研究会等の開催による「連帯」「共生」の理論的かつ実学的な検討を中心におこなった。それぞれの結果は次の通り。(1)日本の障害当事者による包摂／排除・支援への取組みに関する紙媒体資料をPDF化し、デジタル・アーカイビングの構築につとめた。また、東アジアについて韓国・中国における障害者に関する資料集積、一部を翻訳しウェブサイトに掲載した。(2)現代における「連帯」や「共生」をテーマとした公開研究会として、障害学国際セミナー(*12), 特別講義「生存／社会の現代史(*13)」,

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

公開研究会「労働／生存——外国人労働者をめぐる運動と／の連帯」、映画上映・講演会「陸軍登戸研究所」^(※14)のほか、株式会社むつき庵他と「老いを支える技法」^(※15)、国際学術企画「生存学の社会学」^(※16)、障害学国際セミナー（於：韓国ソウル市）等を開催した。以上の成果については、報告書『インクルーシブ社会研究』^(※17)やウェブサイト(www.arsvi.com)において発信し、ウェブサイトでは年間 1000 万アクセス数を超える実績を残すことができた。

【研究成果の公開】

「13 研究発表の状況」で記載する学術的成果発表のほか、「14 その他の研究成果等」で後述するように、より一般向けにも、Web 公開を含め積極的に公開を行っている。

逐次刊行物『インクルーシブ社会研究』^(※17)は、プロジェクトの成果公開用の学術誌として、3 年間で 15 号を発行した。その内容は、シンポジウムの記録、これまでの活動のまとめ、書き下ろしの論考など様々である。全て研究所 HP 上でオープンアクセスに対応しており、全文を PDF で閲覧することができる。

【公開研究会】

当プロジェクトの母体である人間科学研究所の定例研究会であった年次総会を本プロジェクトの定例研究会と位置づけ、各年度に大規模な公開研究会を実施^(※18)した。毎年度、チームリーダーを中心とした全体企画を設け、プロジェクトの進捗について確認・公開を行ったほか、2 年目・3 年目は実際に実務家を招聘するなど「研究者と実務家の連携」を鍵概念とした各チームによる企画を実施した。2 年目・3 年目は外部評価委員（後述）も招聘した。また、毎年度、若手研究者を中心としたポスターセッションの時間を設け、3 年間で 54 件の報告が行われた。

＜優れた成果が上がった点＞

以下の点は、特に顕著な成果として特筆できると考える。学術的な説明については最終報告書で詳細に記載する。

①生活困窮者を支援するための医療実践に関するアクション・リサーチ（「方法論」チーム）

京都市内の中規模病院と研究協定を締結し、研究者—実務家で構成される共同研究プロジェクト・チームを形成した。研究者・実務家の共同研究会議を定期的に行い、医療現場にて医療従事者—患者間で生じるコンフリクトに関する課題、とりわけ社会的孤立や経済困窮、独居高齢者など疾病を患うことで生活基盤を大きく損なう可能性のある患者への医療的支援のあり方に関する課題を洗い出した。また、医療機関に勤務する医療従事者と通院する地域住民との両方にアプローチする調査を実施することにより、医療従事者が患者に対応する際に抱える困難や戸惑いだけでなく、通院患者が日常生活や医療受診場面で抱える困難や不安を検討することで、当該医療機関にて生じる「困難性」の実態を明らかにした。

②学習活動の遂行による健康高齢者の認知機能の改善（「予見的支援」チーム）

健康な高齢者に対して音読と算数問題を含んだ新しい認知訓練プログラムを導入して、1 年半に及ぶ日常的な場面での認知訓練を行った。その結果、訓練に参加したグループは、短期記憶や作業記憶といった記憶機能、あるいはストループ課題で測定する抑制機能において、事前テストから 1 年半後の事後テストで有意な改善が見られた。特別な介入を行わない対照群の高齢者では、1 年半後には記憶機能と抑制機能において有意な低下が観察された。こうして本研究で採用したような認知訓練のプログラムは、訓練課題とは関係していない認知機能への望ましい転移効果をもたらしており、地域に暮らす高齢者の認知機能の改善に効果的であることが確認された。

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

③台湾の障害のある子どもを持つ家族を支える支援者への支援(「伴走的支援」チーム)

国際的な交流、及び〈学＝実〉の連環法研究として、日本で開発された保護者向けのメンタルヘルス支援プログラムを台湾での支援団体に提供した。結果、中国語化されたプログラムは、保護者のメンタルヘルスの改善に貢献することが実証的に示され、スタッフへのプログラムの提供は、スタッフのメンタルヘルスの向上に寄与し、スタッフがプログラムを実施することに前向きであることが示された。成果は国際学会で発表している。

④えん罪救済のためのプロジェクト設立(「修復的支援」チーム)

「法と心理学」領域における学実連携研究の一環として、冤罪救済・誤判を防ぐための政策・法律の提言などを目的としたプロジェクトを、学内外の研究者・実務者(弁護士等)と連携して発足させた(2016年4月、本研究で整備した施設を利用し、本学を拠点とした「えん罪救済センター」として発足)。法曹関係者や研究者が個別具体的に協同で実施してきた取り組みを、研究者・実務者の連携による明確なプロジェクトとして位置づけるものであり、米国の同様組織「イノセンス・プロジェクト」の日本版として、米国や台湾のえん罪被害者支援組織との国際的な連携も始まりつつある。DNA 鑑定や供述の信用性分析などの科学的立場を軸足に、えん罪被害者救済のためのワン・ストップ・サービスの確立を目指すものであり、社会・メディアからの注目も大きい。

⑤外国人排除／包摂に関する基礎研究推進(「基礎研究」チーム)

ヘイトスピーチなど外国人をめぐる排除／包摂に関する公開研究会を開催した。「労働／生存——外国人労働者をめぐる運動と／の連帯」(2014年1月開催)では、日本の外国人労働者問題やフランスでの移民の空き家占拠をめぐる生存運動について報告・議論した。「ヘイトスピーチに抗する——路上・学校・大学」(*19)(2015年7月開催)では、映画上映とともに大学におけるキャンパスヘイトスピーチコード、京都での排斥・抵抗運動に関する報告・議論がなされた。「ワークショップ「マイノリティをめぐる思想／政治——オーストラリアにおける白豪主義・ネオリベラリズム・アジアとの関係から」(*20)(2015年10月開催)では、アボリジニや移民問題におけるマイノリティ政策について議論がなされた。これらの成果は雑誌『生存学』第9号に特集(「Hate and War」「オーストラリア・マイノリティ・リポート」)として刊行した。

<課題となった点>

外部評価(後述)でも指摘されたとおり、学術的な発表のみならず、研究成果をより一般市民に届ける努力をしたい。全体が分かる総説的な刊行物の発行や、より一般向けの研究成果還元企画開催などが挙げられる。また、研究資金をベースにした学実連携実践の中には、プロジェクト終了とともにその活動を縮小せざるをえないものもある。今後、本研究から生まれた多くの活動を社会の中に着実に根付かせ、持続可能な活動として成長させる努力が必要である。

<自己評価の実施結果と対応状況>

毎年度、申請母体となった人間科学研究所の重点プロジェクトとして、学内の研究高度化補助金に申請した。学内でも促進されている若手研究者の参画が多いこと、補助金を受けて改修した施設が積極的に活用されていることなどが評価され、3年連続で満額の採択となったことから、本学における対人支援研究に大いに貢献したと考えている。獲得した研究費は、公開研究会の資金としたり、若手研究者使用を念頭にチームごとに配分した。

プロジェクト内においては、前述のリーダーズ会議を不定期に開催し、チーム間での意見交換を行うことにより相互に進捗を評価し合うことができた。また、前述したとおり年に一度、全

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

体で公開研究会を開催したこと、そのシンポジウムの記録を含むプロジェクト逐次刊行物『インクルーシブ社会研究』^(※17)をオープンアクセスに置いていることなどから、プロジェクト期間終了後も含めて内外からの批判的検討を十分に可能としている。

＜外部(第三者)評価の実施結果と対応状況＞

事業終了後も継続的に研究を発展させていくことを目指し、以下 4 名の有識者による外部評価体制を構築した。委員選定にあたっては、テーマに近い研究分野の研究者と、＜学＝実＞連環の「実」の観点からの評価を強化することを念頭に置いた。

外部評価委員(五十音順): 泉紳一郎氏(国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター長)、河合克義氏(明治学院大学社会学部教授)、佐藤友美子氏(学校法人追手門学院成熟社会研究所所長)、山本淳一氏(慶應義塾大学文学部教授)。

各委員に対して、プロジェクトの概要理解とインタラクティブなアドバイスの場として、大規模な公開研究会 2 回(2014 年度・2015 年度)に招聘した。研究会の最後にコメントおよび今後の活動へのアドバイスをいただくとともに、研究会終了後には議論の場を設け、その後のプロジェクト活動に反映させ、事業後の活動へも生かすこととしている。

研究会への招聘に前後して、2015 年 11 月時点での暫定版報告書、学術誌『インクルーシブ社会研究』^(※17)をはじめ、プロジェクトにかかわる若手研究者の就職状況などの資料データなどを提供し、総合的に評価を依頼した。最終年度の 2016 年 2 月に各委員から最終評価報告書が提出され、詳細は研究成果報告書本編に収録しているが、概要を以下にまとめる。

【研究組織についての意見】

- ・ 基礎学術研究と実践研究の連携を推進するため、分野を融合し、新しく設定したテーマに関するプロジェクトを軸にした組織作りをしている点がユニークである。
- ・ 現場の実務者との協働による研究デザインや研究実施、さらには成果の社会実装をめざそうとする体制が、研究支援体制も含めてとられている。研究体制は機動的かつ重層的であり、既存の研究組織とも良く連携がとれている。

【研究施設等についての意見】

- ・ 補助金の対象施設が、実験的側面を含む研究活動や実務の外部組織との連環活動、学会やアウトリーチ活動などを、5 チームが揃って一元的に行える施設として機能している。
- ・ 幼児から高齢者、障害を持つ人たちとの協働の場づくりという目的を持ち、積極的に外部に開いている点、学内で社会的実践を支援する施設を作っていることがユニークである。基礎研究のデータ収集も可能なつくりになっている。

【研究成果等についての意見】

- ・ 定期的なシンポジウムの開催とその総括、国際的な招待講演の成果など、手際よく、外部に向けて分かりやすく発信されている。
- ・ 対人支援のクロノロジカルな場面について「予見」「伴走」「修復」というフレーミングができしており、様々な対人支援の 이슈 に応じて、特に実務現場において適用可能な成果の創出が期待される。
- ・ 研究成果全体を 1 冊にまとめ、公刊することも必要ではないか。個々の研究班ごとの詳しい成果物のみならず、全体が分かるやさしい内容のものも必要と思われる。研究成果を一般の人の目に触れ、理解してもらう工夫も必要であろう。

【その他】

- ・ 若手研究者の登用とその就職実績は高く評価できる。参画する大学院生の多さも特筆に値する。実践性の高い人文社会科学分野の教育研究人材の養成に寄与している。
- ・ えん罪防止にむけて過去の重大事件の膨大な裁判記録を ICT での援用により分析する、犯罪現場に関する目撃記憶の精度を認知科学的手法により検証する、といった従来は自

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

然科学的方法論があまりみられなかった領域にあらたなアプローチを導入しようとしており、文理融合というという意味で興味深い。

- 研究成果の実質的な発信のため、シンポジウム等の開催に当たり、学外のより広い範囲の研究者との協働し、もっと学術ワールドおよび実践現場に広くアナウンスし、各所からの参加を促してほしい。

【総合所見】

- 「大学の特色を活かした研究」という事業類型にも則った取り組みがなされ、本研究の目的に照らし十分な成果があがっていると思料される。
- 研究が学際的であり、なおかつ今回の研究が、＜学＝実＞連環型であることがオリジナリティに富むものであり、高く評価したい。膨大な研究の蓄積がすでにあるので、次は、ぜひ分かりやすい本を刊行し、社会に発信することを求めたい。
- ヒューマンサービスというミッションのもと、ユニークなく学＝実＞連携研究が積み上げられてきたと思う。実践領域に向けては、より広い範囲に向けての発信と双方向的なPDC Aの評価が必要であろう。
- 人的・物理的・財政的リソースを最大限に活用して推進されており、研究者には実態に即した研究が、また実務者だけでは難しかった研究的アプローチが可能になり、大きな成果を上げている。今後は研究を深めると共に、市民への研究成果の効果的な発信にも期待したい。

以上のように、研究の独創性、研究体制、研究施設活用、若手研究者育成等の面において概ね高い評価を得たといえる。一方で、研究成果の市民への還元について今後のさらなる発信を求められるなど、今後の課題も指摘された。今回創出された研究成果を、学術的発表の場のみならず一般社会へ還元するため、今回の申請母体となった人間科学研究所にもその課題を引き継ぎ、今回のプロジェクトの総括と今後のプロジェクト展開に生かすこととした。

＜研究期間終了後の展望＞

【研究の継続について】

本プロジェクトの母体となった本学人間科学研究所では、長く「対人援助」を中核課題として研究を展開しており、本プロジェクト終了後も研究所としてその延長線上にある課題に取り組む予定である。特に、「インクルーシブ社会」「社会的包摂」といった概念を、一般的に言及される障害者関連の問題にとどまらず、今回のプロジェクトで確立した予見的支援、伴走的支援、修復的支援など、より広い概念で捉えるという立場は、今後も研究所として引き継いでいく。2016 年度以降は、「法と対人援助」をテーマとし、対人援助にかかわる諸制度が抱える課題を検討する新たなプロジェクトを設定し、新たな大型外部資金の獲得を狙う。本プロジェクトで整備された施設・設備は、このプロジェクトにて引き続き使用する。

【外部との新たな研究展開について】

一方で、今回、各チームが一定の研究成果を挙げたことで、研究所外・学外の研究者からも注目されることとなった。そのため、本プロジェクトのメンバーの一部と、その研究所外の新たな研究者とが協同して、今回のプロジェクトとは焦点の異なる研究を行う可能性も出てきている。例えば、予見的支援チームの研究者の一部は、ロボティクスに代表される情報理工学分野の研究者と協同し、認知科学にかかわる研究プロジェクトを立ち上げた。また、修復的支援チームの研究者を中心として、法と心理学・司法臨床に関わる学外との共同研究体制が既に構築されており、今後、より堅固な研究拠点へと発展する可能性もある。基礎研究チームは今回のプロジェクトでも本学生存学研究センターと連携しており、今後もその連携は継

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

続される。これら、本プロジェクトから派生する新たな研究グループと後継プロジェクトとは、今後も研究交流を活発にし、研究会の共同開催や合同で外部資金の獲得を目指す等、お互いの研究テーマを深めるためにより緊密な連携をとっていく予定である。

＜研究成果の副次的効果＞

【実用化】

①本プロジェクトでは、「法と心理学」領域における学実連携研究の一環として、心理学と情報科学の融合による新しい供述分析手法の確立と、それを支える基盤ツールの開発に取り組んできた。この手法・ツールは、本プロジェクト代表の稲葉光行らによって、実際の裁判に関わる供述分析や意見書作成に用いられ始めている。またこれらの手法・ツールによって分析された結果が、刑事裁判での弁護団による弁護方針策定の参考にされはじめるなど、研究の成果が実用化に近い段階に至っている。

②修復的支援チームの松本克美は、一定の時間が経過した後に被害が顕在化する公害や児童期の性的虐待被害の事案について、民法上の除斥(時効)期間を延期すべきという問題提起を行ってきた。松本が意見書を提出した児童期の性的虐待被害に関する民事訴訟では、札幌高裁がうつ病発症時を起算点として賠償金支払いを命ずる画期的な判決を下した。今後の公害・薬害・児童虐待に関わる訴訟に大きな影響を与える成果である。

③方法論チームのサトウタツヤ・安田裕子が開発してきた質的研究法のひとつである複線径路等至性アプローチ(The Trajectory Equifinality Approach: TEA)を用いて、モノづくり企業における実用化カリキュラムに関する開発する依頼があり、某企業との共同研究を開始した。なお、産学連携にともなう倫理的配慮の関係から、現時点では詳細を伏せることとする。

【メディアからの注目】

修復的支援チームがプロジェクト外の研究者・実践家と連携して進めている、えん罪被害者の救済のための団体立ち上げについて、特にメディアからの注目が大きかった。それも含め、プロジェクトの活動や、関係する実践的活動がメディアに取り上げられた例について、新聞記事等を別添する(添付資料1)。

【教育的効果】

本プロジェクトには、若手研究者のみならず、大学院生からも 51 人(2015 年度)の参加があり、教育的効果も大きい。その出身研究科は多種多様であり、研究者志望者が比較的多い社会学研究科・文学研究科(後期・前期課程)、対人援助に関わる実務職を志望している学生や、実務経験を持つ社会人学生が多い応用人間科学研究科(修士課程)、障がいや各種運動の当事者研究を行う社会人学生を多く擁する先端総合学術研究科(一貫制博士課程)など、「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」を掲げた本プロジェクトにふさわしいメンバー構成となった。

プロジェクトが主催した公開研究会へは、こうした大学院生をはじめ、学内でも授業内でのアナウンスを含め広く広報しており、例えば2014年度の公開研究会(2015年1月開催)では、来場者の 39%を本学および他大学の学生が占めた。このように、当該分野に興味を持つ学生に対し、研究や実践への入口として大きな役割を果たしたと考えている。

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- | | | |
|--------------------|-------------------------|-----------------|
| (1) <u>対人支援</u> | (2) <u>インクルーシブ社会</u> | (3) <u>認知</u> |
| (4) <u>障がい者(児)</u> | (5) <u>修復的正義</u> | (6) <u>生命倫理</u> |
| (7) <u>法と心理</u> | (8) <u>トランスレーショナル研究</u> | |

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記, 11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【テーマ① 方法論チーム】

No.	著者名	論文名	査読	掲載誌名(巻)	頁	発表年月
1	由井秀樹	体外受精の臨床応用と日本産科婦人科学会の「見解」		生存学研究センター報告(25号)	12-30	2016年3月
2	由井秀樹	家族の形成と解体—不妊クリニックへの通院を経て里子を迎えた養育里親の語りから		生存学研究センター報告(25号)	166-179	2016年3月
3	稲葉 光行・抱井 尚子	混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ		看護研究(49巻1号)	25-36	2016年2月
4	由井秀樹	戦前・戦中期東京府における医療施設出産	○	保健医療社会学論集(第26巻第2号)	43-53	2016年2月
5	Ryozo Matsuda	Social Health Insurance as a Health Safety Net in Japan, the US, and France :An introduction		Ritsumeikan Social Sciences Review(51巻3号)	3	2015年12月
6	由井秀樹	男性不妊の不可視化と母性保護概念—非配偶者間人工授精は誰のための処置だったか?		家族研究年報(第40巻)	7-23	2015年12月
7	松田亮三	「社会保障・税一体改革」後の医療政策		大原社会問題研究所雑誌(685号)	5-17	2015年11月
8	松田亮三	編集長としての4年間を振り返って	○	立命館人間科学研究(32巻48号)	1-2	2015年8月
9	サトウタツヤ	TEA(複線径路等至性アプローチ)		コミュニティ心理学研究	52-61	2015年8月
10	木戸彩恵・荒川歩・鈴木公啓・矢澤美香子	幼児期から青年期にかけて衣服を選び、着る行為の変容—女子大学生を対象としたインタビュー調査から—	○	立命館人間科学研究(第32号)	85-103	2015年8月
11	安田裕子	コミュニティ心理学における TEM/TEA 研究の可能性		コミュニティ心理学研究(19巻1号)	62-76	2015年8月
12	サトウタツヤ	文化心理学から見た食の表現の視点から食文化とその研究について考える		社会システム研究	197-109	2015年7月
13	山田全啓・松田亮三・中原俊隆	イングランドの公衆衛生改革		医学のあゆみ(253巻2号)	203-205	2015年4月
14	高砂美樹・鈴木朋子・荒川歩・サトウタツヤ	オーラル・ヒストリーを用いた日本の心理学史の試み		応用社会学研究(25巻)	15-24	2015年3月
15	矢口幸康・サトウタツヤ・高砂樹	掲載論文と大会実績からみた日本基礎心理学会30年の歩み		基礎心理学研究(33巻2号)	162-166	2015年3月
16	赤阪麻由・サトウタツヤ	慢性の病いをもつ研究者が主宰する病者の集いの場で生成される意味	○	質的心理学研究(14号)	55-74	2015年3月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

17	神崎真実・サトウタツヤ	通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか——重要な場としての職員室に着目して	○	質的心理学研究(14号)	19-37	2015年3月
18	神崎真実・サトウタツヤ 福田茉莉	通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか——重要な場としての職員室に着目して	○	質的心理学研究(14)	19-37.	2015年3月
19	橋本祐子・熊木悠人・滑田明暢・勝間理沙・小林将太・野本玲子・戸田有一	道徳性発達研究の最新課題と実践への見通し—Killen, M., & Smetana, J. G. (Eds.) 2014 “Handbook of Moral Development (2nd ed.)” をめぐって—	○	エデュケア(第35号)	45-49	2015年3月
20	山崎優子	学校教育における裁判知識学習の効果および学習の必要性に対する大学生の認識	○	同志社大学教職課程年報	16-26	2015年3月
21	伊藤大輔・稲葉光行	複合的媒介人工物としてのビデオ作品がもつ意味—平成26年度八幡子ども会議委員による市長提言を事例として—		日本教育工学会研究報告集(15巻1号)	195-200	2015年2月
22	由井秀樹	小児科医の出産への接近——戦前・戦中期日本における未熟児医療の展開から	○	立命館人間科学研究(第31号)	75-81	2015年2月
23	安田裕子	主題と変奏—臨床便り(12)TEA とコンポジションワーク		臨床心理学第15巻第1号 特集 シリーズ・今これからの心理職① これだけは知っておきたい医療・保健領域で働く心理職のスタンダード(金剛出版)(15巻1号)	140	2015年1月
24	松田亮三	グローバリゼーションと健康・医療:新しい研究領域		日本医療経済学会会報(31巻1号)	1-2	2014年12月
25	松田亮三	グローバル化と医療政策分析:新しい課題		日本医療経済学会会報(31巻1号)	3-12	2014年12月
26	サトウタツヤ	傷痍軍人職業顧問としての心理学者		編集復刻版『傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成』(1巻)	3-10	2014年12月
27	Brocklehurst, P., Nomura, M., Ozaki, T., Ferguson, J. R., Matsuda	The development and piloting of a leadership questionnaire for general dental practitioners: preliminary results from the North West of England and Tokyo.		British Dental Journal(217巻E17号)		2014年11月
28	稲葉光行・指宿信・渡邊弘	法情報教育と法学教育のいまと未来		情報ネットワーク・ローレビュー(13巻2号)	161-182	2014年10月
29	若林宏輔・稲葉光行・斎藤進也	高度情報化社会における法心理学領域の展望		法と心理(14巻1号)	82-86	2014年10月
30	山田早紀・脇中洋・稲葉光行・村山満明・大倉得史	公判廷における尋問者と供述者のディスコミュニケーション		法と心理(14巻1号)	63-70	2014年10月
31	安田裕子・林久美子・佐伯昌彦・山崎優子・福井厚・綿村英一郎	犯罪被害者をとりまく問題—臨床心理学、法社会学、法心理学からの検討		法と心理(14巻1号)	56-62	2014年10月
32	若林宏輔・瀬野貴生・サトウタツヤ	公判前の事件報道に対して理論的根拠を含む裁判官説示が与える影響	○	法と心理(14巻1号)	87-97	2014年10月
33	川本静香・渡邊卓也・小杉考司・松尾幸治・渡邊義	うつ病アナログ群の特徴について:抑うつつの連続性検討の観点から	○	パーソナリティ研究(23巻)	1-12	2014年8月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	文・サトウタツヤ					
34	サトウタツヤ	司法臨床としての情状心理鑑定		現代法律実務の諸問題 (平成 25 年度巻)	909-92 7	2014 年 8 月
35	安田裕子	質的データをどう扱うか—質的研究の手 ほどき		臨床心理学増刊第 6 号 臨床心理職のための 「研究論文の教室」—研究 論文の読み方・書き 方ガイド(森岡正芳・大 山泰宏(編), 金剛出版) (6 号)	94-100	2014 年 8 月
36	山崎優子・サトウタツヤ・ 稲葉光行・斎藤進也・徳永 留美・安田裕子・上村晃 弘・木戸彩恵・若林宏輔・ 福田茉莉・滑田明暢・山田 早紀・川本静香・中妻拓 也・春日秀朗・神崎真実・ 中田友貴・山口慶江	ひらめき☆ときめきサイエンス「模擬法廷 に来て裁判に参加してみましょう」の実践 および論考	○	立命館人間科学研究 (30 巻)	87-96	2014 年 7 月
37	中田友貴・サトウタツヤ・ 福田茉莉	被告人の国籍が裁判員の量刑判断に与 える影響	○	立命館人間科学研究 (30 巻)	45-63	2014 年 7 月
38	松田 亮三	イングランドのNCD対策:心血管アウトカ ム戦略を中心に		公衆衛生(78 巻 5 号)	307-31 1	2014 年 5 月
39	松田亮三	「診療報酬」の呪縛を越えて—実りある社 会的議論に向けて		大阪保険医雑誌(571 号)	15-19	2014 年 4 月
40	Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J.	From Describing to Reconstructing Life Trajectories:How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena		Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key	93-104	2014 年 4 月
41	松田亮三	研究所の発信機能—オープン化のさらなる 検討を		いのちとくらし研究所報 (46 号)	65	2014 年 3 月
42	村山満明・稲葉光行・山田 早紀	法廷における尋問のトピックとディスコミ ュニケーションの関係の分析		大阪経大論集(64 巻 6 号)	121-13 2	2014 年 3 月
43	伊藤大輔・稲葉光行	子どもを中心とした地域創造のための協 働学習—平成 25 年度八幡子ども会議の 事例を中心に—		日本教育工学会研究報 告集(14 巻 1 号)	277-28 4	2014 年 3 月
44	日高友郎・水月昭道・サト ウタツヤ・福田茉莉	サイエンスカフェにおけるファシリテータ ーの集団維持機能:市民—科学者間の 会話を支える要因に注目して.	○	実験社会心理学研究, 54(1)	11-24.	2014 年 3 月
45	Ryozo MATSUDA and Monika STEFFEN	Learning from variations in institutions and politics: the case of social health insurance in France and Japan		Sciences Po Grenoble working paper(14 号)	1-28	2014 年 2 月
46	山田全啓・土井渉・松田亮 三・中原俊隆	イングランド公衆衛生行政官・研究者の 保健所視察および日英公衆衛生機構比 較会議に参加して		公衆衛生情報(43 巻 11 号)	6-8	2014 年 2 月
47	山崎優子・石崎千景・サト ウタツヤ	死刑賛否に影響する要因と死刑判断に 影響する要因	○	立命館人間科学研究 (第 29 号)	81-94	2014 年 2 月
48	山崎優子・仲真紀子・石崎 千景・サトウタツヤ	高齢者の自己や他者に対する信頼感が 事件被害のリスク認知に及ぼす影響	○	立命館人間科学研究 (第 29 号)	3-17	2014 年 2 月
49	春日秀朗・宇都宮 博・サト ウタツヤ	親の期待認知が大学生の自己抑制型行 動特性及び生活満足感へ与える影響	○	発達心理学研究(25 巻 2 号)	121-13 2	2014 年
50	日高友郎・水月昭道・サト ウタツヤ	サイエンスカフェにおけるファシリテータ ーの集団維持機能	○	実験社会心理学研究 (54 巻 1 号)	11-24	2014 年
51	青野篤子・五十嵐靖博・滑 田明暢	社会に立ち向かう心理学であるために	○	心理科学(34 巻)	1-10	2013 年 12 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

52	P. Brocklehurst ¹ , M. Nomura, T. Ozaki, J. Ferguson & R. Matsuda	Cultural differences in clinical leadership: a qualitative study comparing the attitudes of general dental practitioners from Greater Manchester and Tokyo		British Dental Journal(215 巻 E19 号)		2013 年 11 月
53	松田亮三	健康政策の新たな展開—状況、目標、実施—		東海病院管理学研究会年報(平成 24 年度号)	35-38	2013 年 11 月
54	サトウタツヤ	質的研究と HCI の豊かな接点と未来へむけて		ヒューマンインタフェース学会誌(15 巻 4 号)	35- 40	2013 年 11 月
55	安田裕子	女性の身体と生殖—進展する生殖補助医療とその選択のなかで		女性ライフサイクル研究第 23 号 フェミニズムはどこへ(23 号)	79-86	2013 年 11 月
56	木戸彩恵・サトウタツヤ	文化的記号と文脈が織りなす心理 —東日本大震災由来の風評克服のために	○	立命館人間科学研究(28 号)	115-126	2013 年 10 月
57	綿村英一郎・板山昇・佐伯昌彦・山崎優子・吉井匡	死刑判断に関する実証的考察	○	『法と心理』(13 巻 1 号)	98-103	2013 年 10 月
58	松田亮三	政策・実践上の重要概念としての普遍主義的給付		いのちとくらし研究所報(44 号)	1	2013 年 9 月
59	上村晃弘・サトウタツヤ・福田茉莉	東日本大震災後のソーシャルメディアにおける地震予知流言	○	立命館人間科学研究(27 号)	113-120	2013 年 7 月
60	Nameda, A., Wakabayashi, K., Nakatsuma, T., Hatano, T., Saito, S., Inaba, M., and Sato, T.	Possibilities of narrative visualization: Case studies of lesson-learned-oriented archiving for natural disaster		Conference Abstracts of Digital Humanities 2013	322-326	2013 年 7 月
61	サトウタツヤ	複線径路・等至性モデル、世界を駆ける(2) —対人援助学&心理学の縦横無尽(10) —		対人援助学マガジン(13 号)	94-103	2013 年 6 月
62	Matsuda, R. and Nakahara, T.	Changing roles of social health insurers in delivering public health services. :		Articles from the 13th World Congress on Public Health (April 23-27, Addis Ababa, Ethiopia)(283 巻 286 号)		2013 年 5 月
63	サトウタツヤ	心理学史という文脈からみた森田正馬の活動		森田療法学会雑誌(24 巻)	25-33	2013 年 4 月

【テーマ② 予見的支援チーム】

No.	著者名	論文名	査読	掲載誌名(巻)	頁	発表年月
64	土田宣明	運動抑制の加齢変化-反応タイプの違いに注目して-		科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書		2016 年 3 月
65	東山 篤規	斜面をつくるきめの勾配刺激の複合性: J. J.ギブソンの遺した課題		立命館文学(望月昭教授退職記念論集)(646 号)		2016 年 3 月
66	東山篤規・山崎校	Anisotropic perception of slant from texture gradient: Size contrast hypothesis		Attention, Perception, & Psychophysics(78/2 巻)	647-662	2016 年 2 月
67	日下菜穂子・石川真理子・高橋伸子・桂薫・小橋弘子・下村篤子・増田香織・土田宣明	生きがい創造プログラムによる介入の高齢女子受刑者の主観的 well-being おける影響(*7)	○	心理臨床学研究, Vol.33(3)(33 巻 3 号)		2015 年 8 月
68	藤戸麻美・矢藤優子	幼児におけるうそ行動の認知的基盤の検討	○	発達心理学研究(26 巻 2 号)	135-143	2015 年 6 月
69	都賀美有紀・星野祐司	順序の再構成課題における学習直後と遅延後の語長効果	○	認知心理学研究(12 巻 2 号)	121-128	2015 年 4 月
70	土田宣明	運動抑制からみた加齢効果		立命館文学(641 号)	44-52	2015 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

71	東山篤規・村上嵩至	The effects of luminance, size, and duration of a visual line on apparent vertical while the head is being inclined in roll		Attention, Perception, & Psychophysics(77 巻 2 号)	681-691	2015 年 3 月
72	東山篤規	見かけの直線的な大きさと角度的な大きさ		立命館文学(藤健一教授退職記念論集)(641 巻)	32-43	2015 年 3 月
73	星野祐司	Windows による画像の短時間提示: SharpDX と Direct3D 9 の利用		立命館文学(641 号)	53-68	2015 年 3 月
74	矢藤優子・廣瀬翔平・Wallon Philippe・Mesmin Claude・Jobert Matthieu	d2-R テストを用いた日本人小学生の視覚的注意の測定ー心理学的臨床検査としての日本への導入を目指してー	○	パーソナリティ研究(23 巻 2 号)	91-95	2014 年 12 月
75	吉田甫・孫琴・古橋啓介・土田宣明・高橋伸子・石川眞理子・坂口佳江・小田博子・吉村昌子・大川一郎	高齢者に対する認知訓練の効果性: 立命館大学での 10 年間の試み(*6)	○	高齢者のケアと行動科学(19 巻)	2-16	2014 年 11 月
76	吉田甫・古橋啓介・土田宣明	健康高齢者に対する認知訓練の現状と課題: 訓練の転移(*6)	○	高齢者のケアと行動科学(19 巻)	76-89	2014 年 11 月
77	杉本理佐・岡本直子	集団個人法と個別法でのコラージュによる気分変容について-POMS 短縮版を用いて-		日本芸術療法学会誌(43 巻 2 号)	37-45	2014 年 10 月
78	吉田甫・孫琴・土田宣明・大川一郎	学習活動の遂行で健康高齢者の認知機能を改善できるかー転移効果からー(*5)	○	心理学研究(85 巻 2 号)	130-138	2014 年 6 月
79	東山篤規・村上嵩至・佐藤敬子	文章要約課題遂行の間に提示された生活音の妨害感について		環境心理学研究(2 巻 1 号)	1-9	2014 年 3 月
80	矢藤優子・杉本五十洋	保育園年長児におけるオートバイを使用した教育実践に関する実証的研究		立命館文学(636 巻)	122-130	2014 年 3 月
81	Tsuchida, N., Morikawa, S., Yoshida, H. & Okawa, I.	Motor inhibition in aging: Impacts of response type and auditory stimulus(*8)	○	Journal of Motor Behavior(45 巻 4 号)	343-350	2013 年 7 月
82	岡本直子	幼児期におけるファンタジーの諸相ーモンテッソーリ教育の見解と心理学的考察を踏まえてー		モンテッソーリ教育(45 号)	87-96	2013 年 5 月

【テーマ③ 伴走的支援チーム】

No.	著者名	論文名	査読	掲載誌名(巻)	頁	発表年月
83	谷 晋二	先延ばし行動を持つ大学生にアクセプタンス&コミットメント・セラピーの心理教育を実施した症例報告		行動療法研究(42 巻 2 号)		2016 年 2 月
84	重富紗希・荒木穂積・小林里帆・荒井庸子・高尾美妃・竹内謙彰	幼児期における自閉症スペクトラム児のプレイセラピー場面における遊びの分析(1)ーごっこ遊び・ルール遊び(初期)の分析ー		心理教育相談センター年報(立命館大学心理・教育相談センター)(14 号)	41-55	2016 年 2 月
85	竹内謙彰	障害を捉える視点とジェンダー		心理科学(36 巻 2 号)	9-18	2015 年 12 月
86	津止正敏	急増する男性介護者の悩み		『女も男も』労働教育センター(126 号)	34-40	2015 年 12 月
87	小澤 亘	外国にルーツを持つ児童生徒の学習権保障とデジタル教科書政策	○	立命館人間科学研究(33 号)	63-74	2015 年 12 月
88	荒木久理子・重富紗希・藤原さつき・中川万幾子・野村朋・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積	学童期後期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発ースタッフの役割の検討ー	○	立命館人間科学研究(32 号)	69-84	2015 年 8 月
89	鏡原崇史・山路美波・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰	青年期前期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発ー自主性と協同性をはぐくむ活動の工夫ー	○	立命館人間科学研究(32 号)	131-142	2015 年 8 月
90	鏡原崇史・山路美波・小林里帆・松元佑・荒木穂積	青年期前期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発ー自主性	○	立命館人間科学研究(32 号)	131-142	2015 年 8 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	竹内謙彰	と協同性をはぐむ活動の工夫—				
91	荒木久理子・重富紗希・藤原さつき・中川万幾子・野村朋・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積	学童期後期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発—スタッフの役割の検討—	○	立命館人間科学研究(32号)	69-84	2015年8月
92	竹内謙彰	子どもの遊ぶ権利と原発事故		村本邦子・中村正・荒木穂積(編著)『臨地対人援助学—東日本大震災と復興の物語—』晃洋書房	110-113	2015年8月
93	津止正敏	男性介護者の仕事と介護を巡る実態と論点-介護者モデルの変容と新しい生き方モデル-		生活経済政策(223号)	12-17	2015年8月
94	櫻谷真理子	個を大切に作るデンマークの保育に学ぶ		立命館大学『産業社会論集』(51巻1号)	67-80	2015年8月
95	櫻谷真理子	今日の子育て支援の課題		雑誌『教育と医学』(63巻8号)	72-78	2015年8月
96	山本耕平	若者ソーシャルワークの構築にむけて—対象・視座・局面に関して—	○	公益財団法人鉄道弘済会『社会福祉研究』(第123号)	2-9	2015年7月
97	荒木穂積	発達保障の誕生から50年	○	立命館産業社会論集(51巻1号)	3-19	2015年6月
98	竹内謙彰	高機能自閉症スペクトラム障害を持つ若者の発達課題	○	立命館産業社会論集(51巻1号)	29-40	2015年6月
99	Nguyen Thi Hoang Yen, Tran Thi Minh Thanh, Dinh Nguyen Trang Thu, Dao Thi Bich Thuy, Araki Hozumi, Takeuchi Yoshiaki, Tomii Nanami, Matsumoto Yu	A New Approach for Assessment of Child Development in Vietnam :Developing Tools as Developmental Checklist for Children		Ritsumeikan Social Sciences Review(51巻1号)	55-66	2015年6月
100	Nguyen Thi Hoang Yen・Tran Thi Minh Thanh・Dinh Nguyen Trang Thu・Dao Thi Bich Thuy・荒木穂積・竹内謙彰・富井奈菜実・松元佑	A new approach for assessment of child development in Vietnam: Developing tools as developmental checklist for children		立命館産業社会論集(51巻1号)	55-56	2015年6月
101	谷 晋二	ACTを用いた発達障がいの親子の支援		精神療法(41巻2号)	46-52	2015年4月
102	山本耕平	若者問題と社会福祉実践の課題 —貧困化と孤立に対峙する実践を求めて—、総合社会福祉研究所『総合社会福祉研究』		総合社会福祉研究(45号)	2-11	2015年4月
103	津止正敏	介護者支援を考える最終回 仕事と介護と暮らし		『国民生活』国民生活センター(32号)	16-17	2015年3月
104	八木保樹	脅威への対処		立命館文学(641号)	17-31	2015年2月
105	谷 晋二	新たな支援の類型を求めて	○	立命館人間科学研究(31号)	83-95	2015年2月
106	春日彩花・藤戸麻美・安田祥子・松本梨沙・小島拓・古田絵理・富井奈菜実・中原咲子・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積	幼児期後期・学童期前期における自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発—集団でおこなう見立て活動とごっこ遊びを取り入れたプログラム—	○	立命館人間科学研究(31号)	35-52	2015年2月
107	春日彩花・藤戸麻美・安田祥子・松本梨沙・小島拓・古田絵理・富井奈菜実・中原咲子・荒木美知子・竹内	幼児期後期・学童期前期における自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発—集団でおこなう見立て活動とごっこ遊びを取り入れたプログラム—	○	立命館人間科学研究(31号)	35-52	2015年2月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	謙彰・荒木穂積					
108	津止正敏	介護者支援を考える第2回 老老介護の現状と課題		『国民生活』国民生活センター(31号)	15-16	2015年2月
109	津止正敏	介護者支援を考える第1回 家族介護者の現状と課題		『国民生活』国民生活センター(30号)	17-18	2015年1月
110	OZAWAWataru, MAKITAYu kifumi, HIGUCHI Koichi, NISHIMURA Kiyotada, ISHIKAWA Kuniko, OGAWA Eiji, KATO Hiroshi	The Local Community Volunteer Social Worker System in Japan: Analysis of Survey Data		Ritsumeikan University SANGYOU-SHAKAI-RO NSHU(50巻3号)	1-20	2014年12月
111	竹内謙彰・荒木穂積・中村隆・荒井庸子・松島明日香・松元佑・富井奈菜実・井上洋平	新しい発達診断法開発の試み—幼児期における発達の時期ごとの分析的検討—		立命館産業社会論集(50巻2121-131号)	121-131	2014年9月
112	黒田学・平沼博将・石川政孝・バユス・ユイス・小西豊・荒木穂積・野村実	イタリア共和国エミリアロマーニャ州における障害児教育・福祉に関する調査研究		立命館産業社会論集(50巻2号)	31-54	2014年9月
113	竹内謙彰・荒木穂積・中村隆一・荒井庸子・松島明日香・松元佑・富井奈菜実・井上洋平	新しい発達診断法開発の試み—幼児期における発達の時期ごとの分析的検討—		立命館産業社会論集(50巻2号)	121-131	2014年9月
114	加藤弘美・加藤義信・竹内謙彰	2〜3歳児は自己とモノのビデオ映像をどのように理解しているか?		発達心理学研究(25巻3号)	302-312	2014年9月
115	櫻谷真理子	人は皆平等であるデンマークに学ぶ		デンマークの感動を持ち帰って—自己決定の国	84—86	2014年9月
116	大屋藍子・武藤 崇・中鹿直樹	反応非依存的な獲得事態と回避事態が行動変動性の減少に及ぼす影響についての比較検討	○	行動科学(53巻1号)	11-20	2014年9月
117	山本耕平	麦の郷と精神保健福祉実践 “ほっとけやん”マインドと地域協同の追求(特集 精神障害者の地域生活への支援)		ノーマライゼーション 障害者の福祉(34巻7号)	27-29	2014年7月
118	山本耕平	ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって: 若者問題に関する韓日間比較調査から—第3報	○	立命館産業社会論集(50巻1号)	213-233	2014年6月
119	津止正敏	<インタビュー>「ケアメン」に必要な企業の支援とケア・コミュニティの確立		人事実務	20-24	2014年6月
120	津止正敏・西田朗子	ケアが拓くコミュニティ-「ケアメンサミット JAPAN」活動報告書-		男性介護者と支援者の全国ネットワーク	全 39頁	2014年5月
121	斎藤真緒・津止正敏・小木曾由佳・西野勇人	介護と仕事の両立をめぐる課題—ワーク・ライフ・ケア・バランスの実現に向けた予備的考察—		立命館産業社会論集(49巻4号)	119-137	2014年3月
122	櫻谷真理子	児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究		立命館産業社会論集(49巻4号)	139—149	2014年3月
123	岡部茜・青木秀光・深谷弘和・山本耕平	五島列島の若者を取り巻く生きづらさと地域—社会参加が困難な状態にある若者が参加できる地域づくり実践へ向けて—	○	立命館人間科学研究(29号)	111-122	2014年2月
124	TANI Shinji, KAWAI Etuko, and KITAMURA Kotomi	ACT workshop for parents of children with developmental disabilities	○	立命館人間科学研究(28巻)	1-11	2013年10月
125	津止正敏	ケアメン百万人時代の実態と課題		中央公論(2013年10月号)	138-145	2013年10月
126	バユス・ユイス・黒田学・小西豊・仲春奈・荒木穂積・平沼博将・荒木美知子	スペイン・カタルーニャ自治州における障害児教育・福祉に関する調査研究		立命館産業社会論集(49巻2号)	23-44	2013年9月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

127	山本耕平	ひきこもる若者を対象とするピアアウトリーチ支援者養成に関する研究		第42回(平成23年度～平成25年度)三菱財団社会福祉事業・研究助成研究成果報告書	1-236	2013年9月
128	谷 晋二	自閉症スペクトラム障害の支援技法の総括と今後		精神療法(39巻3号)	364-370	2013年6月
129	山本耕平	ソーシャルワークと協同的関係性—語ら／れない当事者に学びつつ—	○	トラウマティック・ストレス(11巻1号)	35-42	2013年6月
130	津止正敏	高齢者の権利擁護・虐待防止の動向		権利擁護・虐待防止白書2013	58-61	2013年
131	津止正敏	〈連載 1.2.3〉「介護とケアメン」		Moving(Vol.70-72巻)		2013年

【テーマ④ 修復的支援チーム】

No.	著者名	論文名	査読	掲載誌名(巻)	頁	発表年月
132	村本邦子	周辺からの記憶 10:2012年度福島		対人援助学マガジン(6巻4号)	169-178	2016年3月
133	Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda	Experience and training of a first person shooter (FPS) game can enhance useful field of view, working memory, and reaction time		International Journal of Affective Engineering(15巻3号)		2016年2月
134	松本克美	時効論・損害論への法心理学的アプローチ — 民事損害賠償請求における被害者支援のために	○	立命館人間科学研究(33号)	3-13	2015年12月
135	廣井亮一	非行臨床の課題		犯罪心理学事典		2015年12月
136	村本邦子	社会的包摂に向けた修復的支援の研究		インクルーシブ社会研究(8巻)	143-150	2015年12月
137	村本邦子	周辺からの記憶 9:2012年度岩手(遠野・大船渡)		対人援助学マガジン(6巻3号)	158-168	2015年12月
138	松本克美	公務員個人の対外的不法行為責任免責論の批判的検討 — 修正的正義論及び法心理的分析をふまえて		立命館法学(361号)	765-794	2015年10月
139	村本邦子	周辺からの記憶 8:2012年度、宮城		対人援助学マガジン(6巻2号)	151-161	2015年10月
140	野田正人	児童虐待への支援の基本		児童心理(69巻15号)	106-110	2015年10月
141	野田正人	児童自立支援施設の今日的課題		日本犯罪学会 犯罪社会学研究(40号)	57-67	2015年10月
142	松本克美	児童期の性的虐待被害に起因するPTSD等の発症に対する損害賠償請求権の時効・除斥期間—釧路PTSD等事件控訴審判決		法律時報(87巻11号)	165-168	2015年9月
143	廣井亮一	司法臨床—法と臨床の協働による犯罪・非行、家族問題の解決のために		心理学を学ぼう2(心版研)		2015年9月
144	村本邦子・上山真知子・吉浜美恵子・団士郎・久田満	東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント		コミュニティ心理学研究(19巻1号)	1-36	2015年9月
145	野田正人	【実践との対話】沖縄の少年非行対応と司法福祉に於ける実践 宇都宮報告「少年鑑別所法における新たな取り組み」との対話		生徒指導研究(日本生活指導学会)(32巻)	41-44	2015年8月
146	野田正人	【実践との対話】沖縄の少年非行対応と司法福祉における実践		日本生活指導学会 生活指導研究(32巻41-44号)		2015年8月
147	中村正	臨床社会学の方法(9)日常生活		対人援助学マガジン(第6巻第1号)、対人援助学会	18-26	2015年6月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

148	中村正	DV のある家族への支援とは		『保健の科学』第 57 巻 第 6 号、杏林書院	381 - 387	2015 年 6 月
149	松本克美	PTSD と損害賠償・時効問題		의생명과학과(13 巻)	131-14 4	2015 年 6 月
150	村本邦子	周辺からの記憶 7:2012 年度、京都、むつ		対人援助学マガジン(6 巻 1 号)	155-16 5	2015 年 6 月
151	野田正人	わが国のスクールソーシャルワーク事業 の発展史—なぜ 2008 年にこの事業は開 始したのか—		日本学校ソーシャルワ ーク学会 10 周年記念誌 「学校ソーシャルワーク 実践の動向と今後の展 望」	6-9	2015 年 6 月
152	野田正人	非行と学校ソーシャルワーク		日本学校ソーシャルワ ーク学会 10 周年記念誌 「学校ソーシャルワーク 実践の動向と今後の展 望」	19-22	2015 年 6 月
153	村本邦子	抵抗とレジリエンス～3.11 後を生きるため に		女性ライフサイクル研究 (24 号)	4-11	2015 年 5 月
154	斎藤真緒	家族介護とジェンダー平等をめぐる今日 的課題—男性介護者が問いかけるもの		日本労働研究雑誌(658 号)	35-46	2015 年 5 月
155	Seya Y, Yamaguchi M and Shinoda H	Single stimulus color can modulate vection	○	Frontiers in Psychology(6 巻)	406	2015 年 4 月
156	村本邦子	周辺からの記憶 6:2012 年度のプロジェクト に向けて		対人援助学マガジン(5 巻 4 号)	146-15 1	2015 年 4 月
157	中村正	臨床社会学の方法(8)臨地の思考		対人援助学マガジン(第 5巻第 4 号)、対人援助 学会	14-26	2015 年 3 月
158	松本克美	民法 724 条後段の 20 年期間の起算 点と損害の発生 — 権利行使可能性に 配慮した規範的損害顕在化時説の展開 —		立命館法学(357・358 号)	1809-1 848	2015 年 3 月
159	Miyoshi Ayama, Ryosuke Yamazaki, Shin-ichi Nakanoya, Tomonori Tashiro, Tomoharu Ishikawa, Kazuhiko Ohnuma, <u>Hiroyuki Shinoda</u> , and Keisuke Araki	Estimation of straylight in the eye and its relation to visual function	○	Optical Review(22 巻 2 号)	185-19 6	2015 年 2 月
160	村本邦子・中村正	大学院におけるサービス・ラーニングを取り 入れたプロジェクト型教育の試み ～ 「東日本・家族応援プロジェクト 2011～ 2013」の成果と課題		立命館大学応用人間科 学研究科冊子	1-45	2015 年 2 月
161	Yasuhiro Seya, <u>Hiroyuki Shinoda</u> , and Yoshiya Nakaura	Up-down asymmetry in vertical vection		Vision Research(117 巻)	16-24	2015 年
162	松本克美	民法 724 条後段の 20 年期間の法的性質 と民法改正の経過規定について		法と民主主義(495 号)	41-45	2015 年 1 月
163	中村正	臨床社会学の方法(7)ポジショナリティー 対人援助と民主主義		対人援助学マガジン(第 5巻第3号)	19-31	2014 年 12 月
164	村本邦子	周辺からの記憶 5:2011 年むつ・遠野・福 島		対人援助学マガジン(5 巻 3 号)	184-19 9	2014 年 12 月
165	Chanprapha PHUANGSUWAN, Mitsuo IKEDA, and <u>Hiroyuki SHINODA</u>	Demonstration of Color Constancy in Photographs by Two Techniques: Stereoscope and D-up Viewer	○	Optical Review(21 巻 6 号)	810-81 5	2014 年 12 月
166	Seya Y, Tsuji T, and <u>Shinoda H</u>	Effect of depth order on linear vection with optical flows	○	i-Perception(5 巻 7 号)	630-64 0	2014 年 12 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

167	元山彩織・河浦龍生・野田正人	福岡市における養育支援訪問事業の効果及び悪化した家庭の要因と支援のあり方の検討	○	子どもの虐待とネグレクト、一般社団法人日本子どもの虐待防止学会(16巻3号)	307-319	2014年12月
168	山口秀樹・丸山隆志・篠田博之	窓面からの屋光導入が空間の明るさ感に与える影響	○	照明学会誌(98巻11号)	593-599	2014年11月
169	松本克美	「過去の克服」と将来展望		法律時報増刊・改憲を問う 民主主義法学からの視座(増刊号)	216-221	2014年11月
170	Koji Horiuchi, Ichiro Kuriki, Rumi Tokunaga, Kazumichi Matsumiya and Satoshi Shioiri	Chromatic induction from surrounding stimuli under perceptual suppression	○	Visual Neuroscience	387-400	2014年11月
171	中村正	臨床社会学の方法(6)共軛関係		対人援助学マガジン(第5巻第2号)、対人援助学会	19-28	2014年9月
172	廣井亮一	ストーカー加害者への司法臨床		犯罪と非行(178号)	68-83	2014年9月
173	村本邦子	周辺からの記憶4:東日本・家族応援プロジェクト3年を振り返って		対人援助学マガジン(5巻2号)	203-220	2014年9月
174	野田正人	いじめ対策法と基本方針の枠の下で		季刊教育法(182号)	24-30	2014年9月
175	廣井亮一	司法臨床としての情状心理鑑定		現代法律事務の諸問題(平成25年度巻)	928-941	2014年8月
176	村本邦子	レジリエンスな子どもを育てる～愛され、愛することのできる子どもに		児童心理(989巻)	97-101	2014年8月
177	村本邦子	被害者支援の現場実践から書くうえで大切にしたいこと		臨床心理学(増刊6号)	162-165	2014年8月
178	松本克美	児童の起こした自転車事故と母親の監督義務者責任		私法判例リマックス(49号)	50-53	2014年7月
179	中村正	男性性・男性問題をめぐる臨床社会学-親密な関係性研究に焦点づけて-		立命館産業社会論集(第50巻第1号)、産業社会学会、査読有	73-95	2014年6月
180	松本克美	一部請求と時効の中断 — 裁判上の催告の時効中断効について —		立命館法学(353号)	27-66	2014年6月
181	廣井亮一	規範意識と非行		児童心理(987号)	101-106	2014年6月
182	村本邦子	周辺からの記憶3:むつ、下北半島		対人援助学マガジン(5巻1号)	196-206	2014年6月
183	村本邦子	Notes on Schmid's "Psychotherapy is Political or it is not Psychotherapy: The Person-Centred Approach as an Essentially Political Venture"	○	Psychotherapy and Politics International(12巻1号)	58-64	2014年5月
184	中村正	臨床社会学の方法(5)日常行動理論		対人援助学マガジン(第5巻第1号)、対人援助学会	19-28	2014年4月
185	斎藤真緒	男性介護者の実態と支援の課題: 大介護時代のサバイバル戦略		公明(100号)	51-57	2014年4月
186	中村正	臨床社会学の方法(4)ジェンダー臨床		対人援助学マガジン(第4巻第4号)、対人援助学会	19-28	2014年3月
187	斎藤真緒・津止正敏・小木曾由佳・西野勇人	介護と仕事の両立をめぐる課題 —ワーク・ライフ・ケア・バランスの実現に向けた予備的考察—	○	立命館産業社会論集(49巻4号)	119-137	2014年3月
188	松本克美	時効法改革 —労働法との関連で—		労働法律旬報(1811号)	28-31	2014年3月
189	松本克美	除斥期間と債務の承認・権利行使 —		立命館法学(351号)	3026-3	2014年3月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		民法 724 条後段の 20 年期間との関係で			035	
190	松本克美	手術後タオル残置事件の時効・除斥期間論(東京地判平成 24・5・9 判時 2158・80)		法律時報(84 巻 6 号)	116-119	2014 年 3 月
191	松本克美	明示的一部請求の訴えの的と残部の債権に対する消滅時効の中断(最判平成 25・6・6)		判例評論(662 号)	142-145	2014 年 3 月
192	村本邦子・芳賀淳子	歴史・平和教育における「二次受傷」をどう考えるか～立命館大学国際平和ミュージアムにおける平和教育の現状と可能性	○	立命館平和研究(15 号)	59-68	2014 年 3 月
193	村本邦子	『南京を思い起こす』7 年間の成果と今後に向けて～歴史のトラウマと出会いのワークショップ HWH(*17)		インクルーシブ社会研究『日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発』(1 巻)	148-168	2014 年 3 月
194	村本邦子	周辺からの記憶 2: 震災半年後の東北へ		対人援助学マガジン(4 巻 4 号)	213-220	2014 年 3 月
195	松本克美	カネミ油症新認定訴訟における時効・除斥期間問題 — 福岡地裁小倉支部 2013・3・21 判決が見落としたもの		環境と公害(43 巻 3 号)	39-43	2014 年 1 月
196	廣井亮一・中川利彦	学校における法にかかわる問題への対応—法と臨床の協働—保護者対応		『児童心理』(979 号)	119-125	2014 年 1 月
197	中村正	臨床社会学の方法(3)動機の語彙		対人援助学マガジン(第 4 巻第 3 号)、対人援助学会	19-27	2013 年 12 月
198	松本克美	建物の安全と民事責任 — 判例動向と立法課題—		立命館法学(350 号)	1753-1793	2013 年 12 月
199	村本邦子	日本の児童・女性政策と心理学	○	心理科学(34 巻 2 号)	24-29	2013 年 12 月
200	村本邦子	周辺からの記憶 1～東日本・家族応援プロジェクト立ち上がる		対人援助学マガジン(4 巻 3 号)	218-225	2013 年 12 月
201	廣井亮一・大田原俊輔	学校における法にかかわる問題への対応: 法と臨床の協働—体罰問題		『児童心理』(976 号)	119-125	2013 年 11 月
202	廣井亮一・中川利彦	学校における法にかかわる問題への対応—法と臨床の協働—暴力問題		『児童心理』(977 号)	117-123	2013 年 11 月
203	村本邦子	子ども虐待予防としての子育て支援		チャイルドヘルス(16 巻 11 号)	22-25	2013 年 11 月
204	村本邦子	フェミニズムはどこへ～女たちの財産を次世代に受け渡すために		女性ライフサイクル研究(23 号)	5-12	2013 年 11 月
205	松本克美	児童期の性的虐待被害に起因する PTSD 等の発症についての損害賠償請求権の消滅時効・除斥期間		立命館法学(349 号)	1-43	2013 年 10 月
206	廣井亮一・辻孝司・堀悠子・坂田真穂・村尾泰弘	司法臨床の展開(第二報)—情状鑑定と裁判員裁判	○	『法と心理』(13 巻 1 号)	71-75	2013 年 10 月
207	廣井亮一・河野聡	学校における法にかかわる問題への対応—法と臨床の協働—いじめ問題		『児童心理』(974 号)	116-123	2013 年 10 月
208	中村正	臨床社会学の方法(2)ガスライティング		対人援助学マガジン(第 4 巻第 2 号)、対人援助学会	18-26	2013 年 9 月
209	下郷大輔・佐々木順子・廣井亮一	刑務所におけるペアレンティングプログラム	○	『家族療法研究』(30 巻 2 号)	44-51	2013 年 8 月
210	中村正	臨床社会学の方法(1)暗黙理論		対人援助学マガジン(第 4 巻第 1 号)、対人援助学会	17-23	2013 年 6 月
132	松本克美	原子力損害と消滅時効		立命館法学(347 号)	220-243	2013 年 6 月
133	松本克美	先物取引被害に対する損害賠償請求権の消滅時効		先物取引被害研究(40 号)	5-16	2013 年 4 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

【テーマ⑤ 基礎研究チーム】

No.	著者名	論文名	査読	掲載誌名(巻)	頁	発表年月
134	利光恵子(著)・松原洋子(監修)	日本における女性障害者への強制的な不妊手術		立命館大学生存学研究センター	3-4	2016 年 3 月
135	立岩真也	生の現代のために・9——連載 118		『現代思想』(43 巻 16 号)	8-19	2015 年 12 月
136	立岩真也	生の現代のために・8——連載 117		『現代思想』(43 巻 15 号)	8-19	2015 年 11 月
137	立岩真也	生の現代のために・7——連載 116		『現代思想』(43 巻 14 号)	8-19	2015 年 10 月
138	立岩真也	生の現代のために・6——連載 115		『現代思想』(43 巻 13 号)	8-19	2015 年 9 月
139	松原洋子	書評 湯浅俊彦編著『デジタル環境下における出版ビジネスと図書館—ドキュメント』立命館大学文学部湯浅ゼミ		国際公共経済研究(25 号)	260-261	2015 年 9 月
140	立岩真也	生の現代のために・5——連載 114		『現代思想』(43 巻 12 号)	8-19	2015 年 8 月
141	立岩真也	「生の現代のために・4——連載 113」		『現代思想』(43 巻 11 号)	8-19	2015 年 7 月
142	立岩真也	「生の現代のために・3——連載 112」		『現代思想』(43 巻 10 号)	8-19	2015 年 6 月
143	立岩真也	「補足したうえでざっと見取り図を書いてみる」		『賃金と社会保障』(1635 巻)	13-19	2015 年 6 月
144	立岩真也	「尊厳死法制化について」		『賃金と社会保障』(1635 巻)		2015 年 6 月
145	中倉 智徳	イノベーション、社会、経済——ガブリエル・タルドと戦間期アメリカにおける「発明の社会学」	○	年報 科学・技術・社会(24 巻)	35-57	2015 年 6 月
146	小泉義之	自閉症のリトルネロへ向けて		現代思想(2015 巻 05 号)	86-99	2015 年 5 月
147	立岩真也	精神医療現代史へ・追記・終——連載 111		『現代思想』(43 巻 9 号)	8-19	2015 年 5 月
148	立岩真也・池田賢市・桜井智恵子	そもそもなぜテストをするの?——学力テストから能力と評価の問題を考える(鼎談)		『教育と文化』(79 巻)	8-27	2015 年 5 月
149	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 13——連載 110		『現代思想』(43 巻 8 号)	8-19	2015 年 4 月
150	立岩真也	認知症→精神病院&安楽死(精神医療現代史へ・追記 12)——連載 109		『現代思想』(43 巻 6 号)	30-44	2015 年 3 月
151	松原洋子	障害者差別解消法の高等教育機関における障害学生支援への影響		大学図書館問題研究会誌(39 号)	3-10, 25-31	2015 年 3 月
152	高見国生・天田城介	認知症新時代における排除と包摂——小澤勲の認知症論の位置		『現代思想』	35-46.	2015 年 3 月
153	篠原國造・末安民生・田中幸子・野村陽子・天田城介	看護論——この 30 年の看護をめぐる変容		立命館大学生存学研究センター編『生存学』Vol.8.	8-50.	2015 年 3 月
154	天田城介	男がケアすること——社会関係のメンテナンスコストのジェンダー非対称性をめぐって		『現代女性とキャリア』	6-19	2015 年 3 月
155	天田城介	やりとりする／ケアする		栗原彬編『人間学』世織書房.		2015 年 3 月
156	栗原彬・天田城介	私を探す／私から自由になる		栗原彬編『人間学』世織書房		2015 年 3 月
157	松原洋子	アクセシブルな電子図書館と読書困難な学生の支援—日本における大学図書館サービスの課題と展望	○	立命館人間科学研究(31 号)	65-73	2015 年 2 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

158	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 11——連載 108	『現代思想』(43 巻 2 号)	8-19	2015 年 2 月
159	立岩真也	「精神医療現代史へ・追記 10——連載 107」	『現代思想』(43 巻 1 号)	8-19	2015 年 1 月
160	立岩真也	精神医療現代史へ・追記9——連載 106	『現代思想』(42 巻 16 号)	8-19	2014 年 12 月
161	立岩真也	もらったものについて・13	『そよ風のように街に出よう』(87 巻)	44-49	2014 年 12 月
162	立岩真也	精神医療現代史へ・追記8——連載 105	『現代思想』(42 巻 15 号)	8-19	2014 年 11 月
163	立岩真也	早川一光インタビューの後で・2——連載 104	『現代思想』(42 巻 14 号)	8-19	2014 年 10 月
164	早川一光・立岩真也	わらじ医者はわらじも脱ぎ捨て——「民主的医療」現代史(早川一光へのインタビュー)	『現代思想』(42 巻 13 号)	37-59	2014 年 9 月
165	立岩 真也	早川一光インタビューの後で・1——連載 103	『現代思想』(42 巻 13 号)	8-23	2014 年 9 月
166	斎藤純一・立岩真也	「政治と公共性について」(対談)	『グラフィケーション』(194 巻)	4-11	2014 年 9 月
167	大谷いづみ	死に至る憐れみ——啓蒙・抵抗・応答の一九七〇年代	『現代思想』(42 巻 13 号)	178-197	2014 年 9 月
168	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 5——連載 102	『現代思想』(42 巻 12 号)	8-20	2014 年 8 月
169	天田城介	水膨れしていく精神医療市場——幸福な奴隷の幸せを感受する世界を生きる支援を受容してしまうこと	『現代思想』	107-121	2014 年 8 月
170	立岩真也	悪文	『群像』(69 巻 8 号)	200-201	2014 年 8 月
171	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 4——連載 101	『現代思想』(42 巻 10 号)	8-19	2014 年 7 月
172	立岩真也	発達障害の時代——自閉症という処方 の行方・下	『みすず』(56 巻 6 号)	28-37	2014 年 7 月
173	立岩真也	発達障害の時代——自閉症という処方 の行方・上	『みすず』(56 巻 7 号)	28-37	2014 年 6 月
174	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 3——連載 100	『現代思想』(42 巻 9 号)	8-19	2014 年 6 月
175	立岩真也	人命の特別を言わず／言う	『現代と親鸞』(28 巻)	33-74	2014 年 6 月
176	小泉義之	人格障害のスペクトラム化	現代思想(42 巻 8 号)	144-163	2014 年 5 月
177	大野萌子・立岩真也	私の筋が通らない、それはやらないと(大野萌子へのインタビュー)	『現代思想』(42 巻 8 号)	192-206	2014 年 5 月
178	山本眞理・立岩真也	「精神病」者集団、差別に抗する現代史(山本眞理へのインタビュー)	『現代思想』(42 巻 8 号)	30-49	2014 年 5 月
179	立岩真也	精神医療現代史へ・追記 2——連載 99	『現代思想』(42 巻 8 号)	8-21	2014 年 5 月
180	立岩真也	生の現代のために・2——連載 98	『現代思想』(42 巻 6 号)	8-19	2014 年 4 月
181	立岩真也	国家の強制力は必要であり、同時にその分立は有害である	『環』(57 巻)	218-223	2014 年 4 月
182	立岩真也	もらったものについて・12	『そよ風のように街に出よう』(86 巻)	44-49	2014 年 4 月
183	立岩真也	この問いはかなりきっちり考えて複数の答しか出ない	『日本労働研究雑誌』(646 巻)	3	2014 年 4 月
184	立岩真也	「生の現代のために・1——連載 97」	『現代思想』(42 巻 4 号)	8-21	2014 年 3 月
185	小門穂・吉田一史美・松原洋子	日本における新型出生前検査(NIPT)のガバナンス—臨床研究開始まで	『生存学研究センター報告22 生殖をめぐる技術と倫理—日本・ヨーロッパ	70-86	2014 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

				パの視座から』		
186	中倉 智徳	「イノベーション論の批判的検討にむけて——発明の社会学からイノベーション・プロセスの経済学へ」		『生存をめぐる規範——オルタナティブな秩序と関係性の生成に向けて』(生存学研究センター報告 21)	239-265	2014 年 3 月
187	立岩真也	生の歴史		『三色旗』(791 巻)	55-58	2014 年 2 月
188	立岩真也	『造反有理』は出たが、病院化の謎は残る——連載 96		『現代思想』(41 巻 16 号)	8-19	2013 年 12 月
189	立岩真也	「生の技法／生の条件」		『三色旗』(790 巻)	55-58	2013 年 12 月
190	立岩真也	精神医療を巡る現代史の本について		『現代思想』(41 巻 15 号)	8-19	2013 年 11 月
191	立岩真也	精神医療についての本の準備・7——連載 94		『現代思想』(41 巻 14 号)	8-19	2013 年 10 月
192	立岩真也	書評: 庄司洋子他編『じりまと福祉——制度・臨床への学際的アプローチ』		『リハビリテーション』(557 巻)	36-37	2013 年 10 月
193	立岩真也	精神医療についての本の準備・6——連載 93		『現代思想』(41 巻 12 号)	8-19	2013 年 9 月
194	立岩真也	たんに、もっとすればよいのに、と		『社会と調査』(11 巻)	148	2013 年 9 月
195	立岩真也	もらったものについて・11		『そよ風のように街に出よう』(85 巻)	85-89	2013 年 9 月
196	立岩真也	「精神医療についての本の準備・5——連載 92」		『現代思想』(41 巻 11 号)		2013 年 8 月
197	立岩真也	精神医療についての本の準備・4——連載 91		『現代思想』(41 巻 9 号)	8-19	2013 年 7 月
198	立岩真也	精神医療についての本の準備・3——連載 90		『現代思想』(41 巻 8 号)	8-19	2013 年 6 月
199	大谷いづみ	図書紹介: 立岩真也・有馬斉編 生死の語り行い1——尊厳死法・抵抗・生命倫理学——		リハビリテーション(554 号)	33-34	2013 年 6 月
200	立岩真也	「精神医療についての本の準備・2——連載 89」		『現代思想』(41 巻 7 号)	8-19	2013 年 5 月
201	大谷いづみ	「「理性的自殺」がとりこぼすもの」——続・「死を掛け金に求められる承認」という隘路」		『現代思想』(41 巻 7 号)	198-209	2013 年 5 月
202	岡原正幸・立岩真也	「障害者の自立を考える・後篇」(対談)		『地域リハビリテーション』(8 巻 5 号)	260-265	2013 年 5 月
203	岡原正幸・立岩真也	「障害者の自立を考える・前篇」(対談)		『地域リハビリテーション』(8 巻 4 号)	260-265	2013 年 5 月
204	立岩真也	「精神医療についての本の準備・1——連載 88」		『現代思想』(41 巻 4 号)	8-19	2013 年 4 月
205	立岩真也	「飽和と不足の共存について」		『日本生命倫理学会ニューズレター』(2013 巻 4 号)		2013 年 4 月
206	小泉義之	出来事(事象)としての人生		哲学雑誌(128 巻 800 号)	56-74	2013 年

<図書>

【テーマ① 方法論チーム】

No.	著者名	図書名	出版社名	総頁数/担当頁	発表年月
-----	-----	-----	------	---------	------

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

1	稲葉光行(編)	インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究(インクルーシブ社会研究 15)(※17)	立命館大学人間科学研究所	160	2016 年 3 月
2	松田亮三(編)	日本とイングランドの公衆衛生機構(インクルーシブ社会研究 14)(※17)	立命館大学人間科学研究所	91	2016 年 3 月
3	Mitsuyuki Inaba & Kosuke Wakabayashi(編)	Transparency of Interrogation: Innovative Data Recording and Analysis by the Human Science(インクルーシブ社会研究 12)(※17)	立命館大学人間科学研究所	183	2016 年 3 月
4	若林宏輔	裁判員制度への応用社会心理学アプローチ	ナカニシヤ出版	288	2016 年 3 月
5	Elias Mossialos, Martin Wenzl, Robin Osborn and Sarnak, Dana eds. 松田亮三	2015 International Profiles of Health Care Systems.	The Commonwealth Fund	107-114	2016 年 1 月
6	村山満明・大倉得史・稲葉光行	尼崎事件～支配・服従の心理分析	現代人文社	229-243	2015 年 12 月
7	稲葉光行・松田亮三	対人支援における<学=実>連携の展望(インクルーシブ社会研究 8)(※17)	立命館大学人間科学研究所	195	2015 年 11 月
8	Valsiner, J., Marsico, G., Chaudhary, N., Sato, T., Dazzani, V.	Psychology as the Science of Human Being – The Yokohama Manifesto	Springer	375	2015 年 10 月
9	サトウタツヤ	心理学の名著 30	ちくま書房	286	2015 年 10 月
10	Wagoner B., Chaudhary, N., Hviid, P., Sato, T., Kasuga, H., Kanzaki, M., 福田茉莉	Body, Mind, and Movement: Some Proposals for Constructing a Socially Inclusive Psychology Based on Developmental and Cultural Principles.	Information Age Publishing	265-276	2015 年 4 月
11	稲葉光行・若林宏輔(編)	取調べと可視化—新しい時代の取調べ技法・記録化と人間科学—(インクルーシブ社会研究 7)(※10)	立命館大学人間科学研究所	165	2015 年 3 月
12	滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)	ワードマップ TEA 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ	新曜社	179	2015 年 3 月
13	安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)	ワードマップ TEA 実践編(副題 複線径路等至性アプローチを活用する)	新曜社	247	2015 年 3 月
14	由井秀樹	人工授精の近代—戦後の「家族」医療・技術	青弓社	306	2015 年 3 月
15	Elias Mossialos, Martin Wenzl, Robin Osborn and Chloe Anderson eds. 松田亮三	International Profiles of Health Care Systems, 2014	The Commonwealth Fund	83-91	2015 年 1 月
16	サトウタツヤ・郡司淳 編	傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成 第 1-2 巻(制度・施策/医療・教育編)	六花出版		2014 年 12 月
17	Mitsuyuki Inaba and Ryoza Matsuda (eds.)	Cooperation between Academia and Social Practices in Human Services (Studies for Inclusive Society 4).	Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.	69	2014 年 10 月
18	稲葉光行・松田亮三(編)	対人支援における大学と社会実践の連携(インクルーシブ社会研究 3)(※17)	立命館大学人間科学研究所	82	2014 年 10 月
19	サトウタツヤ	司法臨床としての情状心理鑑定	日弁連研究叢書 現代法律実務の諸問題 平成 25 年度研修版	909-927	2014 年 8 月
20	サトウタツヤ・北岡明佳・土田宣明(編) 八木保樹・岡本直子・矢藤優子・岡本直子・谷晋二・望月昭・山本博樹・宇都宮博・櫻井芳	心理学スタンダード—学問する楽しさを知る	ミネルヴァ書房	15 章	2014 年 4 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	雄・星野祐司・服部雅史・藤健一・小塩真司・文野洋・廣井亮一・西垣悦代				
21	Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J. Chaudhary, N. & Hviid, P	From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B. (Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key)	Information Age Publishing	93-104	2014 年 4 月
22	日比野由利(編) 安田裕子	不妊治療の終結をめぐる当事者の語り—生殖補助医療の進展のなかで可視化される, 子をもつ願望とその相克(グローバル化時代における生殖技術と家族形成)	日本評論社	55-78	2013 年 12 月
23	S. Thomson, R. Osborn, D. Squires, and M. Jun eds. 松田亮三	International Profiles of Health Care Systems, 2013	The Commonwealth Fund	76-83	2013 年 11 月
24	Yasuda, Y., & Sato, T. Omi, Y., Rodriguez, L.P., Peralta Gomez, M. C. & Valsiner, J.	Touching realities: Meaning-making on the center stage (Part IV. Contextual realities: Moving beyond the school Commentary). (Lives and relationships: Culture in transitions between social roles)	Information Age Publishing	273-283	2013 年 11 月
25	藤田政博・越智啓太・若林宏輔・周防正行・指宿信・大上渉・巖島行雄・仲真紀子・浜田寿美男・荒木伸怡・後藤貞人・綿村英一郎・佐伯昌彦・廣井亮一・村井敏邦・入江秀晃・高木光太郎・堀田秀吾・サトウタツヤ・中田友貴	法と心理学	法律文化社	98-114	2013 年 9 月
26	藤田政博・越智啓太・若林宏輔・周防正行・指宿信・大上渉・巖島行雄・仲真紀子・浜田寿美男・荒木伸怡・後藤貞人・綿村英一郎・佐伯昌彦・廣井亮一・村井敏邦・入江秀晃・高木光太郎・堀田秀吾・サトウタツヤ・中田友貴	法と心理学	法律文化社	35-49	2013 年 9 月
27	やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・秋田喜代美・能智正博・矢守克也・安田裕子	質的心理学ハンドブック	新曜社	2 章 1 節	2013 年 9 月
28	やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・秋田喜代美・能智正博・矢守克也・安田裕子	質的心理学ハンドブック	新曜社	466-486	2013 年 9 月
29	安田裕子・村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之・望月昭(編)	対人援助学を拓く	晃洋書房	42-54	2013 年 7 月
30	安田裕子・日本発達心理学会(編)	うしなう(不妊・中絶. 発達心理学事典)	丸善出版	488-489	2013 年 6 月
31	サトウタツヤ	質的心理学の展望	新曜社	288	2013 年 5 月

【テーマ② 予見的支援チーム】

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

No.	著者名	図書名	出版社名	総頁数/担当頁	発表年月
32	日本老年行動学会監修 土田宣明	高齢者のこころとからだ事典	中央法規出版	60-63	2014 年 9 月
33	東山篤紀(翻訳)	月の錯視 なぜ大きく見えるのか	勁草書房	256	2014 年 8 月
34	チャルディーニ, ロバート・ B・社会行動研究会・八木 保樹(訳)	チャルディーニ「影響力の武器」(第3 版)	誠信書房	476	2014 年 7 月
35	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡 本直子・谷晋二・望月昭・ 山本博樹・宇都宮博・櫻 井芳雄・星野祐司・服部 雅史・藤健一・小塩真司・ 文野洋・廣井亮一・西垣 悦代	心理学スタンダード—学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	65-77	2014 年 4 月
36	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡 本直子・谷晋二・望月昭・ 山本博樹・宇都宮博・櫻 井芳雄・星野祐司・服部 雅史・藤健一・小塩真司・ 文野洋・廣井亮一・西垣 悦代	心理学スタンダード—学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	14 章	2014 年 4 月
37	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡 本直子・谷晋二・望月昭・ 山本博樹・宇都宮博・櫻 井芳雄・星野祐司・服部 雅史・藤健一・小塩真司・ 文野洋・廣井亮一・西垣 悦代	心理学スタンダード—学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	4 章	2014 年 4 月
38	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡 本直子・谷晋二・望月昭・ 山本博樹・宇都宮博・櫻 井芳雄・星野祐司・服部 雅史・藤健一・小塩真司・ 文野洋・廣井亮一・西垣 悦代	心理学スタンダード—学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	1 章	2014 年 4 月
39	清水益治・森敏昭(編著)・ 矢藤優子(共著)	0歳～12歳児の発達と学び～保幼小の 連携と接続に向けて～	北大路書房	35-42	2013 年 5 月
40	重野純・安藤清志・石口 彰・高橋晃・浜村良久・藤 井輝男・八木保樹・山田 一之・渡邊正孝	キーワードコレクション・心理学(増補版)	新曜社	460	2013 年 4 月

【テーマ③ 伴走的支援チーム】

No.	著者名	図書名	出版社名	総頁数/担当頁	発表年月
41	荒木穂積・竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と主体 性を尊重した療育プログラム開発の実 際(インクルーシブ社会研究 13)(*17)	立命館大学人間 科学研究所	131	2016 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

42	津止正敏	ケアメン・コミュニティのマネジメント (インクルーシブ社会研究 10)(*17)	立命館大学人間 科学研究所	109	2016 年 2 月
43	太田政男・穴澤義晴・岡部 茜、佐藤洋作・中川健史・ 永井契嗣・古庄健・南出吉 祥・山本耕平	「若者支援」のこれまでとこれから	かもがわ出版	75-89	2016 年 2 月
44	谷 晋二	ケースで学ぶ行動分析学による問題解 決	金剛出版	102-109	2015 年 8 月
45	村本邦子・中村正・荒木穂 積	臨地の対人援助学～東日本大震災と復 興の物語	晃洋書房	78-86	2015 年 8 月
46	津止正敏	仕事と介護の両立支援現場から考える －企業に求められる支援の在り方－	労務行政研究所	32-47	2015 年 6 月
47	黒田学(編)・荒木穂積	ロシアの障害児教育・インクルーシブ教 育	クリエイツかもが わ	53-66	2015 年 3 月
48	津止正敏	男性介護者支援の論理と根拠－ケアが 拓くコミュニティ－(インクルーシブ社会 研究 6)(*17)	立命館大学人間 科学研究所	127	2015 年 3 月
49	リサ・W・コイン+アミー・R・ マレル(著)・谷晋二(監 訳)	優しいみんなのペアレント・トレーニング 入門	金剛出版	330	2014 年 11 月
50	スティーブン・C・ヘイズ、 カーク・D・ストローサル、 谷晋二(監訳)・坂本律 (訳)	アクセプタンス&コミットメント・セラピー 実践ガイド	明石書店	480	2014 年 7 月
51	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡本 直子・谷晋二・望月昭・山 本博樹・宇都宮博・櫻井芳 雄・星野祐司・服部雅史・ 藤健一・小塩真司・文野 洋・廣井亮一・西垣悦代	心理学スタンダード―学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	17-30	2014 年 4 月
52	サトウタツヤ・北岡明佳・ 土田宣明(編)八木保樹・ 岡本直子・矢藤優子・岡本 直子・谷晋二・望月昭・山 本博樹・宇都宮博・櫻井芳 雄・星野祐司・服部雅史・ 藤健一・小塩真司・文野 洋・廣井亮一・西垣悦代	心理学スタンダード―学問する楽しさを 知る	ミネルヴァ書房	31-45	2014 年 4 月
53	津止正敏・緒方有為子監 修	男の介護 そして、ケアメンになる－初め の一步－	北九州市立男女 共同参画センタ ー・ムーブ	16	2014 年 3 月
54	峰島厚・深谷弘和・大岡由 佳・山本耕平	障害者福祉現場で働くためのメンタルヘル スハンドブック	かもがわ出版	37-55	2013 年 10 月
55	望月昭・村本邦子・土田宣 明・徳田完二・春日井敏之 (編著)・中村正・荒木穂 積・竹内謙彰・野田正人・ 谷晋二	対人援助学の到達点	晃洋書房	204-213	2013 年 7 月
56	望月昭・村本邦子・土田宣 明・徳田完二・春日井敏之 (編著)・中村正・荒木穂 積・竹内謙彰・野田正人・ 谷晋二	対人援助学の到達点	晃洋書房	82-93	2013 年 7 月
57	望月昭・村本邦子・土田宣 明・徳田完二・春日井敏之 (編著)・中村正・荒木穂 積・竹内謙彰・野田正人・	対人援助学の到達点	晃洋書房	94-107	2013 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	谷晋二				
58	望月昭・村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之(編著)・中村正・荒木穂積・竹内謙彰・野田正人・ <u>谷晋二</u>	対人援助学の到達点	晃洋書房	193-203	2013 年 7 月
59	津止正敏	しあわせの社会運動一人がささえあうということー	ウインかもがわ	158	2013 年 6 月
60	津止正敏	ケアメンを生きるー男性介護者 100 万人へのエールー	クリエイツかもがわ	147	2013 年 5 月
61	加藤博史・水藤雅彦・ <u>谷晋二</u>	司法福祉を学ぶー総合的支援による人間回復への道ー	ミネルヴァ書房	第 4 章第 4 節	2013 年 4 月
62	朝野 浩(監修・著)京都市立西総合支援学校放課後活動「わくわくクラブ」(編著)	わたくしたちがはじめたコミュニティ・スクール 京都市立西総合支援学校学校運営協議会 夢いっぱいわくわくクラブ	ジアース教育新社	154	2013 年 4 月

【テーマ④ 修復的支援チーム】

No.	著者	図書名	出版社名	総頁数/担当頁	発表年月
63	本間友巳・内田利広編著 <u>野田正人</u>	はじめて学ぶ生徒指導・教育相談	金子書房	122-133	2016 年 3 月
64	斎藤真緒	『ケアする』ーケアはジェンダーから自由になれるか？『ジェンダーで学ぶ社会学(全訂新版)』	世界思想社	15 章	2015 年 10 月
65	日本生徒指導学会編著 <u>野田正人</u>	現代生徒指導論	学事出版	150-153	2015 年 9 月
66	<u>村本邦子</u> ・中村正・荒木穂積	臨地の対人援助学ー東日本大震災と復興の物語	晃洋書房	1-8,43-51,96-101,134-169	2015 年 8 月
67	<u>村本邦子</u> ・ <u>中村正</u> ・荒木穂積	臨地の対人援助学	晃洋書房	19-25, 191-198	2015 年 7 月
68	滝沢昌彦他編・ <u>松本克美</u>	民事責任の法理	成文堂	295-316	2015 年 5 月
69	生田勝義・大平祐一・倉田玲・河野恵一・佐藤敬二・徳川信治・ <u>松本克美</u>	法学ことはじめ	法律文化社	15-78	2015 年 3 月
70	廣井亮一	家裁調査官が見た現代の非行と家族ー司法臨床の現場から	創元社	336	2015 年 3 月
71	池田清貴・上野はるみ・片山登志子・金成恩・桑田道子・古賀絢子・榊原富士子・佐々木健・新川明日菜・高杉直・長田真里・中村正・松久和彦・ <u>村本邦子</u> ・ <u>山口亮子</u>	離婚紛争の合意による解決の支援と子どもの意思の尊重	日本加除出版	120-147	2014 年 10 月
72	サトウタツヤ・北岡明佳・土田宣明(編)八木保樹・岡本直子・矢藤優子・岡本直子・谷晋二・望月昭・山本博樹・宇都宮博・櫻井芳雄・星野祐司・服部雅史・藤健一・小塩真司・文野洋・ <u>廣井亮一</u> ・西垣悦代	心理学スタンダードー学問する楽しさを知る	ミネルヴァ書房	241-253	2014 年 4 月
73	君島東彦・名和又介・横山治生編 <u>村本邦子</u>	戦争と平和を問い直すー平和学のフロンティア	法律文化社	第五章	2014 年 4 月
74	<u>村本邦子</u> 編著	日中戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラムの開発	立命館大学人間科学研究所	270	2014 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		～国際セミナー「南京を思い起こす2013」の記録と HWH7 年の成果(インクルーシブ社会研究1)(※17)			
75	同編集委員会 委員長 相澤仁・野田正人	児童自立支援施設運営ハンドブック	厚生労働省雇用均等・児童家庭局 家庭福祉課	52-70、266-280	2014 年 3 月
76	相澤仁監修・野田正人編集 梅山佐和ほか著	施設における子どもの非行臨床 児童自立支援事業概論	明石書店	259	2014 年 1 月
77	望月昭・村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之(編著)・中村正・荒木穂積・竹内謙彰・野田正人・谷晋二	対人援助学の到達点	晃洋書房	3-22	2013 年 11 月
78	藤田政博・越智啓太・若林宏輔・周防正行・指宿信・大上渉・巖島行雄・仲真紀子・浜田寿美男・荒木伸怡・後藤貞人・綿村英一郎・佐伯昌彦・廣井亮一・村井敏邦・入江秀晃・高木光太郎・堀田秀吾・サトウタツヤ・中田友貴	法と心理学	法律文化社	168-181	2013 年 9 月
79	中田邦博・鹿野菜穂子編 松本克美	基本講義 消費者法	日本評論社	188-199	2013 年 9 月
80	春日井敏之・近江兄弟社 高等学校単位制課程編・ 野田正人	出会い直しの教育	ミネルヴァ書房	217-223	2013 年 9 月
81	広渡清吾・浅倉むつ子・今村与一・松本克美	清水誠先生追悼論集・日本社会と市民法学	日本評論社	513-527	2013 年 8 月
82	望月昭・村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之(編著)・中村正・荒木穂積・竹内謙彰・野田正人・谷晋二	対人援助学の到達点	晃洋書房	53-66	2013 年 7 月
83	望月昭・村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之(編著)・中村正・荒木穂積・竹内謙彰・野田正人・谷晋二	対人援助学の到達点	晃洋書房	168-179	2013 年 7 月
84	日本家族研究・家族療学会編・中村正・廣井亮一	家族療法テキストブック	金剛出版	210	2013 年 7 月
85	鹿野菜穂子・中田邦博・松本克美編	長尾治助先生追悼論文集・消費者法と民法	法律文化社	235-245	2013 年 6 月

【テーマ⑤ 基礎研究チーム】

No.	著者名	図書名	出版社名	総頁数	発表年月
86	渡辺克典編	生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」2(インクルーシブ社会研究 11)(※17)	立命館大学人間科学研究所	1-2,132-133	2016 年 3 月
87	立命館大学生存学研究センター編 渡辺克典	生存学の企て——障害病異と共に暮らす世界へ	現代書館	113-141	2016 年 3 月
88	野家啓一(翻訳編集委員長) 松原洋子	「優生学」(翻訳)『スクリプナー思想史大事典』第9巻	丸善出版	3391-3397	2016 年 1 月
89	立岩真也	精神病院体制の終わり——認知症の時代に	青土社	433	2015 年 11 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

90	吉見俊哉編・立岩真也	ひとびとの精神史5『万博と沖縄返還——一九七〇前後』	岩波書店	257-284	2015 年 11 月
91	天田城介・渡辺克典編	大震災の生存学	青弓社	11-20	2015 年 11 月
92	早川 一光・西沢 いづみ 立岩真也	わらじ医者のかた道——民主的医療現代史	青土社	59-193,227-230	2015 年 10 月
93	田裕ほか編・松原洋子	『アジア・太平洋戦争辞典』妊産婦手帳	吉川弘文館	526	2015 年 10 月
94	松原洋子	国民優生法	吉川弘文館	223	2015 年 10 月
95	横田弘・立岩真也	増補新装版 障害者殺しの思想	現代書館	223-249	2015 年 6 月
96	立岩真也	与えられる生死:1960 年代——『しのめ』安楽死特集／あざらし子／重度心身障害児／「拝啓池田総理大学殿」他	Kyoto Books		2015 年 5 月
97	上野千鶴子・立岩真也	セクシュアリティをことばにする 上野千鶴子対談集「ケアの値段はなぜ安いのか」(対談)	青土社	103-153	2015 年 5 月
98	立岩真也	良い死 コリア語版 良い死 コリア語版・序文	青年出版	8-14	2015 年 5 月
99	中河伸俊・渡辺克典編	触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学	新曜社	i-viii,26-45	2015 年 5 月
100	渡辺克典編	生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」(インクルーシブ社会研究 5)(*17)	立命館大学人間科学研究所	1-2,169-170	2015 年 3 月
101	立岩真也	身体の現代・記録(準)——試作版:被差別統一戦線～被差別共闘／楠敏雄	Kyoto Books		2014 年 12 月
102	公益財団法人たばこ総合研究センター編・立岩真也	談 100 号記念選集 「公共性による公共の剥奪」	水曜社	108-120	2014 年 11 月
103	日本老年行動学会監修 大谷いづみ	高齢者のこころとからだ事典	中央法規出版	542-543	2014 年 9 月
104	立岩真也	自閉症連続体の時代	みすず書房	291	2014 年 8 月
105	小泉義之	ドゥルーズと狂気	河出書房新社	378	2014 年 7 月
106	田島明子編著・立岩真也	「存在を肯定する」作業療法へのまなざし - なぜ「作業は人を元気にする!」のか 「存在の肯定、の手前で」	三輪書店	25-69	2014 年 6 月
107	大谷いづみ	安楽死と尊厳死	金芳堂	108-115	2014 年 3 月
108	立岩真也	造反有理 ——精神医療の現代史へ	青土社	434	2013 年 11 月
109	藤村正之編・立岩真也	協働性の福祉社会学——個人化社会の連帯「障害者の自立生活運動」	東京大学出版会	29-48	2013 年 6 月
110	立岩真也	私的所有論 第2版	生活書院	973	2013 年 5 月
111	松原洋子	「優生学」、玉井真理子・松田純責任編集『シリーズ生命倫理学11 遺伝子と医療』	丸善出版	125-142	2013 年 4 月

<学会発表>

【テーマ① 方法論チーム】

No.	発表者名	発表課題名	学会名	開催地	発表年月
1	稲葉光行	えん罪救済センターの開設に向けて	シンポジウム企画「死刑えん罪とDNA鑑定」	TKC 東京本社(東京都)	2016 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

2	稲葉光行	日本におけるイノセンス・プロジェクト～えん罪救済センターの役割と展望	シンポジウム企画「えん罪救済の新たな幕開け」	立命館大学(大阪府)	2016 年 3 月
3	若林宏輔	『法と心理学』の学融のススメ	鹿児島大学法文学部シンポジウム「法学と心理学の教育における架橋」	鹿児島大学(鹿児島県)	2016 年 3 月
4	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジェクトの立ち上げに向けて	日本版イノセンス・プロジェクトの可能性を考える」東京集会	青山学院大学(東京都)	2015 年 11 月
5	由井秀樹	体外受精の臨床応用と日本受精着床学会の設立	日本科学史学会第 19 回西日本研究大会	徳島大学(徳島県)	2015 年 11 月
6	由井秀樹(オーガナイザー兼報告者)・利光恵子・山本由美子・吉田一史美	公募ワークショップ「生殖と医療をめぐる現代史研究と生命倫理」	第 27 回日本生命倫理学会年次大会	千葉大学(千葉県)	2015 年 11 月
7	中田友貴・サトウタツヤ	日本独自の取調べ録画映像提示方式は自白の任意性に影響を与えるか? — 画面との比較から—	法と心理学会第 16 回大会	獨協大学(埼玉県)	2015 年 10 月
8	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジェクト設立の背景と展望	法と心理学会第 16 回大会	獨協大学(埼玉県)	2015 年 10 月
9	若林宏輔	新時代の心理学的供述分析—— 取調べの可視化以降の可能性について	法と心理学会第 16 回大会	獨協大学(埼玉県)	2015 年 10 月
10	Saki Yamada, <u>Tatusya Sato</u>	3D Visualization of the “Free Conviction”: The Decisions of the Nabari Case.	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
11	Ayako Saito, <u>Tatusya Sato</u>	Are probationers/parolees really different from non-probationers/non-parolees after reintegration?: An analysis of employer interviews by applying the Trajectory Equifinality Model	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
12	Yuki Kosaka, <u>Tatusya Sato</u>	Consideration of discussion pattern in Japanese citizen judge system; integration of qualitative and quantitative analysis	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
13	Yuki Nakata, <u>Tatusya Sato</u>	How should be video-record of police investigations?: Focus On Camera perspective and presentation style	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
14	Ayae Kido, Shoka Amano and <u>Tatusya Sato</u>	Ethnography of Temporally Housing in Fukushima Prefecture: Aim to Construct Resilient Society.	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
15	Mitsuyuki Inaba	A consideration of East-asian way of exonerating wrongfully convicted individuals	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
16	Shinya Saito, <u>Mitsuyuki Inaba</u> , and Akihiro Uemura,	Construction of Visual Database for Judicial Information Using Interactive-CG	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
17	豊田香・番田清美・岡部大祐・ <u>安田裕子</u>	質的研究方法を基礎とした思考技術プログラム開発の試	日本質的心理学会第 12 回大会	宮城教育大学(宮城県)	2015 年 10 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		み「時間的展望(過去・現在・未来)能力に着目したキャリア発達支援ツール」			
18	安田裕子・森岡正芳・サトウタツヤ・黒羽カテリーナ・山田嘉徳・小澤義雄・滑田明暢	対話的自己理論の展開と応用—共生社会に生きる私とあなたへの接近	日本質的心理学会第 12 回大会	宮城教育大学(宮城県)	2015 年 10 月
19	Ryozo Matsuda	Linking and persuading roles of policy ideas: Development of sub-national governance of health and long-term care in Japan	2015 Annual ESPAnet Conference: THE LOST AND THE NEW WORLDS OF WELFARE (3-5 September 2015)	デンマーク	2015 年 9 月
20	Sato, T., Mattos, de E., Salgado, J., Kido, A., Tian, Y., & Yasuda, Y.	Potentials of trajectory equifinality approach in Developmental Psychology.	7th European Conference on Developmental Psychology	Braga, Portugal	2015 年 9 月
21	Kanzaki Mami and Sato Tatsuya	Understanding the development of students who had experienced school nonattendance.	7th European Conference on Developmental Psychology	Braga, Portugal	2015 年 9 月
22	Tian, Y., & Sato, T.	Cultural Transition of Chinese Students in Japan: Understanding the Process of Value Transformation by Using Trajectory Equifinality Approach.	7th European Conference on Developmental Psychology	Braga, Portugal	2015 年 9 月
23	Daichi Shimizu & Tatsuya Sato	The learning process of university students both in lectures and in extracurricular activities : From the interview with senior students	7th European Conference on Developmental Psychology	Braga, Portugal	2015 年 9 月
24	Kiyomi Banda, Namiko Takahashi, Sato Tatsuya and Yuko Yasuda	Career Identity Work – Visualization of the process of students' career development in school-to-work transition –	IAEVG International Conference Tsukuba	茨城県	2015 年 9 月
25	サトウタツヤ	社会問題解決型心理学の可能性:学際から学融へ	日本心理学会第 79 回大会	名古屋国際会議場(愛知県)	2015 年 9 月
26	サトウタツヤ	心理調査士の現状と展望:学際から学融へ	日本心理学会第 79 回大会	名古屋国際会議場(愛知県)	2015 年 9 月
27	増井秀樹・水澤慶緒里・黒澤泰・滑田明暢・小崎恭弘・安田裕子	夫婦・家族関係における協同	日本心理学会第 79 回大会	名古屋国際会議場(愛知県)	2015 年 9 月
28	安田裕子・松嶋秀明・久保樹里・齋藤絢子・大倉得史・森直久	更生の道を時間と社会に拓くということ—加害性と被害性に留意して	日本心理学会第 79 回大会	名古屋国際会議場(愛知県)	2015 年 9 月
29	若林宏輔	応用心理学史としての法心理学史の再構築	日本心理学会第 79 回大会(公募シンポジウムの企画・司会)	名古屋国際会議場(愛知県)	2015 年 9 月
30	稲葉光行・抱井尚子	混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ	国際混合研究法学会アジア地域会議	立命館大学(大阪府)	2015 年 9 月
31	廣瀬真理子・安田裕子	複線径路等至性(TEM)アプローチとテキストマイニングによる混合研究法／協働により何が捉えられるか?(ワークショップ講師)	国際混合研究法学会 アジア地域会議	立命館大学(大阪府)	2015 年 9 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

32	小坂祐貴・福田茉莉	裁判員裁判の評議体内で裁判員同士のコミュニケーションが生み出すダイナミクスの検討.	国際混合研究法学会アジア地域会議	立命館大学(大阪府)	2015 年 9 月
33	Sato, T., Mattos, de E., Salgado, J., Kido, A., Tian, Y., & Yasuda, Y.	Potentials of trajectory equifinality approach in Developmental Psychology	17th European Conference on Developmental Psychology	University of Minho (Portugal.)	2015 年 9 月
34	Banda, K., Takahashi, N., Sato, T., & Yasuda, Y.	Career Identity Work: Visualization of the process of students' career development in school-to-work transition	IAEVG International Conference	つくば国際会議場(茨城県)	2015 年 9 月
35	Kanzaki M and Sato T 福田茉莉	Understanding the development of students who had experienced school nonattendance.	17th European Conference on Developmental Psychology.	University of Minho (Portugal.)	2015 年 9 月
36	Shimizu, D., & Sato, T. 福田茉莉	The Learning genetic process of undergraduate student in campus life: From the interview with senior students.	17th European Conference on Developmental Psychology.	University of Minho (Portugal.)	2015 年 9 月
37	Nakata, Y., Sato, T 福田茉莉	The effect of presentation of video-taped investigation on jury decision making	European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015	Nuremberg.(Germany)	2015 年 8 月
38	Nakata, Y., Sato, T 福田茉莉	Proposal of discussion pattern in Japanese lay judge system by qualitative analysis method.	European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015	Nuremberg.(Germany)	2015 年 8 月
39	Nakata, Y., Sato, T 福田茉莉	Efforts to promote and maintain employment of probationers/parolees by cooperative employers.	European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015	Nuremberg.(Germany)	2015 年 8 月
40	稲葉光行	日本版イノセンス・プロジェクトの設立とその展望	台湾冤獄平反協會フォーラム	台湾	2015 年 8 月
41	Wakabayashi, K.	What is the Best Deliberation Structure for Citizen Participation in Criminal Justice ? Approach from the View of Social Psychology	The 4th East Asian Law and Society Conference,	早稲田大学(東京都)	2015 年 8 月
42	Wakabayashi, K.	Brief History of Japanese Law and Psychology for the Criminal Investigation	International Workshop on Forensic Evidence and Social Science,		2015 年 8 月
43	神崎真実・福田茉莉	高校教育における人格形成—人格に対する心理学、現場の方針、生徒の語りの間の隔たりから—.	日本パーソナリティ心理学会 24 回大会	北海道教育大学札幌校(北海道)	2015 年 8 月
44	春日秀朗・福田茉莉	期待達成度認知が大学生の自我同一性の感覚に与える影響の検討.	日本パーソナリティ心理学会 24 回大会	北海道教育大学札幌校(北海道)	2015 年 8 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

45	Rumi Tokunaga, Hirotaka Urabe, Hiroyuki Shinoda	The perception of shadow and the apparent brightness in the space	The 38th European Conference on Visual Perception	Liverpool University (UK)	2015 年 8 月
46	Ryozo Matsuda	Re-knotting health care governance under financial pressure: a case study on evolving decentralized mechanisms of Japanese health system	The 2nd International Conference on Public Policy, (July 1 to July 4, 2015) on July 3 2015	Università Cattolica del Sacro Cuore (.イタリア)	2015 年 7 月
47	Ichiro Kuriki, Yumiko Muto, Kazuho Fukuda, Rumi Tokunaga, Delwin Lindsey, Angela Brown, Keiji Uchikawa, and Satoshi Shioiri	Categorical color clusters of Japanese color lexicon	International Color Vision Society (ICVS)	東北大学桜ホール(宮 城県)	2015 年 7 月
48	Mitsuyuki INABA, Michiru TAMAI, Kenji KITAMURA, Ruck THAWONMAS, Koichi HOSOI, Akinori NAKAMURA, and Masayuki UEMURA	Constructing Collaborative Serious Games for Cross-Cultural Learning in a 3D Metaverse	Replaying Japan 2015	立命館大学(京都府)	2015 年 5 月
49	Yato, Y., Hirose, S., Wallon, P., Mesmin, C., & Jobert, M.	Japanese Children's Drawing Processes and Performance on Bender Gestalt Test: Analysis Using a Digital Pen	Association for Psychological Science the 27th Annual Convention	New York(USA)	2015 年 5 月
50	由井秀樹	戦前・戦中期日本の都市部 における出産の施設化	第 41 回日本保健医療社会学 会大会	首都大学東京(東京 都)	2015 年 5 月
51	由井秀樹	日本における体外受精研究 黎明期の分野横断型共同研 究	日本科学史学会第 62 回年会・ 総会	大阪市立大学(大阪 府)	2015 年 5 月
52	木戸彩恵	"Kawaii" in modern Japanese society.	国際学会「CHI2015」	COEX Convention & Exhibition Center(KOREA)	2015 年 5 月
53	Mitsuyuki Inaba	Children-centered Learning Community and Collaborative Activity for Regional Development	University-Community Links (UCLinks) Conference 2015	アメリカ	2015 年 3 月
54	中坪史典・香曾我部 琢・境愛一郎・安田裕 子・刑部育子	保育者同士の対話を促すツ ールとしての複線径路・等至 性アプローチ(TEA)―保育カ ンファレンスの新たなデザイ ン	日本発達心理学会第 26 回大 会	東京大学(東京都)	2015 年 3 月
55	安田裕子	複線径路・等至性アプローチ (TEA)―過程と発生をとらえ る(チュートリアル・セミナー 「新しい発達研究のための基 礎講座」講師)	日本発達心理学会第 26 回大 会	東京大学(東京都)	2015 年 3 月
56	豊田香・安田裕子・勝 谷紀子・森本真由美・ 曾山いづみ	成人のアイデンティティの変 容と発達を示す社会的支援 の介入のタイミングの検討―	日本発達心理学会第 26 回大 会	東京大学(東京都)	2015 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		質的研究法 TEA を分析の枠組みとして			
57	滑田明暢	実在物と家事としての片付け行動の変容	日本発達心理学会第 26 回大会	東京大学(東京都)	2015 年 3 月
58	伊藤大輔・稲葉光行	複合的媒介人工物としてのビデオ作品がもつ意味 ―平成 26 年度八幡子ども会議委員による市長提言を事例として―	教育工学会「学習支援環境とデータ分析／一般」研究会	九州大学(福岡県)	2015 年 2 月
59	松田亮三・吉田甫・谷晋二・村本邦子・小泉義之・稲葉光行	対人支援における国際連携の可能性	立命館大学人間科学研究所年次総会・「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」プロジェクト公開研究会	立命館大学(京都府)	2015 年 1 月
60	栗木一郎・武藤ゆみ子・徳永留美・福田一帆 , ・ Delwin T. Lindsey , Angela M. Brown, 内川恵二・塩入 諭	クラスタ分析による日本語自由色名の最適カテゴリ数の検討	日本視覚学会冬期大会	工学院大学 (東京都)	2015 年 1 月
61	松田亮三	医療機構がバナンスの変化―国家・市場・地域	日本医療経済学会第 38 回学術研究大会	京都私学会館(京都府)	2014 年 12 月
62	Mitsuyuki Inaba	A Trend of DH Research on Japanese Arts and Cultures: From Literary and Linguistic Computing to Digital Scholarship	5th International Conference of Digital Archives and Digital Humanities	中国	2014 年 12 月
63	Mitsuyuki Inaba	A trend of DH research in Japan: Cultivating a new tradition of digital scholarship	1st International Symposium on Digital Humanities	Ajou University(韓国)	2014 年 12 月
64	安田裕子・サトウタツヤ・伊東美智子・和田美香・北出慶子	分岐点での関わり・援助を考える―ボーダーを超えて、TEA で捉えられる、人のライフの変容と維持	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
65	由井秀樹	<u>A Historical Study on Life-saving Intervention for Premature Infants and Maternal & Child Health Policy in Japan(*1)</u>	国際学会 HEALTH POLICY AND POLITICS IN DIVERSIFYING SOCIETIES : ASIAN AND GLOBAL ISSUES CONFERENCE	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
66	滑田明暢・田村彩佳・望月昭	トークンシステムを用いた家庭内の片付け行動の促進	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
67	Nakata, Y. & Sato, T	The history of Forensic psychology research in Japan :1900-1945. , China University of Political Science and Law, China, 18th, OCT., 2014	8th East Asian Law and Psychology Conference	Beijing,(China)	2014 年 10 月
68	Mitsuyuki Inaba	A Possibility of A Mixed-Methods Inquiry for Re-examining Criminal Procedures in Japan	The 8th East Asian Psychology and Law Conference	中国	2014 年 10 月
69	松本克美・村本邦子・安田裕子・金成恩・後	児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法と心理	第 15 回法と心理学会	関西学院大学(兵庫県)	2014 年 10 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	藤弘子				
70	上村晃弘・福田茉莉	PC遠隔操作事件についての ブログ分析	第 15 回法と心理学会	関西学院大学(兵庫 県)	2014 年 10 月
71	徳永留美・篠田博之	人の顔色の色名と想起され る色についての研究	第 15 回法と心理学会	関西学院大学(兵庫 県)	2014 年 10 月
72	山崎優子	示談の成立の有無が検察審 査員の判断に及ぼす影響	第 15 回法と心理学会	関西学院大学(兵庫 県)	2014 年 10 月
73	安田裕子・三田地真 実・荒川歩・松本玲 子・豊田香・田代裕一 朗	時間と状況のなかでパーソ ナリティを捉える TEA(複線 径路・等至性アプローチ)—実 践的方法論としての可能性 の拡がり	日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会	山梨大学(山梨県)	2014 年 10 月
74	福田茉莉・安田裕子・ 豊田香・鈴木美枝子・ 滑田明暢・能智正博・ 塩浦暲	複線径路等至性モデル (TEM)の実践と展開—『ワー ドマップ 複線径路等至性ア プローチ(TEA)』刊行に向け て	日本質的心理学会第 11 回大 会	松山大学(愛媛県)	2014 年 10 月
75	滑田明暢	TEA 研究の海外動向— TEM/TEA on the globe	日本質的心理学会第 11 回大 会	松山大学(愛媛県)	2014 年 10 月
76	Wakabayashi, K.	Inside deliberation: Comparing the statistical visualizing method	8th East Asia law and psychology conference,	China University of Political Science and Law(CHI)	2014 年 10 月
77	由井秀樹	日本における不妊医療研究 の系譜	日本生命倫理学会第 26 回 年次大会	浜松アクシティコング レスセンター(静岡県)	2014 年 10 月
78	松田亮三	日本医療の制度配置・変化と 継続性	第 10 回社会保障国際フォー ラム	中国	2014 年 9 月
79	Mitsuyuki Inaba	Children-Centered Learning Community and Collaborative Activity for Social Improvement	The 2nd International Conference on Lifelong Learning for All 2014 (LLL 2014)	Chulalongkorn University(中国)	2014 年 9 月
80	安田裕子・北出慶子・ 田一葦・上川多恵子・ サトウタツヤ・山田人 士	第二言語の学習と教育はい かになされるか?—社会文 化的文脈と時間的プロセスの なかで達成される自己変容 への着目	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
81	若林宏輔	裁判員評議研究の ABC ~ 失敗例を参考に~	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
82	山崎優子・石崎千景	何が死刑制度に対する市民 の認識を規定しているのか	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
83	Wakabayashi, K.	Inside Deliberation: Comparing between pure jury and mixed jury deliberation	A Symposium on Japanese Criminal Justice And Psychology and Law in Japan	University of Hawaii (U.S.A.)	2014 年 9 月
84	由井秀樹	明治期から戦後初期の医学 的言説における人工授精	第 24 回日本家族社会学会大 会	東京女子大学(東京 都)	2014 年 9 月
85	稲葉光行	テキストマイニング手法を用 いた供述調書の分析	関西自白研究会		2014 年 8 月
86	Mitsuyuki INABA, Michiru TAMAI, Kenji KITAMURA, RuckTHAWONMAS, Koichi HOSOI, Akinori NAKAMURA, and	Implementing and Evaluating Collaborative Serious Games for Japanese Cultural Learning in 3D Metaverse	Replaying Japan Again: 2nd International Japan Game Studies Conference 2014	University of Alberta (カナダ)	2014 年 8 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	Masayuki UEMURA				
87	<u>Mitsuyuki Inaba</u> , Michiru Tamai, Kenji Kitamura, Ruck Thawonmas, Koichi Hosoi, Akinori Nakamura, and Masayuki Uemura	Japanese Culture in 3D Metaverse(Demonstration)	Replaying Japan Again: 2nd International Japan Game Studies Conference 2014	University of Alberta (カナダ)	2014 年 8 月
88	<u>Sato, T., Yasuda, Y., & Nameda, A.</u>	Understanding Compositionwork from the perspective of TEA: Trajectory Equifinality Approach(Applying Compositionwork to qualitative research about grasping experiences of an infertile woman focusing Bifurcation Point(BFP)	The 8th International Conference on the Dialogical Self,	The Hague University of Applied Sciences(The Netherlands)	2014 年 8 月
89	由井秀樹	男性不妊の不可視化と母性 保護概念——非配偶者間人 工授精は誰のための処置だ ったか？	2014 年度家族問題研究学会 大会シンポジウム	早稲田大学(東京都)	2014 年 8 月
90	Miyaji, A. and <u>Sato, T.</u> <u>福田茉莉</u>	Introduction and Maintenance Process of Music-mediated Activity in a Day Care Center for the Elderly in Japan	The Eighth International Conference on the Dialogical Self	The Hague (Netherlands)	2014 年 8 月
91	Kanzaki M and <u>Sato T</u> <u>福田茉莉</u>	The process of positioning against schools: from the life stories of the students who experienced school refusal and re-went to a school.	The Eighth International Conference on the Dialogical Self	The Hague (Netherlands)	2014 年 8 月
92	<u>Sato, T., Yasuda, Y., & Nameda, A.</u>	Understanding Compositionwork from the perspective of TEA: Trajectory Equifinality Approach	8th International Conference on the Dialogical Self	The Hague University (Netherlands)	2014 年 8 月
93	Nameda, A.	Having no feeling of conflicts but existing differences between attitudes and reality: Understanding balance of paid work and household work	8th International Conference on the Dialogical Self	The Hague University (Netherlands)	2014 年 8 月
94	松田亮三・ <u>福田茉莉</u> ・ 石橋修	アクション・リサーチのための 学実連携構築:「支える医 療」共同プロジェクトでの経 験	第55回日本社会医学学会総会	名古屋大学(愛知県)	2014 年 7 月
95	松田亮三	健康格差に対する政策展開 —理論と実践	第55回日本社会医学学会総会	名古屋大学(愛知県)	2014 年 7 月
96	<u>Ryozo MATSUDA</u> and Monika STEFFEN	Multilevel Governance in Comparison:	23rd World Congress of Political Science	ポーランド	2014 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		national-Regional Dynamics in the Regulation of the French and the Japanese Healthcare systems			
97	稲葉光行	第1回国際ミックス法学会参加報告	KTH 研究会	立命館大学(京都府)	2014 年 7 月
98	稲葉光行	多言語・多文化時代の取調べと可視化(*10)	国際シンポジウム「取調べと可視化—新しい時代の取調べ技法・記録化と人間科学—」	立命館大学(京都府)	2014 年 7 月
99	Wataru Ozawa et al.	“The Local Community Volunteer Social Worker System in Japan: Survey-data Analysis and Feedback to the Community”	ISTR(International society for third sector research) 11th International Conference	ミュンスター大学(ドイツ)	2014 年 7 月
100	滑田明暢	インターネット上の育児に関する掲示板における投稿と反応の分析	日本社会心理学会第 55 回大会	北海道大学(北海道)	2014 年 7 月
101	稲葉光行	医療現場におけるネットワーキング	KTH 研究会	立命館大学(京都府)	2014 年 6 月
102	Mitsuyuki Inaba and Hisako Kakai	The Grounded Text Mining Approach as a New Technique for Mixed Methods Research: From an Analysis of a Focus Group Interview on Cancer Disclosure with Japanese People	2014 International Mixed Methods Conference	Boston College(アメリカ)	2014 年 6 月
103	サトウタツヤ・三枝将史・中島希・安田裕子	コミュニティ心理学と TEM の出会い—その出会いは幸福な径路をたどるのか	日本コミュニティ心理学会第 17 回大会	立命館大学(京都府)	2014 年 6 月
104	稲葉光行	A 事件における情状鑑定	KTH 研究会	立命館大学(京都府)	2014 年 5 月
105	Yuko Yato, Shohei Hirose, Philippe Wallon, Claude Mesmin, Matthieu Jobert	Japanese adolescents' concentration and attention measured by the d2-R test	Association for Psychological Science 26th Annual Convention	San Francisco(USA)	2014 年 5 月
106	若林宏輔	近代日本の法と心理学史 — 明治から現代の応用心理学 —	立命館大学土曜講座「専門研究への橋わたし—入門シリーズ(2) 第 3095 回」.	立命館大学(京都府)	2014 年 5 月
107	Kuriki I., Hongfei Xie, Tokunaga R., Matsumiya K., Shioiri S.	Interaction of color-defined and luminance-defined motion signals in human visual cortex	Vision Science Society 13th Annual Meeting	TradeWinds Island Resorts (USA)	2014 年 5 月
108	伊藤大輔・稲葉光行	子どもを中心とした地域創造のための協働学習—平成 25 年度八幡子ども会議の事例を中心に—	日本教育工学会「教師教育と授業研究/一般」研究会	愛知工業大学(愛知県)	2014 年 3 月
109	Mitsuyuki Inaba	Forming a community of children-centered collaborative activity for social improvement: a case study of Yawata Children's Conference	UC Links Annual Conference 2014	カリフォルニア大学(アメリカ)	2014 年 3 月
110	Mitsuyuki Inaba, Michiru Tamai, Ruck Thawonmas, Koichi Hosoi, Akinori	Developing Collaborative Serious Game for Japanese Cultural Learning	Digital Humanities Australasia 2014	オーストラリア	2014 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	Nakamura, and Masayuki Uemura	in 3D Metaverse			
111	大倉得史・安田裕子・松島京・山崎徳子・平松知子・秋田喜代美・鯨岡峻	文化間葛藤の場としての保育	日本発達心理学会第 25 回大会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
112	安田裕子	不定さから、経験が社会と未来に拓かれるとき—非配偶者間の生殖補助医療の出現のなかで	日本発達心理学会第 25 回大会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
113	篠田博之	光と視覚 —色を正しく効果的に見せる技術と 6W2H—	第 16 回カラーコーディネーターシンポジウム	大阪府	2014 年 3 月
114	Yasuda, Y.	What meanings does the rupture bring in life? : From experiences of a woman who faced the crisis of reproduction	III International Seminar of Cultural Psychology,	PousadaJambo(Brazil)	2014 年 3 月
115	Nameda, A.	The meaning of retirement for about sixty year-old Japanese couple: The balance among paid work, personal life and household work	3 rd International Seminar of Cultural Psychology	Salvador (Brazil)	2014 年 3 月
116	西田公昭・戸谷嘉秀・山崎優子・村山綾・大坪庸介	裁判員裁判と社会心理学(集団意思決定研究)	関西学院大学応用心理科学研究センター主催シンポジウム「裁判員裁判と社会心理学(集団意思決定研究)」	関西学院大学(兵庫県)	2014 年 3 月
117	Nameda, A.	What divide perceiving fairness from unfairness? Communal and individual sense of fairness in performing work/ family roles in close relationships	Fifteenth Annual Meeting of The Society for Personality and Social Psychology	Austin convention center (The United States of America)	2014 年 2 月
118	上村晃弘・斎藤進也・若林宏輔・山崎優子・稲葉光行・サトウタツヤ	三次元表現による集団討議プロセス可視化ソリューションの可能性	人間科学研究所年次総会(インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究キックオフミーティング)	立命館大学(京都府)	2014 年 1 月
119	稲葉光行・松田亮三・土田宣明・谷晋二・中村正・小泉義之	インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究を展望する	人間科学研究所年次総会(インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究キックオフミーティング)	立命館大学(京都府)	2014 年 1 月
120	安田裕子・サトウタツヤ・福田茉莉・木戸彩恵	過程と発生を捉える TEA(複線径路・等至性アプローチ)—不定とともにある実存を探究する、人間科学の質的研究法	人間科学研究所年次総会(インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究キックオフミーティング)	立命館大学(京都府)	2014 年 1 月
121	栗木一郎・謝 鴻飛・徳永留美・松宮一道・塩入 諭	色運動・輝度運動信号の脳内での相互作用	日本視覚学会冬期大会	工学院大学(東京都)	2014 年 1 月
122	Mitsuyuki Inaba	Implementing Collaborative Serious Game for Situated Learning of Japanese Culture in 3D Metaverse	Pacific Neighborhood Consortium (PNG) Annual Conference 2013	京都大学(京都府)	2013 年 12 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

123	Mitsuyuki Inaba and Saki Yamada	Socio-Cultural Issues in Forensic Communication and Informational Justice	International Workshop on Informational Justice		2013 年 11 月
124	稲葉光行	法学教育における司法情報コミュニケーション学の可能性	情報ネットワーク法学会第 13 回研究大会	関西大学(大阪府)	2013 年 11 月
125	サトウタツヤ・福田茉莉・木戸彩恵・安田裕子	法／医療現場における質的研究のあり方と TEM の位置づけ	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
126	安田裕子・サトウタツヤ・松嶋秀明・西垣悦代・森岡正芳	対人援助の教育実践—学び手の語り ^{ナラティブ} と行 ^{アクション} 為をむすぶ、 ^{コラボレーション} 協働を促す	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
127	安田裕子・サトウタツヤ・廣瀬太介・廣瀬眞理子・松嶋秀明	ひきこもりの家族支援—TEM によってシステムに接近する試み	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
128	滑田明暢	家事遂行の変化へ向けた選択肢の理解—日常生活においても参照可能な知見の構築へ—	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
129	Wakabayashi, K.	Implications for informational justice in Saiban—in trials from a viewpoint of law and psychology	Informational Justice Research Group: Beyond the Principle of “Fairness” in the Criminal Procedure: Significance of the Notion, “Informational Justice”,	University of Hawaii(U.S.A.)	2013 年 11 月
130	Ryozo Matsuda	Policies on Diabetes and Public Health System of Japan: a situational analysis	First UK-Japan Conference on Public Health System	イギリス	2013 年 10 月
131	松田亮三	糖尿病対策と公衆衛生機構—日本の現状分析	第 1 回日英公衆衛生機構比較研究会議		2013 年 10 月
132	稲葉光行	公判廷における尋問者と供述者のディスコミュニケーション	法と心理学会第 14 回全国大会ワークショップ	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
133	稲葉光行	高度情報化社会における法心理学領域の展望	法と心理学会第 14 回全国大会ワークショップ	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
134	稲葉光行	法心理・司法臨床センターにおける法情報学への取り組み	立命館グローバル・イノベーション研究機構シンポジウム	立命館大学(滋賀県)	2013 年 10 月
135	稲葉光行	法情報学が拓くドキュメント・マネジメントの未来	立命館グローバル・イノベーション研究機構シンポジウム	立命館大学(滋賀県)	2013 年 10 月
136	Mitsuyuki Inaba	Cultural Learning through Virtual Museum: Implementing Collaborative and Situated Learning Environment for Japanese Culture in 3D Metaverse	The 2nd Yeongwol International Museum Forum 2013	Yeongwol(韓国)	2013 年 10 月
137	Mitsuyuki Inaba	Socio-Cultural Issues in Forensic Communication: A Case Study on Textual Analysis of Confession Statement and Trial Protocol.	The 7th East Asian Law and Psychology Symposium	Hallym University(韓国)	2013 年 10 月
138	山崎優子・安田裕子・林久美子・佐伯昌彦・福井厚・綿村英一郎	犯罪被害者をとりまく問題—臨床心理学、法社会学、法心理学からの検討	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
139	若林宏輔	評議構造の可視化—人数比が評議構造に与える影響	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

140	廣井亮一・若林宏輔・濱田ありさ・サトウタツヤ・葛野尋之	司法臨床の展開(第三報)—法心理・司法臨床家の養成をめぐる	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
141	若林宏輔・稲葉光行・斎藤進也・山田早紀・吉井匡	高度情報化社会における法心理学領域の展望	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
142	Yasuda, Y.	The construction of the cooperation system about the support for victims suffered from domestic violence by their husbands: With action research for supporters	the 8th European Congress on Violence in Clinical Psychiatry,	ICC International Convention Center (Belgium)	2013 年 10 月
143	Wakabayashi, K.	Visualization of the deliberation process of the criminal justice trial as group decision-making in 3D cube	The 7th East Asian Psychology and Law conference,	Hallym University (Korea)	2013 年 10 月
144	Tokunaga R., Shinoda H.	The influence of visual environment or visual perception on the cases	The 7th East Asian Psychology and Law Conference	Hallym University (Korea)	2013 年 10 月
145	松田亮三	グローバル化— 医療政策の新しい課題	日本医療経済学会・第 37 回学術研究大会	京都私学会館(京都府)	2013 年 9 月
146	Nakata, Y. and Sato, T	The effect of defendant's nationality on jury decision making: A comparison of the crime	The European Association of Psychology and Law 2013	Coventry(UK)	2013 年 9 月
147	安田裕子・サトウタツヤ・松嶋秀明・森直久	文化心理学、活動理論、TEM によるケース・フォーミュレーション豊饒化の試み	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセンター(北海道)	2013 年 9 月
148	滑田明暢	家事遂行の意味づけを捉える	日本心理学会第 77 回大会	札幌市産業振興センター(北海道)	2013 年 9 月
149	滑田明暢	夫婦間の家事遂行における相互調整過程	日本心理学会第 77 回大会	札幌市産業振興センター(北海道)	2013 年 9 月
150	若林宏輔	評議構造の可視化からみる裁判員裁判の分析	日本心理学会第 77 回大会	札幌市産業振興センター(北海道)	2013 年 9 月
151	安田裕子・貝原己代子・村本邦子・吉田容子・吉浜美恵子	DV 被害者への支援における協働と連携	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 9 月
152	安田裕子・木戸彩恵・林晋子・大川聡子・豊田香・森直久	時間と場で、成りゆく生—スポーツ・看護・経営に広がる TEA の可能性	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
153	岡本直子・安田裕子・松嶋秀明・荘島幸子・能智正博	臨床心理学と他領域の架橋としての質的研究	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
154	赤阪麻由・サトウタツヤ・福田茉莉	難病者のつながりの場の展開とあり方—参加メンバーとの語り合いから	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
155	神崎真実・福田茉莉	教職員・スタッフは『気になる生徒』をどのように理解するのか—単位制高校での参与観察とインタビューを通して	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
156	田一葦・福田茉莉	深圳大学日本語学部生のアイデンティティの変容と形成	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

157	松原実香・サトウタツヤ・福田茉莉	萌えツーリズムによる福島復興の可能性	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
158	滑田明暢	夫婦における家事遂行に付与されている意味づけ—満足と公正感覚の視点からの検討	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 8 月
159	Wakabayashi, K.	Visualization of the deliberation process of the criminal justice trial as group decision-making in 3D cube,	European Association of Psychology and Law conference 2013	Coventry University (U.K.)	2013 年 9 月
160	Yamada, S. 福田茉莉	Visualization of Legal Disputes and Statements in Criminal Trials	European Association of Psychology and Law conference 2013	Coventry University (UK)	2013 年 9 月
161	Nameda, A., Wakabayashi, K., Nakatsuma, T., Hatano, T., Saito, S., Inaba, M. and Sato, T	Visualising narratives on the Great Earthquakes in Japan	European Association of Psychology and Law conference 2013	Coventry University (UK)	2013 年 9 月
162	赤阪麻由・福田茉莉	難病者のサポート・グループの場の生成と展開—炎症性腸疾患患者を対象にしたグループの実践から	日本人間性心理学会第 32 回大会	立正大学(東京都)	2013 年 9 月
163	長谷川恭子・安田裕子・和田美香・廣瀬太介・佐藤紀代子	心理臨床における TEM の可能性—個人の変容をどのように捉えるか	日本心理臨床学会第 32 回秋季大会	パシフィコ横浜(神奈川県)	2013 年 8 月
164	Yasuda, Y.	Infertility and Health: In the viewpoint of conversion of value on life	The 5th Asian Congress of Health Psychology	DaejeonConvention Center(Korea)	2013 年 8 月
165	Kanzaki, M. 福田茉莉	How do the teachers prompt school-refusing students to attend the high school?: Fieldwork in the alternative high school	The 5th Asian Congress of Health Psychology	Daejeon Convention Center (Korea)	2013 年 8 月
166	Kawamoto, S. 福田茉莉	Image of depression in university students by co-occurrence network analysis.	The 5th Asian Congress of Health Psychology	Daejeon Convention Center (Korea)	2013 年 8 月
167	Yamasaki, Y., & Ishizaki, C.	Factors that determine citizens' views on capital punishment	the 18th Conference of the European Society for Cognitive Psychology	ELTE University Congress Center (Hungary)	2013 年 8 月
168	松田亮三	健康の公平と社会医学の役割	第 54 回日本社会医学学会総会・シンポジウム「我が国の健康課題と社会医学の役割」	首都大学東京(東京都)	2013 年 7 月
169	松田亮三	医療の人口の健康への寄与—二つの接近法の概観	第 54 回日本社会医学学会総会	首都大学東京(東京都)	2013 年 7 月
170	Matsuda, R. and Steffen, M.	Learning from variations in institutions and politics : the	"Recent change in social health insurance" panel (Claus		2013 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		case of social health insurance in France and Japan	Wend)), The 1st International Conference of Public Policy (26 June-28 June 2013)		
171	<u>Nameda, A.</u> , <u>Wakabayashi, K.</u> , Nakatsuma, T., Hatano, T., <u>Saito, S.</u> , <u>Inaba, M. and Sato, T.</u>	Possibilities of narrative visualization: Case studies of lesson-learned-oriented archiving for natural disaster.	Digital Humanities 2013.	University of Nebraska(アメリカ)	2013 年 7 月
172	<u>Yato, Y.</u> , Hirose S., Jobert, M., Mesmin, C., Wallon, P.	Japanese preschoolers' drawing process and performance on Bender Gestalt test as analyzed by use of a digital pen	The 13th European congress of Psychology	Stockholm University(Sweden)	2013 年 7 月
173	Hirose, S., <u>Yato, Y.</u>	Changes in characteristic of self-assertion based on age by observation of young children	The 13th European congress of Psychology	Stockholm University(Sweden)	2013 年 7 月
174	Xie H., Kuriki I., <u>Tokunaga R.</u> , Matsumiya K., Shioiri S.	Motion signals in human visual system measured by adaptation effect in psychophysics and fMRI	Asia-Pacific Conference on Vision (APCV)	Suzhou (China)	2013 年 7 月
175	Shioiri S., Omori N., Kashiwase Y., Matsumiya K., Kuriki I., <u>Tokunaga R.</u>	Object based attention and attention spreading.	Asia-Pacific Conference on Vision (APCV)	Suzhou (China)	2013 年 7 月
176	山田早紀・村山満明・ 稲葉光行・脇中洋	ある公職選挙法違反事件に関する心理鑑定の検討	第 60 回関西自白研究会		2013 年 6 月
177	SATO, Tatsuya	Trajectory Equifinality Approach: Toward a Generalization and methodology in economic psychology.	The workshop on Idiographic Science: 'Methods of Psychological Intervention'		2013 年 5 月
178	Michiru Tamai, Mitsuyuki Inaba, Koichi Hosoi, Akinori Nakamura, Masayuki Uemura, and Ruck Thawonmas,	Collaborative game playing support by learning of Japanese traditional culture in the 3D metaverse	The international Conference on Japan Game Studies 2013	立命館大学(京都府)	2013 年 5 月
179	Fang, Y., Nakashima, R., Matsumiya K., <u>Tokunaga R.</u> , Kuriki I., Shioiri S.	Contribution of head movements to gaze shift during visual search in a large visual field	Vision Science Society 13th Annual Meeting	Waldorf Astoria Naples (USA)	2013 年 5 月
180	安田裕子	治療の継続と終結をめぐる当事者の語り—生殖補助医療技術の発展のなかで可視化される。家族をつくるということ	公開報告会 グローバル化時代における生殖技術と家族形成	立命館大学(京都府)	2013 年 4 月

【テーマ② 予見的支援チーム】

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
181	東山篤規	奥行き方向に伸びる交叉線：視空間のユークリッド性の検討	関西心理学会第 127 回大会	関西学院大学(兵庫県)	2015 年 11 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

182	東山篤規	Determination of the Somatosensory Horizontal Plane.	Psychonomic Society's 56th Annual Meeting	Sheraton Boston (USA)	2015 年 11 月
183	矢藤優子・廣瀬翔平・土田宣明・Philippe Wallon・Claude Mesmin・Matthieu Jobert	d2-R テストを用いた視覚的注意の測定と発達の変化：日独比較による検討	2015 年度立命館大学人間科学研究所年次総会	立命館大学(京都府)	2015 年 11 月
184	下野孝一・東山篤規・相田紗織	Framing can enhance the perceived depth of a picture.	The 38th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	University of Liverpool. (イギリス)	2015 年 8 月
185	Yato, Y., Hirose, S., Tsuchida, N., Wallon, P., Mesmin, C. & Jobert, M.	The d2-R test of attention; the comparison Between French and Japanese elderly people(*3)	The 14th European Congress of Psychology	Milan(Italy)	2015 年 7 月
186	Yato, Y., Hirose, S., Wallon, P., Mesmin, C., & Jobert, M.	Japanese Children's Drawing Processes and Performance on Bender Gestalt Test: Analysis Using a Digital Pen	Association for Psychological Science the 27th Annual Convention	New York(USA)	2015 年 5 月
187	矢藤優子	描線情報解析ソフトを用いた描画発達検査の分析	日本発達心理学会第 26 回大会	東京大学(東京都)	2015 年 3 月
188	亀井隆幸・八木保樹	重要他者に対する愛着が恋愛の欺瞞場面の評価に及ぼす効果－欺瞞エピソード刺激文の人称形式による違い－	日本心理学会発表論文集		2015 年
189	亀井隆幸・八木保樹	重要他者に対する愛着が恋愛の欺瞞場面に及ぼす緩和効果－プライミングの刺激課題による違い－	日本パーソナリティ心理学会発表論文集		2015 年
190	東山篤規	奥行き方向における平行線：視空間のユークリッド性の検討	関西心理学会第 126 回大会	大阪市立大学(大阪府)	2014 年 11 月
191	田中笑子・富崎悦子・渡辺多恵子・望月由紀子・徳竹健太郎・呉柏良・篠原亮次・杉澤悠圭・矢藤優子・山川紀子・山縣然太郎・安梅勲江	乳幼児期のかかわりが社会性発達に及ぼす影響：出生コホートと保育コホートによる検証	第 73 回日本公衆衛生学会総会	宇都宮東武ホテルグランデ(栃木県)	2014 年 11 月
192	土田宣明	シンポジウム「ケアと脳科学」話題提供	日本老年行動科学会第 17 回大会	明治学院大学(東京都)	2014 年 9 月
193	星野祐司・林明日香	手がかりの種類が自伝的記憶の特定性に与える影響	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
194	八木保樹	認知欲求の個人差が他者判断におけるメタ認知的感覚の利用に及ぼす影響	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
195	矢藤 優子・Philippe Wallon・Claude Mesmin・Matthieu Jobert・加藤義信	An attempt to computerize a projective approach	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
196	藤戸麻美・矢藤優子	幼児におけるうそ行動の認知的基盤の検討	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
197	岡本直子	各発達段階における対人恐怖心性の特徴	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月
198	磯井知子・岡本直子	若年層妊産婦におけるケアニーズ及びそれに伴う満足感の検討－妊娠期・周産期・育児初期に着目して－	日本心理学会第 78 回大会	同志社大学(京都府)	2014 年 9 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

199	吉田史明・星野祐司	非自発的行動場面における ブライム刺激が intentional binding に与える影響の検討	電気情報通信学会・ヒューマン 情報処理研究会	奈良県新公会堂(奈良 県)	2014 年 9 月
200	Atsuki Higashiyama and Tadashi Yamazaki	The effects of head and retinal-image orientations on apparent depth of light-and-shade pictures	The 37th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	セルビア	2014 年 8 月
201	岡本直子	演劇療法と「投影ドラマ法」の 比較-「私以外の役割」を通し た表現がもたらすもの-	日本心理臨床学会第 33 回秋 期大会	パシフィコ横浜(神奈川 県)	2014 年 8 月
202	KUSAKA Nahoko, TSUCHIDA Noriaki, NARUMOTO Jin	The effectiveness of pursuit of purpose in life program for “wonderful aging” on psychological well-being in older adults(*4)	28th edition, the International Congress of Applied Psychology	Paris(France)	2014 年 7 月
203	Yuko Yato, Shohei Hirose, Philippe Wallon, Claude Mesmin, Matthieu Jobert	Japanese adolescents’ concentration and attention measured by the d2-R test	Association for Psychological Science 26th Annual Convention	San Fransisco(USA)	2014 年 5 月
204	土田宣明・森川忍	運動抑制における加齢効果 —二重課題条件での反応タ イプの影響—	日本発達心理学会第 25 回大 会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
205	土田宣明	抑制機能の生涯発達の变化 を探る(ラウンドテーブル・話 題提供)	日本発達心理学会第 25 回大 会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
206	土田宣明	地域での高齢者のうつ・認知 機能低下予防の心理的介入 —生きがい創造による高齢 者の発達支援の可能性を探 る—(シンポジウム・話題提 供)	日本発達心理学会第 25 回大 会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
207	廣瀬翔平・矢藤優子	縦断観察による年少クラスの 幼児の自己主張の発達の变化	日本発達心理学会第 25 回大 会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
208	矢藤優子・廣瀬翔平・ Jobert Matthieu・ Mesmin Claude・ Wallon Philippe	d2-R テストを用いた日本人 小学生の注意・集中力の測 定- ADHD-RS との関連につ いて -	日本発達心理学会第 25 回大 会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
209	吉田史明・星野祐司	潜在学習が運動主体感に与 える影響	日本基礎心理学会第 32 回大 会	金沢市文化ホール(石 川県)	2013 年 12 月
210	都賀美有紀・星野祐 司	意味類似性が学習直後遅延 後の順序の記憶に及ぼす影 響	日本基礎心理学会第 32 回大 会	金沢市文化ホール(石 川県)	2013 年 12 月
211	山崎校・東山篤規	視覚的速度に及ぼす頭の位 置と歩行の効果	関西心理学会第 125 回大会	和歌山大学(和歌山 県)	2013 年 11 月
212	星野祐司	画像の記憶における邇及的 効果	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月
213	星野祐司	画像処理に埋め込まれた記 号的処理: 切り取ることの意 味	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月
214	廣瀬翔平・矢藤優子	外国の幼稚園に通う幼児の 自己主張と社会的受容	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月
215	藤戸麻美・矢藤優子	幼児におけるうそ行動と誤信 念理解との関連	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月
216	矢藤優子・藤戸麻美・ 杉本五十洋	保育園年長児におけるオート パイを使用した 教育実践に 関する実証的研究	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月
217	岡本直子	箱庭制作から得られる心的 体験とパーソナリティの関連	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセン ター(北海道)	2013 年 9 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		性			
218	岡本直子	臨床心理学と他領域の架橋としての質的研究(シンポジウム企画)	日本質的心理学会第10回大会	立命館大学(京都府)	2013年8月
219	岡本直子	臨床心理学と他領域との架橋となる調査方法の模索-調査の枠組みで関係性やプロセスをとらえる試み-(シンポジウム話題提供)	日本質的心理学会第10回大会	立命館大学(京都府)	2013年8月
220	東山篤規・山崎校	Anisotropy of texture gradient as depth cue	The 36th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	Bremen, Germany	2013年8月
221	岡本直子	「投影ドラマ」から得られる内的体験-パーソナリティとの関連性および体験内容に着目して-	日本心理臨床学会第32回大会	パシフィコ横浜(神奈川県)	2013年8月
222	Yato, Y., Hirose S., Jobert, M., Mesmin, C., Wallon, P.	Japanese preschoolers' drawing process and performance on Bender Gestalt test as analyzed by use of a digital pen(*3)	The 13th European congress of Psychology	Stockholm University(Sweden)	2013年7月
223	Hirose, S., Yato, Y.	Changes in characteristic of self-assertion based on age by observation of young children(*3)	The 13th European congress of Psychology	Stockholm University(Sweden)	2013年7月
224	岡本 直子	幼児期におけるファンタジーの意味②-一遊びに焦点を当てて-	日本モンテッソーリ協会(学会)第46回全国大会	シーガイアコンベンションセンター(宮崎県)	2013年7月
225	Yato, Y., Hirose, S., Jobert, M., Mesmin, C., Walon, P.	Comparing concentration and attention between French and Japanese students: A new methodological approach to the d2-R test	Pacific Rim International Conference	Disability and Diversity Hawaii(USA)	2013年4月
226	Shohei Hirose and Yuko Yato	Self-assertion and Social acceptance of young child who attends a foreign country's kindergarten	Pacific Rim International Conference	Disability and Diversity Hawaii(USA)	2013年4月

【テーマ③ 伴走的支援チーム】

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
227	山本耕平	日本におけるひきこもりの実態と支援課題	佛教大学総合研究所共同研究「『脱貧困』戦略の構築—共生社会のグランドデザイン」プロジェクト シンポジウム「東アジアにおける貧困と脱貧困政策の課題」	佛教大学(京都府)	2015年12月
228	Shinji TANI& Yayoi DAIO	Teaching Children with Autism to Understand "If I Were You" Sentences	Eighth International Conference of Association for Behavior Analysis International	京都府	2015年9月
229	山本耕平	386世代が韓国若者支援実践に与えた影響に関する検討 PDF —「客体から主体へ」を築き上げた力—	日本社会福祉学会第63回秋季大会	久留米大学(福岡県)	2015年9月
230	村上歩未・遠藤祐希・松本佑・富井奈菜実・荒木穂積・竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(4)ー小学校低学年～小学校高学年: ニーズ	日本自閉症スペクトラム学会第14回大会	札幌学院大学(北海道)	2015年8月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

		に合わせた個と集団の遊びの工夫ー			
231	三野範子・横田聖子・松本佑・野村朋・荒木美知子・荒木穂積・竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(5)ー小学校中学年～中学生:相互関係を高める活動ー	日本自閉症スペクトラム学会第 14 回研究大会	札幌学院大学(北海道)	2015 年 8 月
232	西川大輔・河合誠也・小林里帆・上田恵理子・松本佑・荒木穂積・竹内謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(6)ー中学生～高校生期:映画制作から見出した新たな可能性ー	日本自閉症スペクトラム学会第 14 回研究大会	札幌学院大学(北海道)	2015 年 8 月
233	小澤 亘	「日本語」というバリア:ニューカマーの子どもたちと学習権の保障	東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター活動報告(2015 年第 3 号)pp.113-125		2015 年 8 月
234	Shinji TANI, Yuanhong Ji, Nie-Hwa LAI	ACT Training for the Taiwanese Parents of Children with Disabilities	ACBS Annual World Conference 13	Berlin (Germany)	2015 年 7 月
235	Giovanni Miselli, Shinji TANI	Psychological Flexibility, ACT and Parent Training: Science and Experience	ACBS Annual World Conference 13	Berlin (Germany)	2015 年 7 月
236	山本耕平	子ども・若者のいのち、暮らしを守り育てる	佐世保市子どものいのちと心を守る市民ネットワーク第一回子どものいのちと心を守る講演会 i	佐世保(長崎県)	2015 年 5 月
237	櫻谷真理子	デンマークの保育理念・実践課題の検討	日本保育学会第68回大会	相山女学園大学(愛知県)	2015 年 5 月
238	OZAWA Wataru	Volunteer Sector facing the Super Aged Society in Japan	新自由主義的グローバル化と現代東アジアの社会経済構造の変容	立命館大学(京都府)	2015 年 3 月
239	山本耕平	ひきこもりつつ育つー若者の可能性に学ぶー	枚方市青少年課ひきこもり等子ども・若者相談支援センター、子ども・若者支援のための市民連続講座	大阪府	2015 年 3 月
240	小澤 亘	「日本語」というバリア:ニューカマーの子どもたちと学習権の保障	東京大学教育学研究科バリアフリー教育開発研究センター主催公開シンポジウム「教科書とバリアフリーーインクルーシブな社会のための教育の課題」	東京大学(東京都)	2014 年 12 月
241	中鹿直樹・望月昭	障害のある児童・生徒の継続的支援のための情報共有の仕組みについて	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
242	小島遼・吉尾玲美・水野しおり・立花周太・渡辺舞・中妻拓也・中鹿直樹・望月昭	疑似就労場面における「仲間を教える」役割設定が高等部生徒の行動におよぼす効果	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
243	小島 遼・中鹿直樹・望月 昭(他 8 名)	「人に教える」場面が特別支援学校高等部生徒二名にもたらす影響の検討	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
244	兵頭宏美・山本耕平	麦の郷実践・運動にみる当事者・実践者・地域住民の関係性に関する研究ー地域実践の対象から主体をめざしてー	日本社会福祉学会第 62 回秋季大会	早稲田大学(東京都)	2014 年 11 月
245	山本耕平	総合的な若者支援実践の哲学と方法を巡って	日本社会福祉学会第 62 回秋季大会	早稲田大学(東京都)	2014 年 11 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

246	山本耕平	若者の社会参加と働き方の保障—新しい学び方・働き方—	内閣府 困難を有する子ども・若者の相談業務に携わる公的機関職員研修	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)	2014 年 10 月
247	櫻谷真理子	親子関係の再構築について考える—児童養護施設入所児童・退所者・職員へのインタビューを通して—	第 20 回 JaSPCAN 学術集会「子ども虐待防止世界会議 名古屋 2014」	名古屋国際会議場(愛知県)	2014 年 9 月
248	小島拓・古田絵理・富井奈菜実・荒木穂積・ <u>竹内謙彰</u>	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(1)—幼児～小学校中学年:参加児の発達段階の変化を考慮した遊びの工夫	日本自閉症スペクトラム学会第 13 回研究大会	立命館大学(京都府)	2014 年 8 月
249	藤原さつき・重富紗希・中川万幾子・劉爽朗・横田聖子・荒木穂積・ <u>竹内謙彰</u>	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(2)—小学中学年～中学生:集団を意識した活動への参加を促すための試み	日本自閉症スペクトラム学会第 13 回大会	立命館大学(京都府)	2014 年 8 月
250	上田恵理子・小林里帆・松本佑・荒木穂積・ <u>竹内謙彰</u>	自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発(3)—中学生～高校生期:仲間意識を高める活動	日本自閉症スペクトラム学会第 13 回研究大会	立命館大学(京都府)	2014 年 8 月
251	小澤 亘	マイノリティの学習権保障と教科書アクセシビリティ	日本デジタル教科書学会 2014 年度年次大会	新潟(新潟市)	2014 年 8 月
252	Wataru Ozawa et al.	“The Local Community Volunteer Social Worker System in Japan: Survey-data Analysis and Feedback to the Community”	ISTR(International society for third sector research) 11th International Conference	ミュンスター大学(ドイツ)	2014 年 7 月
253	Shinji TANI, Kotomi KITAMURA, Tomoko OKAMOTO, & Hiroaki OKAMOTO	Psychological Flexibility and mental health issues of parents of children having disabilities.	The 12th World Annual Conference of the Association for Contextual Behavioral Science	Minneapolis, (USA)	2014 年 6 月
254	Oya, A., Muto, T., & <u>Nakashika, N</u>	Does avoidance from non-contingent negative reinforce influence on behavioral variability?	Association for contextual behavioral science, Annual world conference 12	Minneapolis(USA)	2014 年 6 月
255	大屋藍子・武藤崇・中鹿直樹	反応非依存的な回避事態における心理的非柔軟性を持つ大学生の行動傾向	日本行動分析学会第 32 回年次大会	弘前大学(青森県)	2014 年 6 月
256	TANI Shinji	The developing mental-health support program for the parents of children having disabilities.	4th International Conference on Sociology and Social Work	USC(USA)	2014 年 5 月
257	小澤 亘	外国にルーツをもつ子どもとデジタル教科書のあり方を考える「問題提起」	外国にルーツをもつ子どもとデジタル教科書のあり方を考える—ICT を活用した教育保障	京都キャンパスプラザ(京都府)	2014 年 5 月
258	藤戸麻美・春日彩花・松本梨沙・安田祥子・古田絵理・富井奈菜美・荒木美知子・ <u>竹内謙彰</u> ・荒木穂積	自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発(4)—幼児期～小学校中学年期	日本発達心理学会第 25 回大会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
259	荒木久理子・河邊光・山口真名美・重富紗希・中川万幾子・藤原	自閉症スペクトラム児の集団活動を援助する療育プログラム開発(5)—小学校高学年期:	日本発達心理学会第 25 回大会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

	さつき・野村朋・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積・松島明日香	集団を意識した「なりきる遊び」			
260	鏡原崇史・山路美波・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰	自閉症スペクトラム障害児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発(6)ー中学・高校生期:集団を意識したルール作り	日本発達心理学会第 25 回大会	京都大学(京都府)	2014 年 3 月
261	中鹿直樹	Visual Basic を用いた時間制御のプログラミング	実験的行動分析京都セミナー第4回「変動性を実現する:強化スケジュール研究におけるタイマーとカウンター」	立命館大学(京都府)	2014 年 3 月
262	中鹿直樹・尾西洋平・小島遼・林炫廷・望月昭	プロファイリングからポートフォリオへ:学生ジョブコーチの実践から支援をつないでいくための「情報」について考える	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
263	望月昭・上田征樹・中鹿直樹・土田菜穂・朝野浩	継続的キャリア支援としての情動的連携:「情報バンク」「シミュレーションショップ」の構造とその対人援助学的機能	対人援助学会第 5 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 11 月
264	小澤亘	“Action Research to build a Transnational Volunteer Support Network for Foreign Students’ Education: Possibility of Digital Book System as a Tool for Volunteer Linkage”	ISTR (International society for third sector research) The 8th Asia-Pacific Regional Conference	Seoul(韓国)	2013 年 10 月
265	谷 晋二	子どもへの認知行動療法の適用の可能性	日本行動療法学会 第 39 回大会 シンポジウム	帝京平成大学(東京)	2013 年 8 月
266	小澤亘	高齢者の見守りと民生委員の活動研究会編『民生児童委員調査報告書—2012 年京都市・宇治市・八幡市悉皆調査』	高齢者の見守りと民生委員の活動研究会		2013 年 8 月
267	TANI Shinji	The ACT practice for the mother of a child having Asperger syndrome disordered (ASD): Focusing on relationship with spouse	The 11th World Annual Conference of the Association for Contextual Behavioral Science	UNSW,Sydney, Australia)	2013 年 7 月
268	中鹿直樹・尾西洋平・小島遼・土田菜穂・望月昭	知的障がいのある高等部生徒の就労実習における職業行動への自発的関与を促進する条件	日本行動分析学会第 31 回年次大会	岐阜大学(岐阜県)	2013 年 7 月
269	山本耕平	中高年のひきこもりと精神保健福祉	NPO 法人 なでしこの会 定期総会講演会	名古屋港湾会館(愛知県)	2013 年 5 月

【テーマ④ 修復的支援チーム】

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
270	奥亘平・篠田博之・瀬谷安弘	透過型ディスプレイの視認性評価	日本色彩学会関西支部大会	大阪市立大学(大阪府)	2016 年 3 月
271	篠田博之	質感と色の見え	第4回次世代光学素子研究会	大阪科学技術センター(大阪府)	2016 年 3 月
272	野田正人	児童虐待とネットワークの役割	長浜市要保護児童対策地域協議会代表者会議	滋賀県	2016 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

273	野田正人	児童虐待防止と関係機関連携	鳥取県児童虐待防止関係機関連絡会	島根県	2016 年 2 月
274	野田正人	要保護児童対策地域協議会の効果的運営について	三重県伊賀市要保護児童並びに DV 対策地域協議会	三重県	2016 年 2 月
275	野田正人	子ども理解を深めるアセスメントと生徒指導	大阪府生徒指導推進協議会	大阪府	2016 年 2 月
276	野田正人	学校の現状と SSW の今後を考える	高槻市スクールソーシャルワーカー連絡協議会	大阪府	2016 年 2 月
277	野田正人	学校教育導入後の課題と展望	近畿圏児童自立支援施設協議会研修会		2016 年 2 月
278	野田正人	子どもの貧困と学校の関わり	京都市教育委員会人権研修	京都府	2016 年 2 月
279	野田正人	スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー連携術	総合教育技術 2016 年 3 月号 22-27 頁		2016 年 2 月
280	野田正人	要保護児童対策地域協議会の活用について	湖南省要保護児童対策地域協議会	滋賀県	2016 年 2 月
281	篠田博之	視覚研究とその応用	立命館大学認知科学研究センター第2回研究会	立命館大学(大阪府)	2016 年 1 月
282	野田正人	保護者によりそう保育園であるために	福知山市保育協議会人権研修会	京都府	2016 年 1 月
283	野田正人	要保護児童の家庭支援及び保護者対応について	大津市園長・代表保育士研修会	滋賀県	2016 年 1 月
284	松本克美	児童期の性的虐待被害と時の壁	日本ジェンダー法学会第 13 回学術大会	日本大学法学部(東京都)	2015 年 12 月
285	松本克美	民法改正案における時効法改革	地籍問題研究会第 14 回定例研究会	日司連ホール(東京都)	2015 年 11 月
286	村本邦子・磯井知子・岩澤由真・川福理沙・地下昌里・前阪千賀子・清武愛流・森希理恵・奥野景子・団士郎・中村正	困難を乗り越える力～「未来のための思い出:ココロ重なるプロジェクト」で集まった声の分析から	対人援助学会第7回年次大会	立命館大学(京都府)	2015 年 11 月
287	村本邦子・団士郎	家族漫画展を使ったコミュニティ支援の試み ～「東日本・家族応援プロジェクト」の 5 年から	第七回アジア災害後心理援助国際会議		2015 年 11 月
288	村本邦子・松本直美	福島:被爆地に暮らす、被爆地を出て暮らす	第七回アジア災害後心理援助国際会議		2015 年 11 月
289	野田正人・山崎康一郎	性暴力加害行為のある知的障がい者へのアプローチについて	滋賀 ASB サポートネット 研修会	滋賀県	2015 年 11 月
290	野田正人	児童虐待の現状と家庭・学校の役割	平成 27 年度京都府相楽地方 PTA 研究大会	京都府	2015 年 11 月
291	野田正人	地域に貢献する保育園づくり	全国保育園理事長・所長研修会		2015 年 11 月
292	松本克美	児童期の性的被害とその回復をめぐる法心理 2	法と心理学会第 16 回大会	獨協大学(埼玉県)	2015 年 10 月
293	松本克美・金成恩・安田裕子	児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理 2—ドイツ・韓国調査の報告	法と心理学会第 16 回大会	獨協大学(埼玉県)	2015 年 10 月
294	松本克美	PTSD and Negative Prescription:damages for sexual abuse in childhood	The 9th East Asian Law and Psychology Conference	立命館大学(大阪府)	2015 年 10 月
295	栗田直樹・篠田博之・瀬谷安弘	照明光への色順応を考慮したディスプレイカラーマネジメント	Optics & Photonics Japan 2015	筑波大学東京キャンパス(東京都)	2015 年 10 月
296	山口慧・瀬谷安弘・篠田博之	ベクションにおける色彩と奥行き手がかりの影響	Optics & Photonics Japan 2015	筑波大学東京キャンパス(東京都)	2015 年 10 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

297	藤本悠介・篠田博之・瀬谷安弘	外光によるディスプレイの見えるの映り込み評価	Optics & Photonics Japan 2015	筑波大学東京キャンパス(東京都)	2015 年 10 月
298	山地亮・瀬谷安弘・篠田博之	ベクションと重心動揺の関係	Optics & Photonics Japan 2015	筑波大学東京キャンパス(東京都)	2015 年 10 月
299	山田翔吾・篠田博之・瀬谷安弘	風景窓から入射する屋光に影響される空間の明るさ感評価	Optics & Photonics Japan 2015	筑波大学東京キャンパス(東京都)	2015 年 10 月
300	村本邦子・齋藤清二・清武愛流・前阪千賀子	「団士郎家族漫画展」が見る人の心に喚起するもの～「未来のための思い出:ココロかさなるプロジェクト」で集まった声の分析を通して	日本質的心理学会第 12 回大会	宮城教育大学(宮城県)	2015 年 10 月
301	Kyoko Okumoto, Kuniko Muramoto, Masae Yuasa, and Aya Kasai	Weaving the Tapestry of Peace and Nonviolence: Peacebuilding and Efforts for Reconciliation on Northeast Asia and Beyond	The 11th International Expressive Arts Therapy Association Conference	香港	2015 年 10 月
302	野田正人	社会的養護の課題と方向性 青少年の現状と自立へ向けた支援の在り方を問う	全国自立援助ホーム協議会第 22 回滋賀大会基調講演	ホテル ポストンプラザ(滋賀県)	2015 年 10 月
303	西岡潔子・菅野道英・星俊彦・野田正人	関係専門機関との有効な連携について	全国自立援助ホーム協議会第 22 回滋賀大会	ホテル ポストンプラザ(滋賀県)	2015 年 10 月
304	松本克美	高齢者の消費者被害 ― なぜ起こる、どう防ぐ	京都高齢者大学	京都高齢者大学(京都府)	2015 年 9 月
305	松本克美	特定個人の人格権保護を理由とした「図書館の自由」の制約原理と判断基準	立命館大学図書館サービス課研修	立命館大学(京都府)	2015 年 9 月
306	斎藤真緒	Male carers in Japan: Difficulties and the need for gender sensitive support programs	6th International Carers Conference	スウェーデン	2015 年 9 月
307	小澤 亘	「日本語」というバリア:ニューカマーの子どもたちと学習権の保障	東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター活動報告(2015 年第 3 号)pp.113-125		2015 年 8 月
308	Ryo Yamaji, Yasuhiro Seya and Hiroyuki Shinoda	Relationship between vection and body sway	ECVP2015 (UK)	University of Liverpool. (イギリス)	2015 年 8 月
309	篠田博之	色彩の生理・心理学(1)	色彩講座基礎編 2015	立命館大学(京都府)	2015 年 8 月
310	野田正人	今日の学校課題と児童自立支援施設	児童自立支援施設に併設された学校教育研究会 2015		2015 年 8 月
311	野田正人	子どもの貧困対策と学校に於ける取り組み	京都府八幡市校長会	京都府	2015 年 8 月
312	野田正人	いじめを生まない学校・学級をつくるために	福知山市生徒指導研究大会	京都府	2015 年 8 月
313	野田正人	子どもの自尊感情を育むために	東近江市立五箇荘中学校校区教育研究会講演	滋賀県	2015 年 8 月
314	野田正人	保護者の低所得と子どもへの影響	伊根町学力育成会 小中学校教育実践力向上充実研修会	伊根中学校(京都府)	2015 年 8 月
315	野田正人	子どもの虐待 思春期への影響	第 34 回日本思春期学会総会・学術集会 シンポジウムⅢ	ピアザ淡海(滋賀県)	2015 年 8 月
316	Yusuke Fujimoto, Hiroyuki Shinoda and Yasuhiro Seya	Degradation of display image due to glare of ambient light evaluated by using a visibility matching technique and analysis of their spatial frequency characteristics	APCV2015	Nanyan Technological University (Singapore)	2015 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

317	Shogo Yamada, Yasuhiro Seya and Hiroyuki Shinoda	Scenic views through a window affect the perception of space brightness of a room	APCV2015	Nanyan Technological Univercity (Singapore)	2015 年 7 月
318	Kohei Oku, <u>Hiroyuki Shinoda</u> and Yasuhiro Seya	Images on a transparent display with a uniform gray background evaluated by visibility matching and degradation category rating	APCV2015	Nanyan Technological Univercity (Singapore)	2015 年 7 月
319	Yasuhiro Seya and <u>Hiroyuki Shinoda</u>	Relationships between scene perception and visual search performance	APCV2015	Nanyan Technological Univercity (Singapore)	2015 年 7 月
320	Ryo Yamaji, Yasuhiro Seya and <u>Hiroyuki Shinoda</u>	Relationship between vection and visually evoked postural responses	APCV2015	Nanyan Technological Univercity (Singapore)	2015 年 7 月
321	松本克美	民法改正における時効法改 革は何を変えるのか ― そ の光と影	民主主義科学者協会関西支 部研究会		2015 年 7 月
322	野田正人	児童福祉法の現状・施策の 動向について	京都府市町村児童福祉専門 職員育成研修	京都府	2015 年 7 月
323	野田正人	虐待と思春期	社会的不利におかれた子ども・ 若者支援に関する研修会	滋賀医科大学(滋賀県)	2015 年 7 月
324	野田正人	子ども虐待への対応	児童虐待相談等関係職員研 修	滋賀県	2015 年 7 月
325	野田正人	虐待を受けた子ども達への 支援の在り方	平成26年度地域支援センター やわた第一回スキルアップ研 修	京都府八幡支援学校 (京都府)	2015 年 7 月
326	野田正人	ソーシャルワークの視点をも った生徒指導について	東大阪市教職員研修会	東大阪市	2015 年 7 月
327	野田正人	スクールソーシャルワークの 活動について	京都市立金閣小学校夏期研 修会	金閣小学校(京都府)	2015 年 7 月
328	野田正人	児童生徒のいじめや校内暴 力への対応を考える	日本学校ソーシャルワーク学 会第 10 回福岡大会 課題分科 会	福岡国際会議場(福岡 市)	2015 年 7 月
329	松本克美	児童期の性的虐待被害と(時 の壁)ドイツにおける相次ぐ 法改正と日本への示唆	日本ドイツ学会第 31 回大会	東京大学(東京都)	2015 年 6 月
330	村本邦子	東日本大震災後の現地支援 機関との協働関係構築プロ セス ～「東日本・家族応援プ ロジェクト」の 4 年を振り返っ て～	日本コミュニティ心理学会第 18 回大会、	法政大学(東京都)	2015 年 6 月
331	Shogo Yamada, Ryousuke Tanaka, <u>Hiroyuki Shinoda</u> and Yasuhiro Seya	Space Brightness Affected by a Scenic View through a Window	AIC2015 Mid-term Meeting	Ochanomizu sola city Conference Center (Tokyo)	2015 年 5 月
332	篠田博之	人の視覚特性と光・色彩工学 への応用	電気設備学会 関西支部総会 記念講演	中央電気倶楽部(大阪 府)	2015 年 5 月
333	松本克美	PTSD と損害賠償・時効問題	圓光大学法学専門大学院シン ポジウム		2015 年 5 月
334	松本克美	欠陥住宅の民事責任と期間 制限 ― 民法改正案もふま えて	欠陥住宅京都ネット第 18 回大 会	京都府	2015 年 4 月
335	廣井亮一	虐待・非行問題への家族支 援	日本家族研究・家族療法学会 地域ワークショップ	龍谷大学(京都市)	2015 年 3 月
336	村本邦子	親密な関係における対人暴 力の現状～被害者支援の視 点から	「親密な関係における対人暴 力の現状～日本とニューヨーク の現状」JAMSNET、Japanese Community of Creative Arts	NY 日本領事館(米国)	2015 年 3 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

			Therapists (CJCAT)共催、日本国領事館後援、		
337	松本克美	児童期の性的虐待被害からの回復とく時の壁> — 釧路 PTSD 等訴訟を契機とした法解釈論・立法論の課題	札幌法と心理研究会	北海道大学(北海道)	2015 年 1 月
338	村本邦子・中村正	「東日本・家族応援プロジェクト」の成果と課題	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
339	村本邦子	大学院における「東日本・家族応援プロジェクト」におけるレジリエンスと「物語る力」	対人援助学会第 6 回年次大会	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
340	篠田博之	視覚と光	H26 年度電気関係学会関西連合大会	奈良先端科学技術大学院大学(奈良県)	2014 年 11 月
341	松本克美	宅地被害の法的責任 — 自然力競合事案における不法行為責任 —	欠陥住宅被害者全国連絡協議会第 37 回大会	海峡メッセ国際会議場(山口県)	2014 年 11 月
342	立岩真也	病・障害の諸相、そしてなおすこと・補うこと・委ねること(*12)	障害学国際セミナー 2014	イルムセンター(韓国)	2014 年 11 月
343	廣井亮一・岡本潤子・矢代龍雄・坂野剛崇・中川利彦	「司法臨床の展開(第4報) — 家庭裁判所再考/家裁調査官の活動をめぐって」	第 15 回法と心理学会	関西学院大学(兵庫県)	2014 年 10 月
344	廣井亮一	「ストーカー加害者への司法臨床 — 逗子ストーカー事件の被害者ご遺族の報告をもとに」	第 14 回法と精神・心理研究会	大分県	2014 年 10 月
345	Yamaguchi, M., Seya, Y., & Shinoda, H.	The effect of color and velocity on vection	ACA2014	Chinese Culture University (Taiwan)	2014 年 9 月
346	Tsukamoto, T., Shinoda, H., & Seya, Y.	Comparison of color discrimination on a display measured under different illumination conditions	ACA2014	Chinese Culture University (Taiwan)	2014 年 9 月
347	Kurita, N., Shinoda, H., & Seya, Y.	Color management of display for the exact same color appearance under different illuminations	ACA2014	Chinese Culture University (Taiwan)	2014 年 9 月
348	Seya, Y., & Shinoda, H.	Effects of depth cues on vection	ECVP2014, Perception, 43-suppl. 42	Belgrade (Serbia)	2014 年 8 月
349	Tanaka, R., Shinoda, H. and Seya, Y.	Brightness perception in daylight office with scene	ECVP2014, Perception, 43-suppl., 163	Belgrade (Serbia)	2014 年 8 月
350	廣井亮一・町田隆司	家族の過去、現在、未来	日本心理臨床学会	パシフィコ横浜(神奈川県)	2014 年 8 月
351	廣井亮一	いじめ問題に対する法と臨床の協働	平成26年度香川県小・中学校生徒指導担当教員連絡協議会	あなぶき(香川県)	2014 年 8 月
352	野田正人	若者の仕事を巡る現実と生き方	ユースワーカー養成公開研究会パネルフォーラム 立命館大学人間研、(公財)京都ユースサービス協会共催	京都市中京青少年活動センター(京都府)	2014 年 8 月
353	Kurita, N., Shinoda, H. & Seya, Y.	Colorimetry-free color management system for displays	APCV2014, i-Perception, 5-4, 317	Kagawa International Convention Hall, (Japan)	2014 年 7 月
354	Yamaguchi, Y., Seya, Y., & Shinoda, H.	The effect of color on vection	APCV2014, i-Perception, 5-4, 331	Kagawa International Convention Hall, (Japan)	2014 年 7 月
355	Seya, Y., & Shinoda, H.	The effects of a first person shooter game on cognitive task performance	APCV2014, i-Perception, 5-4, 301	Kagawa International Convention Hall, (Japan)	2014 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

356	松本克美	児童期の性的虐待被害をめぐる損害賠償請求訴訟と時の壁	日本法社会学会 2014 年度学術大会	大阪大学(大阪府)	2014 年 5 月
357	松本克美	建築瑕疵訴訟の到達点と課題—住宅の安全確保と被害回復の観点から—	欠陥住宅被害全国連絡協議会第 36 回大会	じばさん三重ホール(三重県)	2014 年 5 月
358	篠田博之	光と視覚 —色を正しく効果的に見せる技術と 6W2H—	第 16 回カラーコーディネーターシンポジウム	大阪府	2014 年 3 月
359	野田正人	発達障害だと思っただけ—包括的アセスメントによる子ども理解—	故郷復興を目指す先生を元気にする集い in 仙台	仙台市教育センター(宮城県)	2014 年 2 月
360	HiroYuki Shinoda	Vision, Light, and Color—mechanism of seeing and techniques for displaying—	The 1st Asia Color Association Conference	ラジャマンガラ工科大学(Thailand)	2013 年 12 月
361	松本克美	企画趣旨説明・ジェンダーと平和	ジェンダー法学会第 11 回学術大会	宮崎公立大学(宮崎市)	2013 年 12 月
362	荒川 溪・篠田 博之・瀬谷 安弘	色モード境界輝度測定法を用いた有彩家具による空間の明るさ感への影響の測定	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
363	中川 亮・篠田 博之・瀬谷 安弘	カラーネミング法による異なる照明環境での色恒常性成立度合測定	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
364	鮎川 翔一・篠田 博之・瀬谷 安弘	擬似白内障における散乱光の空間分解能への影響	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
365	田中 亮介・篠田 博之・瀬谷 安弘	昼光が入射する空間での明るさ感評価	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
366	西田 卓真・瀬谷 安弘・篠田 博之	三次元位置情報を付加した輝度・色彩分布計測	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
367	辻 貴之・瀬谷 安弘・篠田 博之	生態学的妥当なオプティカルフロー刺激を用いたベクションの検討	Optics & Photonics Japan 2013	奈良県新公会堂(奈良県)	2013 年 11 月
368	荒川 溪・篠田 博之・瀬谷 安弘	色モード境界輝度測定法を用いた色彩による空間の明るさ向上効果の測定	日本色彩学会第 1 回秋の大会 '13	倉敷公民館(岡山県)	2013 年 11 月
369	中川 亮・篠田 博之・瀬谷 安弘	異なる照明環境間でのカラーネミングによる色恒常性成立度合の測定	日本色彩学会第 1 回秋の大会 '13	倉敷公民館(岡山県)	2013 年 11 月
370	鮎川 翔一・篠田 博之・瀬谷 安弘	擬似白内障被験者における散乱光の空間解像力への影響	日本色彩学会第 1 回秋の大会 '13	倉敷公民館(岡山県)	2013 年 11 月
371	田中 亮介・篠田 博之・瀬谷 安弘	参照マッチング法を用いた昼光が入射する空間での明るさ感評価	日本色彩学会第 1 回秋の大会 '13	倉敷公民館(岡山県)	2013 年 11 月
372	西田 卓真・瀬谷 安弘・篠田 博之	3 次元での輝度・色度計測のための 2 画像間の画像合わせ手法	日本色彩学会第 1 回秋の大会 '13	倉敷公民館(岡山県)	2013 年 11 月
373	村本邦子・村川治彦・小田博志	暴力の世代間連鎖を断ち切る——日本・中国の戦後世代による「和解」ワークショップの試みから	日本平和学会 2013 年度秋季大会	沖縄大学(沖縄県)	2013 年 11 月
374	松本克美	住宅の安全と法—企画趣旨・私法の観点から—	日本土地法学会 2013 年大会	立命館大学(京都府)	2013 年 10 月
375	松本克美	企画趣旨 — ワークショップ・損害賠償請求権と時効・除斥期間問題への法と心理からのアプローチ— 訴訟継続中のカネミ油症新認定訴訟を中心に—	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

376	廣井亮一・サトウタツヤ・葛野弘・濱田ありさ	司法臨床の展開(第3報)－法心理・司法臨床家の養成をめぐる	第 14 回法と心理学会	九州大学(福岡県)	2013 年 10 月
377	村本邦子	表現療法を用いた歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み ～「南京を思い起こす」5 年間の試みから	国際表現性心理療法シンポジウム、	蘇州大学(中国蘇州市)	2013 年 10 月
378	野田正人	児童自立支援施設の今日的課題－社会的養護の担い手として－	日本児童青年精神医学会総会	札幌コンベンションセンター(北海道)	2013 年 10 月
379	野田正人	いじめ防止対策推進法について	大阪府教育委員会スクールソーシャルワーカー連絡会 大阪府教育委員会	大阪府	2013 年 10 月
380	野田正人	青少年非行の現状と、その背景の理解、立ち直り支援	第 43 回近畿地区青少年補導センター連絡協議会研修大会	ピアザ淡海(滋賀県)	2013 年 10 月
381	瀬谷安弘・篠田博之	3 次元空間における注意の分布	日本心理学会第 77 回大会	札幌コンベンションセンター(北海道)	2013 年 9 月
382	荒川 溪・篠田 博之・瀬谷 安弘	色モード境界輝度測定法を用いた有彩家具による空間の明るさ感への影響の測定	第 15 回日本感性工学会大会	東京女子大学(東京都)	2013 年 9 月
383	中川 亮・篠田 博之・瀬谷 安弘	カラーネーミング法を用いた異なる照明環境間での色恒常性の定量化	第 15 回日本感性工学会大会	東京女子大学(東京都)	2013 年 9 月
384	鮎川 翔一・篠田 博之・瀬谷 安弘	散乱光強度と空間解像度による水晶体の Haze 値推定法	第 15 回日本感性工学会大会	東京女子大学(東京都)	2013 年 9 月
385	田中 亮介・篠田 博之・瀬谷 安弘	参照マッチング法を用いた窓面採光時の照明空間の明るさ感評価	第 15 回日本感性工学会大会	東京女子大学(東京都)	2013 年 9 月
386	西田 卓真・瀬谷 安弘・篠田 博之	デジタルカメラと Kinect を用いた三次元での色彩分布計測法の開発	第 15 回日本感性工学会大会	東京女子大学(東京都)	2013 年 9 月
387	安田裕子・貝原己代子・村本邦子・吉田容子・吉浜美恵子	DV 被害者への支援における協働と連携	日本質的心理学会第 10 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 9 月
388	村本邦子	”Healing Wound of History” 5 年の試みを振り返って	国際シンポジウム『アジアの戦後世代の歴史平和教育をつくる』、	南京師範大学(中国南京市)	2013 年 9 月
389	野田正人	いじめ問題と生徒指導上の実践的課題	日本生活指導学会第 31 回研究大会	和歌山大学(和歌山県)	2013 年 9 月
390	Seya, Y., Yamaguchi, M., & Shinoda, H.	Spatial distribution of attention in three dimensional space	European Conference on Visual Perception 2013, ECVP2013	Bremen,(Germany)	2013 年 8 月
391	廣井亮一	「司法臨床としての情状心理鑑定－犯罪動機の解明・更生の方法等情状弁護の深化に向けて」	日本弁護士連合会 近畿地区弁護士夏期研修	大阪府	2013 年 8 月
392	野田正人	「障がい者審査会」滋賀県からの報告	日本司法福祉学会第 14 回全国大会シンポジウム	日本福祉大学(愛知県)	2013 年 8 月
393	篠田博之	人の視覚特性にもとづく光応用技術	フォトンクス技術フォーラム H25 年度第 1 回光情報技術研究会	大阪科学技術センター(大阪府)	2013 年 7 月
394	村本 邦子・林 久美子・渡邊 佳代・田丸加奈恵・鷲岡 ゆき・引地 綾・佐野 泉・根本 保子・高畠克子	DV シェルターと NPO の協働から、組織・チームづくりを目指して 一派遣プログラムの実施・継続を通して	日本コミュニティ心理学会 第 16 回研究大会	慶応義塾大学(東京都)	2013 年 7 月
395	篠田博之	人間視覚系の機能と特徴に基づいた照明応用技術	照明技術講演会	大学コンソーシアム大阪(大阪府)	2013 年 6 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

396	松本克美	法制審議会民法(債権関係)部会『中間試案』の時効法改革案へのコメント	立命館大学・民事法研究会	立命館大学(京都府)	2013 年 6 月
397	廣井亮一・河野聡・大田原俊輔・河野聖子	「いじめ・体罰問題への法と家族療法によるアプローチ」	日本家族研究・家族療法学会, 第30回東京大会,	タワーホール船堀(東京都)	2013 年 6 月
398	廣井亮一	「加害者家族へのアプローチ」	家族相談士第28回研修会	大阪府	2013 年 6 月
399	松本克美	建築瑕疵の不法行為責任と除斥期間	欠陥住宅全国ネット第 34 回大会	天神ビル(福岡県)	2013 年 5 月
400	松本克美	法曹養成教育における法と心理学の連携 ― 臨床心理の成果の導入の試み ―	臨床法学教育学会第 6 回大会	立命館大学(京都府)	2013 年 4 月
401	野田正人	これからの少年センターのあり方	大津少年センター50 周年記念講演 同センター機関誌『補導一みちるべ』40~45 頁に要旨掲載	ピアザ淡海(滋賀県)	2013 年 4 月

【テーマ⑤ 基礎研究チーム】

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
402	渡辺克典	障害者ノマイノリティの差別現象への法的介入をめぐる基礎研究	人間科学研究所年次総会(「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」プロジェクト公開研究会)	立命館大学(京都府)	2015 年 11 月
403	松原洋子・植村要	図書資料のテキストデータ提供の課題——立命館大学図書館の実践から	全国高等教育障害学生支援協議会第 1 回大会、東京大学先端科学技術研究センター(東京)	東京大学(東京都)	2015 年 6 月
404	渡辺克典	矢吹文敏著『ねじれた輪ゴム』を読む——山形から京都へ、自立生活運動の軌跡を考える	関西社会学会若手企画部会第 5 回事前研究会	京都テルサ(京都府)	2015 年 3 月
405	渡辺克典・堀田義太郎・安部彰	ヘイト・スピーチにおける包摂／排除の基礎理論研究	人間科学研究所年次総会(「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」プロジェクト公開研究会)	立命館大学(京都府)	2015 年 1 月
406	天田城介	「男がケアするということ——社会関係のメンテナンスコストのジェンダー非対称性をめぐって」	日本女子大学現代女性キャリア研究所シンポジウム「男性がケアを抱えるとき」	日本女子大学(東京都)	2014 年 12 月
407	立岩真也	病・障害の諸相、そしてなおすこと・補うこと・委ねること	障害学国際セミナー 2014	イルムセンター(韓国)	2014 年 11 月
408	天田城介	講演「大学教員市場を踏まえてなすべきことをなす」	立命館大学若手研究者キャリアパス支援プログラムセミナー	立命館大学(京都府)	2014 年 11 月
409	中倉智徳	「浸透しあう内部としての社会——ガブリエル・タルドにおけるネオ・モナドロジーへの行程」	日仏哲学会 2014 秋季大会シンポジウム「モナドロジーの哲学」	東京大学(東京都)	2014 年 9 月
410	中倉智徳	「イノベーションと社会学——戦間期アメリカにおける発明の社会学を中心に」	科学社会学会第三回大会 中山茂メモリアル・セッション 革新・批判・風評	東京大学(東京都)	2014 年 9 月
402	天田城介	「当事者主義をめぐる社会学——その社会を診断する」	第 66 回早稲田社会学会大会シンポジウム「当事者主義の現在——ネオリベリズムに直	早稲田大学(東京)	2014 年 7 月

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

			面する当事者と支援者		
403	松原洋子	生命倫理学と科学史—日本優生学史の自律性と批判性をめぐって	ワークショップ「生命倫理学の歴史を語ること、その陥穽」、	立命館大学(京都府)	2014 年 6 月
404	松原洋子	日本における出生前スクリーニング検査ガバナンスの課題	日本科学史学会第 61 回年会	酪農学園大学(北海道)	2014 年 5 月
405	中倉智徳	Revue du M.A.U.S.S.における「贈与論」受容の傾向	第 28 回デュルケーム／デュルケーム学派研究会	大阪府	2014 年 4 月
406	大谷いづみ	問いとともに障害を生きる—QOL 概念の二重性	第 22 回高度先進リハビリテーション医学研究会	慶応大学(東京都)	2014 年 2 月
407	中倉智徳	「国際社会学協会(IIS)における社会連帯主義をめぐると論の検討」	日本社会学史学会第 53 回大会	佛教大学(京都府)	2013 年 6 月
408	中倉智徳	「ガブリエル・タルドにおける二つの資本概念——発明資本と貨幣資本」	経済学史学会第 77 回大会	関西大学(大阪府)	2013 年 5 月
409	中倉智徳	「ラトゥールとタルド——人類学の「静かな革命」とモノダ論」	第 26 回デュルケーム／デュルケーム学派研究会	熊本県	2013 年 4 月

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況, インターネットでの公開状況等

公開の研究会は、規模にかかわらず HP 上で告知することを原則としており、必要に応じ開催報告も行っている。学外の研究者・実務家・学生・一般市民などが自由に参加できる環境を整えて行った研究会・シンポジウム等は、プロジェクト期間の 3 年間で、合わせて 424 件に上る。人間科学研究所年次総会を兼ねた本プロジェクト全体の公開研究会も毎年度開催し、その記録は、文字起しを基にして小冊子『インクルーシブ社会研究』(*17)として刊行した。本小冊子は、その他の研究会記録も含め通巻 15 号までに及び、Web 上でオープンアクセスに置いている。

<既に実施しているもの>

【プロジェクト全体】

- ・シンポジウム「えん罪救済の新たな幕開け」、立命館大学(大阪府)、2016 年 3 月 20 日
<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/163>
- ・シンポジウム企画「死刑えん罪と DNA 鑑定」、TKC 東京本社(東京都)、2016 年 3 月 18 日
<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/162>
- ・公開研究会「対人支援における大学と社会実践の連携 —これまでとこれから—」(兼 2015 年度人間科学研究所年次総会)(*18)、立命館大学(京都市)、2015 年 11 月 21 日
<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/147>
- ・映画上映会/公開対談企画「周防正行監督とみる、映画「それでもボクはやってない」」、立命館大学(大阪府)、2015 年 10 月 18 日
<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/148>
- ・国際混合研究法学会アジア地域会議(第 1 回日本混合研究法学会)、立命館大学(大阪府)、2015 年 9 月 19-20 日

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/137>

- ・公開研究会「対人支援における大学と社会実践の連携を展望する」(兼 2014 年度人間科学研究年次総会)^(※18)、立命館大学(京都市)、2015 年 1 月 17 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/120>

- ・国際会議”Health Policy and Politics in Diversifying Societies: Asian and Global Issues”^(※1)
(「多様化する社会における健康・医療の政策・政治: アジアとグローバルな課題」)、立命館大学(京都市)、2014 年 11 月 28-29 日

<http://www.ritsumeihuman.com/en/news/read/id/47>

- ・公開研究会「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」キックオフミーティング(兼 2013 年度人間科学研究年次総会)^(※18)、立命館大学(京都市)、2014 年 1 月 25 日 <http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/61>

【方法論チーム】

- ・インクルーシブ医療総括研究会「インクルーシブな医療に向けて ―実践・研究の課題を考える―」、立命館大学(京都市)、2016 年 3 月 10 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/167>

- ・第 4 回健康と医療の人文社会科学研究会、立命館大学(京都市)、2015 年 1 月 31 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/116>

- ・研究ワークショップ「健康と平等の規範理論」、立命館大学(京都市)、2014 年 12 月 26 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/608>

- ・人間科学研究所アドバンスト研究セミナーVol.8「新たな支援の類型を求めて ―伴走型支援をめぐって―」、立命館大学(京都市)、2014 年 10 月 21 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/99>

- ・研究セミナー”Evidence Dissemination by Clearinghouses”(「クリアリング・ハウスを用いたエビデンスの普及」)、立命館大学(京都市)、2014 年 1 月 27 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/56>

- ・第 1 回日英公衆衛生機構比較研究会議、立命館大学(京都市)、2013 年 10 月 5 日

【予見的支援チーム】

- ・音読・計算活動(地域高齢者を対象とした認知リハビリテーションの実践活動兼データ収集)^(※2)、立命館大学(京都市)、2013 年 4 月 20 日～2016 年 2 月 13 日まで計 358 回

- ・立命館土曜講座「双方向の高齢者支援―脳を鍛える「音読・計算活動」からみえてきたもの―」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 21 日

<http://www.ritsumeihuman.com/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150321.html>

- ・立命館土曜講座「高齢者支援の中で考える―支援する側・される側の変化―」、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 15 日

<http://www.ritsumeihuman.com/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20140315.html>

【伴走的支援チーム】

- ・シンポジウム「介護者運動が社会を変える! -「介護離職ゼロ」を問う-」^(※9)、京都タワーホテル/立命館大学(京都市)、2016 年 3 月 12-13 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/165>

- ・研究会「読み書きが苦手な子どもに向けた新たなサポート方法の報告会～PowerPoint でできるテストの音声化～」^(※9)、立命館大学(京都市)、2015 年 12 月 24 日

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/154>

- ・研究会「自閉症スペクトラム児をもつ母親のストレス日米比較研究 -概要と中間報告-」(*9)、立命館大学(京都市)、2015 年 10 月 8 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/151>

- ・アドバンスト研究セミナーVol9「青年期発達障害者の発達支援—見晴台学園大学の取り組みから—」(*9)、立命館大学(京都市)、2015 年 7 月 4 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/140>

- ・立命館土曜講座「教えることと学ぶこと—障がいのある生徒への就労支援の実践から」(*9)、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 30 日

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2015/20150530.html>

- ・障がいのある子どもとその家族と支援者のための国際交流会(*9)、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 17 日 <http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/131>

- ・障がいのある子どもとその家族の支援、地域、社会の連携を考える研究会(*9)、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 16 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/131>

- ・男性介護ネット 6 周年記念式典協賛企画「ケアメン・コミュニティのマネジメント」(*9)、京都タワーホテル(京都市)、2015 年 3 月 7 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/119>

- ・研究会「自閉症スペクトラムのアセスメントをめぐって」、立命館大学(京都市)、2015 年 2 月 22 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/121>

- ・人間科学研究所アドバンスト研究セミナーVol.8「新たな支援の類型を求めて -伴走型支援をめぐって-」(*9)、立命館大学(京都市)、2014 年 10 月 21 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/99>

- ・シンポジウム「外国にルーツをもつ子どもとデジタル教科書のあり方を考える～ICTを活用した学習支援と教育保障～」(*9)、キャンパスプラザ京都(京都市)、2014 年 5 月 10 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/72>

- ・立命館土曜講座「障害のある子供を持つ家族へのメンタルヘルス支援」(*9)、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 22 日

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20140322.html>

【修復的支援チーム】

- ・オックスフォード大学リーズセンター連携 研究会「社会的養護の質についての公開研究会」、立命館大学(大阪市)、2015 年 9 月 6 日

- ・立命館土曜講座「不登校問題の解決とは何か—修復的支援と社会的包摂—」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 14 日

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150314.html>

- ・シンポジウム「家族のかたちシンポジウム—里親制度・生殖医療／多様な家族を形成するための関係機関との連携と協働に向けて」(*11)、島根県職員会館多目的ホール(松江市)、2014 年 11 月 22 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/105>

- ・第 27 回法心理・司法臨床セミナー講演「性犯罪捜査・公判の現状と課題—被害者の心理にどう向き合い、どう伝えるか」、立命館大学(京都市)、2014 年 9 月 24 日

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/92>

- ・ユースワーカー養成公開研究会「ユース・スタディーズ(若者学)構築に向けて」(*11)、京都市中京青少年活動センター(京都市)、2014 年 8 月 30 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/94>

- ・国際シンポジウム「取調べと可視化」(*10)、立命館大学(京都市)、2014 年 7 月 20 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/76>

- ・研究セミナー「DV・性暴力被害者への支援」、立命館大学(京都市)、2014 年 2 月 26 日、
<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/63>

【基礎研究チーム】

- ・フェミニズム研究会第 5 回公開研究会「〈抵抗〉を描く——『レズビアン・アイデンティティーズ』合評会」、立命館大学(京都市)、2016 年 3 月 24 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/705>

- ・シンポジウム「多文化共生を振り返る——排外主義を乗り越えた未来を構想するために」、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン(京都市)、2016 年 2 月 21 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/693>

- ・人間科学研究所アドバンスト研究セミナーVol.10「ナッジ再考 —自由・自律・責任—」、立命館大学(京都市)、2015 年 12 月 11 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/158>

- ・研究会「出生前診断における選択と合意——オーストラリアと日本の場合——」、立命館大学(京都市)、2015 年 11 月 26 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/685>

- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 7 回「精神障害のある人への法制と成年後見制度の課題」、立命館大学(京都市)、2015 年 10 月 16 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/667>

- ・映画「ユニバーシティライフ」上映＋今村彩子監督講演会「聞こえない／聞こえにくい人にとっての大学と情報保障」立命館大学(京都市)、2015 年 10 月 10 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/665>

- ・ワークショップ「マイノリティをめぐる思想／政治：オーストラリアにおける白豪主義・ネオリベラリズム・アジアとの関係から」(*20)、立命館大学(大阪府)、2015 年 10 月 3 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/669>

- ・企画展示「放射能が降ってくるービキニ事件と科学者西脇安」、立命館大学国際平和ミュージアム(京都市)、2015 年 9 月 12 日(土)～9 月 30 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/664>

- ・講演会「核時代を生きた科学者 西脇安 ビキニ事件からラッセル・アインシュタイン宣言まで」、立命館大学国際平和ミュージアム(京都市)、2015 年 9 月 26 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/664>

- ・第 4 回「精神分析と倫理」研究会——学校・自閉・精神分析——、立命館大学(京都市)、2015 年 9 月 19 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/656>

- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 6 回「開発と障害当事者への支援」立命館大学(京都市)、2015 年 7 月 25 日

<http://www.ritsumeihuman.com/news/read/id/644>

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

- ・研究会「精神障害者の意思決定支援～オランダのセルフヘルプの実践～」キャンパスプラザ京都(京都市)、2015 年 7 月 24 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/650>
- ・映画上映会／討論会「ヘイトスピーチに抗する」^(※19)、キャンパスプラザ京都(京都市)、2015 年 7 月 19 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/645>
- ・講演会「デジタル時代のアクセシビリティ」、立命館大学(京都市)、2015 年 6 月 22 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/639>
- ・立命館土曜講座「情報アクセシビリティ入門―読書権と障害者への配慮」、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 9 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2015/20150509.html>
- ・立命館土曜講座「唯の生」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 7 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150307.html>
- ・第 3 回「精神分析と倫理」研究会、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 14 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/617>
- ・第 2 回「精神分析と倫理」研究会——「発達障害」論の深化のために、立命館大学(京都市)、2014 年 12 月 13 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/600>
- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 5 回「中国における障害者権利条約をめぐる取組み」立命館大学(京都市)、2014 年 10 月 20 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/592>
- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 4 回「障害者権利条約の国内の実施と障害者政策委員会」立命館大学(京都市)、2014 年 10 月 4 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/591>
- ・ラウンド・テーブル・ディスカッション「現代社会における研究者の位置」、立命館大学(京都市)、2014 年 7 月 21 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/580>
- ・国際学術企画「生存学の社会学」^(※16)、立命館大学(京都市)、2014 年 7 月 20 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/588>
- ・第 1 回「精神分析と倫理」研究会——「発達障害」をめぐって、立命館大学(京都市)、2014 年 7 月 19 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/573>
- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 3 回「障害者差別解消法の仕組み」立命館大学(京都市)、2014 年 7 月 18 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/572>
- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 2 回「障害者権利条約と国内法整備」立命館大学(京都市)、2014 年 6 月 20 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/567>
- ・映画上映会『卵子提供―美談の裏側』、立命館大学(京都市)、2014 年 6 月 7 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/564>
- ・生存をめぐる制度・政策 連続セミナー「障害／社会」第 1 回「障害者権利条約の成り立ちと位置づけ」立命館大学(京都市)、2014 年 5 月 23 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/560>

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

- ・むつき庵 10 周年記念企画実行委員会主催公開企画^(※15)、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 15 日・16 日、
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/547>
- ・映画「陸軍登戸研究所」上映会—楠山忠之監督を迎えて^(※14)、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 1 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/549>
- ・シンポジウム「生存の現代史 労働／生存——外国人労働者をめぐる運動と／の連帯」生存の現代史」、立命館大学(京都市)、2014 年 1 月 26 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/540>
- ・シンポジウム「生存の現代史 特別講義 生存／社会の現代史」^(※13)、立命館大学(京都市)、2013 年 12 月 21 日
<http://www.ritsumeai-arsvi.org/news/read/id/537>
- ・障害学国際セミナー^(※12)、立命館大学(京都市)、2013 年 11 月 22 日
<http://www.arsvi.com/a/20131122.htm>

14 その他の研究成果等

【「立命館土曜講座」への協力】

70 年以上の歴史を持つ本学開催の市民講座「立命館土曜講座」からの要請に応じ、3 年間で 9 回の講座に講師を派遣し、本プロジェクトの研究成果を市民や学生に還元した。

立命館土曜講座一覧：<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/kouza.html>

- ・ 第 3130 回「教えることと学ぶこと—障がいのある生徒への就労支援の実践から」、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 30 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2015/20150530.html>
- ・ 第 3129 回「社会病理・社会問題を学ぶ—臨床社会学のすすめ」、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 16 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2015/20150516.html>
- ・ 第 3128 回「情報アクセシビリティ入門—読書権と障害者への配慮」、立命館大学(京都市)、2015 年 5 月 9 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2015/20150509.html>
- ・ 第 3123 回「双方向の高齢者支援—脳を鍛える「音読・計算活動」からみえてきたもの—」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 21 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150321.html>
- ・ 第 3122 回「不登校問題の解決とは何か—修復的支援と社会的包摂—」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 14 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150314.html>
- ・ 第 3121 回「唯の生」、立命館大学(京都市)、2015 年 3 月 7 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20150307.html>
- ・ 第 3087 回「障害のある子供を持つ家族へのメンタルヘルス支援」、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 22 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20140322.html>
- ・ 第 3086 回「高齢者支援の中で考える—支援する側・される側の変化—」、立命館大学(京都市)、2014 年 3 月 15 日
<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20140315.html>

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

- ・ 第 3187 回「クオリティ・オブ・ライフとはなにか？—「ライフ」の質を考える—」, 立命館大学(京都市), 2014 年 3 月 7 日
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/kikou/2014/20140301.html>

【Web 連載「人間科学のフロント」への寄稿】

人間科学研究所 HP 上での連載「人間科学のフロント」に対し, 本プロジェクトから毎年 3-6 件の原稿を提供した。プロジェクトの内容や活動を, 研究者や学生はもちろん一般向けに分かりやすく紹介する連載である。全て日本語・英語の 2 言語で掲載している。

日本語版 URL: http://www.ritsumeihuman.com/essay/index/cat_id/17

英語版 URL: http://www.ritsumeihuman.com/en/essay/index/cat_id/16

- ・ 徳永留美「色覚障害について考える」(2016 年 4 月)
- ・ 福田茉莉「地域住民を支える包摂的な医療実践を目指して」(2015 年 12 月)
- ・ ポーター倫子「自閉症を持つ子どもの親のストレス—米国の場合」(2015 年 11 月)
- ・ 北原靖子「高齢者支援チームの継続力」(2015 年 10 月)
- ・ 渡辺克典「障害者やマイノリティをめぐる動向と包摂／排除の基礎研究」(2015 年 9 月)
- ・ 中村正「それは社会問題であるという定義—「問題視することの問題」」(2014 年 12 月)
- ・ 小泉義之「倫理と心理の基礎的な役割について」(2014 年 7 月)
- ・ 竹内謙彰「発達の多様性と法則性」(2014 年 5 月)
- ・ 土田宣明「高齢者支援の取り組みから」(2014 年 3 月)
- ・ 福田茉莉「人と人・社会をつなぐ支援のありかた」(2014 年 2 月)
- ・ 稲葉光行「司法における多言語／多文化主義を考える」(2014 年 1 月)

法人番号	261013
プロジェクト番号	S1312007

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項>

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

該当なし

各チームの研究成果報告

1. 対人支援における＜学＝実＞連環型（トランスレーショナル）研究の方法論チーム
2. 社会的包摂に向けた予見的支援の研究チーム
3. 社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム
4. 社会的包摂に向けた修復的支援の研究チーム
5. 社会的包摂と支援に関する基礎的研究チーム

対人支援における＜学＝実＞連環型 (トランスレーショナル) 研究の方法論チーム

チームリーダー：松田亮三

■チームの概要

対人支援における＜学＝実＞連環型（トランスレーショナル）研究の方法論チーム（以下、方法論チーム）では、法や医療、文化などが扱われる現場性を尊重しつつ、さまざまな学問領域や文化的背景をもつ実務家と研究者との学融的視点に基づく研究実践とその方法論の構築を検討してきた。具体的には、1）心理学、社会学等の諸学における知見が、対人支援への実践場面に移行（トランスレーション）されるのは、どのような過程を経て行われるのか、を明らかにすること、2）対人援助における研究の実態をふまえて、より組織的・体系的・効果的に基礎研究、実践研究、実践場面が連携し、研究ならびにその成果を移行していくための方法論、すなわちトランスレーショナル対人支援研究のあり方を検討すること、3）それらの移行を効果的に推進するための方策、すなわちトランスレーショナル対人支援研究の政策的課題を検討すること、の3つを課題としてきた。

この方法論的課題を中心に、異なる国や文化での対人支援法での伝播のあり方を視野にいれ、他のチームとの交流を積極的に行いつつ、チーム構成員それぞれの蓄積・ネットワークを活用し研究を展開した。なお、本チームには、構成員として若手研究者や大学院学生が多数参加しており、これらの研究活動を通じた若手育成にも力点を置いてきた。

本チームは、日英公衆衛生機構比較研究会議（2013年10月）、国際会議「多様化する社会における健康・医療の政策・政治：アジアとグローバルな課題」（2014年11月）、第1回日本ミックス・メソッド学会（国際ミックス・メソッド学会アジア地域会議との共同開催）（2015年9月）、東アジア法心理学会（2015年10月）、など、国際会議の開催に積極的に関わり、研究成果の公表、ネットワーク形成、新たな研究課題の創出、を行った。

本研究チーム全体として、上記3課題について、以下に述べるように、それぞれ重要な成果を生み出すことができた。これまで議論されてきた研究と実践の連携に関する議論を、トランスレーショナル対人支援研究(translational human services research, THSR)の課題として整理し、それを促すための方法論そしてその研究で用いる方法の検討を前進させた。これらはさらに明確化ならびに体系化を図っていく必要がある。なお、研究成果は、本プロジェクト主催の研究セミナーやシンポジウム、プロジェクトメンバーの所属する関連学会での研究報告、報告書の刊行などにより、公表される。

なお、本研究チームはトランスレーションを「連鎖」と述べてきたが、医学領域を中心としたトランスレーショナル研究概念の検討と、日本における訳語が未だ定まっていない

ー「橋渡し」研究なる用語が広まっているものの一状況に鑑み、トランスレーショナル研究についてはカタカナを用い、トランスレーションについては文脈によって「移行」、「応用促進」、「連携促進」などと訳し分けている。

■研究成果

以下、課題ごとの状況を概観しつつ、特に重要と思われる成果を記載する。

1) 対人支援研究における基礎・応用連携に関する実態ならびに先行研究の検討

国際的に著明な研究者 Haluk Soydan 氏（南カリフォルニア大学）を招いて、ソーシャル・ワーク領域におけるトランスレーショナル研究についての議論についての最先端を得てプロジェクト内外で共有した。社会福祉領域における実践と研究の連携論、医学領域におけるこれまでの議論、支援現場に関わる3チームの経験、本チーム・メンバーが関わっている「法と心理学」ならびに「支える医療」研究における経験、などから「トランスレーショナル対人支援研究」に関わる概念の検討を行った。なお、本課題と2)の課題は重なり合うところも多く、具体的支援に関与している課題は2)の項目において記載する。

① 「トランスレーショナル対人支援研究」概念の提唱

疾病の治療だけでなく、対人支援においても、心理学、社会学、などの、基礎的研究を対人支援の場面に積極的に活用することはこれまでも追求されてきた。先に述べたような社会福祉領域のように支援の実践的課題が先行している分野においても、また行動分析学や神経経済学のように、実践的課題そのものに直面しているのではないが、応用の裾野の広い可能性がある分野においても、トランスレーショナル研究の重要性が議論されていることが明らかになった。これらをふまえて、「トランスレーショナル対人支援研究」の構想を検討した。

2) 《学＝実》連関型研究・トランスレーショナル対人支援研究の方法論

対人支援における《学＝実》連関型研究そのものを進めるための方法(methods of THSR)とともに、《学＝実》連関型研究そのものの方法(methods in THSR)を検討した。後者は、前者を検討する上で不可欠な研究過程の理解をもたらすとともに、前者のあり方にも影響する。また、他の国や他の文化領域での支援法の移転に関わる方法論的検討をすすめた。

① 《学＝実》連関型研究・トランスレーショナル対人支援研究の方法論

《学＝実》連関型研究・トランスレーショナル研究の方法論を検討し、基礎的領域から、実践的領域、さらにはその普及に関わるさまざまな研究をいかにつなぐのか、異なる問題意識や方法で行われている研究をいかに接続し連携していくのか、そして、応用が期待できる領域においてはいかに実践場面での活用につながる研究に移行していくのか、など研究の戦略的推進に関わる方法として、この課題が明確化された。この戦略的

推進に必要なのは、潜在的に関連する課題に取り組んでいる研究と研究をつなぐとこと、あるいは支援の課題に日々直面している実践家の問題意識と研究者の問題意識をつなぐことであり、そのための方法が問われる。

後述する「支える医療共同研究」や「法と心理」領域での議論、プロジェクトの他のチームの活動から、①実践的課題と実践研究との連携、②実践研究と基礎研究との連携、③確立した実践方法の普及・実勢、という3つの区分を行い、それぞれの区分において連携・移行の促進を行う枠組みを検討した。また、対人支援の領域では、制度化されている領域とそうでない領域において、利用可能な資源に大幅な違いがあり、実際上の問題として、新たな実践課題をすみやかに研究課題とする戦略的方法が求められる。

② 「法と心理学」領域における学実連携プロジェクトの進展とその検討

「法と心理学」領域では、無実の罪でとらわれた人（判決が確定した人）の冤罪救済、誤判を防ぐための政策・法律の提言、等が重要な課題とされており、そこでは実践と研究との連携が追求されてきた。このような中で、日本でも、米国発のえん罪救済のためのプロジェクト、イノセンス・プロジェクト(IP)の準備が始まり、立命館大学人間科学研究所およびチーム構成員も主要な役割を果たしている。このプロジェクトは、法曹関係者や研究者が個別具体的に協同で実施してきた取り組みを、形式的に明確なプロジェクトとし、えん罪者救済のためのワン・ストップ・サービスの確立を目指すものである。これを通じた、対人支援のトランスレーションの制度的枠組みの検討を進めている。

③ 生活困窮者を支援するための医療実践に関するアクション・リサーチ

実践志向の研究枠組みとして発展してきたアクション・リサーチを、支援の現場で活用するために、京都市内の中規模病院と連携してすすめ(図1)、そこでの課題を検討した。研究協定を締結し、研究者―実務家で構成される共同研究プロジェクト・チームを形成し、研究者・実務家の共同研究会議を定期的に行い、当該の病院が直面している問題に即した研究活動が実施された。医療現場にて医療従事者―患者間で生じるコンフリクトに関するものであり、とりわけ社会的孤立や経済困窮、独居高齢者など疾病を患うことで生活基盤を大きく損なう可能性のある患者に対する医療的支援のあり方に関するものであった。

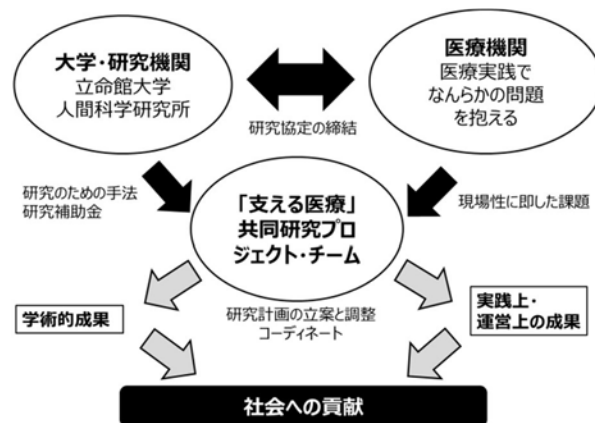


図1 《学＝実》共同(連携)プロジェクトの概要

本課題では、医療機関に勤務する医療従事者と通院する地域住民との両方にアプローチする調査を実施することにより、医療従事者が患者に対応する際に抱える困難や戸惑いだけでなく、通院患者が日常生活や医療受診場面で抱える困難や不安を検討することで、当該医療機関にて生じる「困難性」の実態を明らかにした。また、研究者—実務家間のコンフリクト、共同的な研究活動を実施する上での双方の要請に基づく研究報告会の開催など、プロジェクトの推進過程での留意点も明らかになった。

④ 《学＝実》連関研究における方法論の開発—TEAの展開とナラティブ概念の検討

個人の生きる実存的なライフ（生命・生活・人生）の個別性と支援活動という普遍性のズレという観点から、そのズレを解消し、より現場実践に接近するための研究ツールに関して理論的に検討した。人々の生きる人生径路と径路の選択の際に個人に生じる機微を非可逆的時間の中で記述する複線径路等至性アプローチ（TEA）を展開し、対人援助領域における応用可能性を検討した。

人文学・社会科学において、キーワードとなりつつあるナラティブ概念を、その歴史的展開をふまえて、①産物としてのナラティブ：「物語、教訓、娯楽、経験」などを対象化して理解する志向、②動態するナラティブ：知識、思考、コミュニケーションなどを「ナラティブ型知識、思考、コミュニケーション」という視角で考えることでその本質を新しい視点から探究する志向、③活用するナラティブ：ナラティブの力を利用して「心理療法(ナラティブセラピー)、企業経営戦略、キャリア形成」などを変革する志向、という3つの志向として捉え直すことを提案した。これは、個別性の反映されたナラティブを実践に活かすための視点を提供するものである。

⑤ 《学＝実》連関研究における方法論の開発—批判的实在論からの接近

科学論の新たな潮流として注目されている批判的实在論(critical realism)について、その理論枠組みを検討するとともに、対人支援領域等における応用例について検討を行った。批判的实在論を基礎にした研究アプローチでは、存在論を重視するために、アブダクショ

ンによる知識の総合が目指されることが明らかになった。

3) トランスレーショナル対人支援研究の政策論

① トランスレーショナル対人支援研究領域の措定

トランスレーショナル研究は、医学・薬学領域においてはすでに日本にも導入されており、関連する研究センターも実施されているが、日本ではそれを対人支援の領域で促進するという構想は未だ社会的に共有されていない。内外の動向を検討し、その点について提案を行った。

② 米国における医療セーフティネットとそこでの《学=実》連関

米国で低所得者層に医療を提供してきたセーフティネット・プロバイダー（SNP）の諸活動とそこでの研究の展開について、文献の検討と現地調査（2015年2月）をもとに検討した。無保険の存在する米国では、連邦事業としてアクセス困難な住民に対してサービスを提供する SNP が重要な役割を果たしてきた。

貧困層や低所得者層を抱える医療機関や SNP では、貧困層や民族的マイノリティへの医療提供を円滑に行うための現場実践や工夫などが明らかにされた。電子カルテを有効活用し、医療従事者が患者情報（母語、生活歴など、そのほか生活障壁となるようなもの）を適切に把握することで患者を中心とした医療介入が実施されていた。これらの組織的な実践や現場での工夫は、生活困窮者や社会的孤立者、医療的支援を拒否する接触困難な患者を抱える医療機関が抱える課題と一致しており、適切な医療提供のための一助となると考えられる。

SNP のあり方やそこでの臨床実践にエビデンスをどのように実施するかは、重要な課題として議論されている。こうした取り組みは、日本において低額無料診療・医療扶助の実施あるいはホームレスの患者を支援している医療機関の取り組みについて示唆的である。

社会的包摂に向けた予見的支援の研究チーム

チームリーダー：土田宣明

■チームの概要

過年度から継続して行っている、大学周辺の地域高齢者を対象とした認知リハビリテーションの取り組みを含み、主として 4 つの側面から研究を実施した。①音読・計算を主たる媒介とした認知リハビリテーションの継続効果について、これまで蓄積されたデータを分析した。②高齢者の認知的特性について、実験的な研究を実施した。③高次精神機能の基礎研究に関して、諸側面から実験的検討を行った。④対人援助の諸領域に関して、主として臨床的観点から検討を行った。

研究成果は、日本心理学会、日本発達心理学会、日本老年行動科学会を中心とした全国学会においてその成果を発表、また *Annual Meeting of the Psychonomic Society*, *European Congress of Psychology (ECP)*, *The International Congress of Applied Psychology*, 等において発表を行い国内外への普及も試みた。以下、公刊した研究成果を列挙する。①の認知リハビリテーションについては、「心理学研究 Vol.85」,「高齢者のケアと行動科学 Vol.19」でその成果を公表した。②の高齢者の認知特性については、「*Journal of Motor Behavior Vol.45*」においてその成果を公表した。③の基礎研究については、「環境心理学研究 Vol.2」において、その成果を公表した。④の臨床的研究については、「日本芸術療法学会誌 Vol.43」,「モンテッソーリ教育 Vol.45」において、その成果を公表した。

■研究成果

成果 1：学習活動の遂行による健康高齢者の認知機能の改善

この研究の目的は、訓練内容とは関係していない記憶機能や抑制機能、あるいは一般的な認知能力などへの転移効果が見られるかどうかを検討することであった。健康な高齢者に対して音読と算数問題を含んだ新しい認知訓練プログラムを導入して、1 年半に及ぶ日常的な場面での認知訓練を行った。その結果、訓練に参加したグループは、短期記憶や作業記憶といった記憶機能、あるいはストループ課題で測定する抑制機能において、事前テストから 1 年半後の事後テストで有意な改善が見られた。特別な介入を行わない対照群の高齢者では、1 年半後には記憶機能と抑制機能において有意な低下が観察された。こうして本研究で採用したような認知訓練のプログラムは、訓練課題とは関係していない認知機能への望ましい転移効果をもたらしており、地域に暮らす高齢者の認知機能の改善に効果的であることが確認された。

成果 2：立命館大学での高齢者支援の取り組みのまとめ

立命館大学での高齢者支援取り組みのまとめを行った。研究の成果として、まず、健康

な高齢者であれ、認知症の高齢者であれ、学習療法と呼ばれる認知訓練に参加することは、彼らの記憶・抑制あるいは一般的な認知能力に大きな効果をもたらした。こうした能力は、加齢に伴い低下するというのが、これまでの確立された結果である。この常識とも言える傾向から考えれば、加齢が進行しても、訓練によってその能力を維持することができれば、その訓練は成功と見なすことができる。加齢の進行にもかかわらず、訓練によって、維持ではなく改善を得ることができたことを考えると、その成果は大きいといえる。

認知訓練については、訓練された機能は改善するが、訓練されなかった機能にはほとんど効果がないという結果が得られており (Ball et al., 2002)、転移効果がないことが頭痛の種であった。転移効果がなければ、健康高齢者への訓練をおこなうとしても、費用対効果はきわめて小さなものになり、社会で広く受け入れられる訓練方法とはならないだろう。この点で、われわれの研究では、音読や計算といった活動が訓練されるのであり、作業記憶、短期記憶といった記憶機能や抑制機能を訓練しているわけではない。訓練の内容とは縁遠い機能に大きな効果があったことは、立命館大学で実施した認知訓練では明確な転移効果が得られたと言える。

成果 3: 運動抑制に関する加齢効果

この研究の目的は、運動コントロールへの加齢効果を検討することにあった。対象としたのは、若年成人 27 名と高齢者 39 名であった。反応形態(type of response)の違いにより、運動の抑制に影響がでるのかを、2 つの年齢群を対象にして比較した。さらに、視覚刺激と同時に提示される音刺激(tone stimulus)が運動の抑制に与える影響を同時に分析した。その結果、高齢者では反応形態の違いが、誤反応率に大きく影響することが分かった。さらに、音刺激の提示は、若年成人、高齢者ともに反応を促進し、反応時間を短くする効果のあることが確認された。しかし、高齢者では若年成人に比べ、誤反応を誘発する率も高くなることが分かった。さらに、高齢者では二重課題条件でも、反応形態の違いによる、error rate への影響が残った。高齢者においては、運動に付随する神経システムの興奮が運動コントロールに強く影響することが示唆された。

成果 4: 体性感覚的な水平面の決定に関する加齢効果

目隠しをして床面に立ったとき、我々はかなり正確に床面の傾斜を知覚する。このとき、足首や腰の関節や筋の情報と足裏からの触覚的情報が有効である。本研究では、目隠しをして床面にいる被験者に対して、床が傾いているかどうかの判断を求め、主観的に水平と判断された床面とその弁別閾を測定した。独立変数は、床の回転軸と被験者の身体軸の関係(直交、並行、斜交)、被験者の姿勢(立位、座位、仰臥)、年齢(高齢と若年)である。水平として判断される床面の勾配は、床の回転軸と被験者の身体軸の関係、被験者の姿勢、年齢に関わらず、物理的水平面の $\pm 0.1^\circ$ の範囲の中に収まった。これに対して水平床面の弁別閾は、床の回転軸と被験者の身体軸の関係によって変化した。身体軸が床の回転軸と交差した条件では、弁別閾は大きくなった。これは、身体各部の密度の非等質性に起因していると考えられる。また被験者の姿勢によって弁別閾が変化した。立位や座位の姿勢

は仰臥姿勢よりも小さい弁別閾を与えた。これは、水平床面の知覚に対して足首や腰の関節感覚の有効性を示唆している。床と接触する皮膚の面積が大きくなっても、弁別閾は小さくならず逆に大きくなった。これは接触面の大きさが有効でなかったことを意味する。感度に関するいずれの指標を検討しても、加齢効果は認められなかった。

成果 5: 文章要約課題遂行の間に提示された生活音の妨害感について

文章理解に及ぼす無関連な聴覚刺激の有害的効果について研究した。実験 1 では、12 人の参加者が 3 種類のテキストを読んで要約するという課題を行い、その課題の間に、雑踏音、人混み音、音楽、会話あるいはそれらの結合音を聴いた。課題の遂行が妨害されたと感じる閾が決定された。会話がもっとも有害的であり（低い閾）、雑踏音と人混み音は比較的有害でない（高い閾）ことが見出された。実験 2 では、18 人の参加者が、通常の雑踏音、音楽、会話だけでなく、それらを反対方向に再生した音も聴取した。正常あるいは逆再生された会話の平均騒音閾は、雑踏音や音楽の平均騒音閾よりも低かった。これらの結果より、文章理解は、聴覚刺激の意味的特徴ではなく、音響的特徴によって、すなわち振幅パターンの豊富な分節によって妨害されることが示唆された。

成果 6: 記憶表象の多様性と情報の統合に関する認知心理学的研究

日常生活での行為や作業の遂行において、私たちは外界に存在する情報、経験や出来事の記憶、そして様々な知識を利用している。同時に、それらは互いに関連し影響をおよぼすと考えられる。本研究では、行為の主体感、順序の記憶、自伝的記憶について検討を行った。

自己の行為とその結果に関する認識は、活動と行為をスムーズに進行させるために必要な要素である。しかし、自分が行った行為の結果であるのかどうかについての判断に錯誤が示されることがある。今回の研究では、スイッチを押す動作とブザー音との間の経過時間の推定を実験参加者に求めた。実験では、参加者の指がひっぱられてスイッチが押される条件で検討した。スイッチの押下直前に、スイッチ押下後のブザー音と同一音が鳴る場合にスイッチの押下とブザー音との間の経過時間の推定値に短縮傾向が示された。外界にある周辺情報の統合過程に関する実験研究の方法を示すことができた。

順序は日常の活動を支える基本的要素である。本研究では、短期的記憶における順序の記憶を検討するいくつかの実験を行った。実験では、5, 6 語の単語が一つずつ提示され、それらの提示順序を覚えることが実験参加者に求められた。提示後、一連の単語はパソコン画面に再提示され、それぞれの単語が提示された順序を再構成することが参加者に求められた。このような順序再構成課題における、遅延時間、単語の長さ、単語間の音韻類似性と意味類似性、加齢の影響などについて検討する実験を行った。実験結果から、順序はいくつかの異なる種類の表象によって記憶されている可能性が示された。

自伝的記憶は、自己と関連する事柄および経験した出来事に関する記憶であり、日常の判断や感情に影響をおよぼすと考えられる。本研究では、自伝的記憶を引き出す手がかりとして、匂い、画像、単語を用いて比較する実験を行った。想起した出来事が過去の特定

の日時に行われた経験である割合は、画像や単語と比べて、匂いを手がかりにすると低くなる傾向が見出された。また、出来事を経験した年齢も手がかりによって異なっていた。匂いは画像や単語と比べて異なる検索経路を持ち、異なる想起経験をもたらす可能性が示唆された。

成果 7: 行動計測機器を用いた幼児の描画に関する発達的研究

本研究は、幼児期の書字・描画およびその発達過程に関して、完成された描画（何を描いたのか）ばかりでなく、描画活動のプロセス（どのように描いたのか）に注目して調査することをおもな目的としてなされた。描画を用いた検査は、質問紙や言葉による回答が難しい幼児にとっても有効な手法であるが、その一方で、解釈や客観的評価が困難で熟練を要する場合もあり、グッドイナフ人物画検査（DAM）やベンダーゲシュタルトテスト（BGT）など、詳細な採点基準が設けられたテストでは採点にかなりの労を費やすため、大量のデータを分析するには不向きである。また、描画のプロセスは衝動性、固執性や自己制御機能を反映するものとして重要な指標になり得るが、目視による記録や分析は困難を極める。

そこで本研究では、筆記用具として行動計測機器「デジタルペン」(Anoto DP201)を使用し、幼児期から児童期にかけての描画検査における筆運動作の制御能力（速度、筆圧、軌跡のストローク情報など）、描画の大きさ、全体の布置の仕方などについて発達的变化を調べた。デジタルペンと同時に描画解析ソフト Elia(n)(Seldage 社製)を用いることで、分析の効率化を図った。

研究期間内に、5-12 歳児に対して①DAM グッドイナフ人物画知能検査、②ベンダーゲシュタルトテスト③DAL (Draw a Line slowly) テスト(別府,1987)④円系列課題 など、250 名以上のデータを収集し、描画プロセスの発達過程や質問紙調査との関連について分析、研究成果としてまとめた。ベンダーゲシュタルトテストに関しては、Elia(n) 上で使用でき、コピーツ法・ハット法による採点作業を簡便化する「BGT 採点補助システム」を開発した。

本研究の成果は、European Congress of Psychology (ECP), Association for Psychological Science (APS), 日本心理学会、発達心理学会など国内外の学会で発表された。また発達心理学研究に行動計測機器を適用する意義、研究成果および今後の可能性について、チュートリアルセミナーやシンポジウム、ワークショップなどを通じて公開した。そこでは、フランスの共同研究者 Wallon, P.氏, Mesmin, C.氏, Jobert, M. 氏らが来日しての共同発表も行われた。

成果 8: 苦境の他者に対する視点取得による感情反応と個人差としての自尊心が援助行動に及ぼす効果

この研究では、視点取得によって喚起された感情反応と自尊心の個人差が援助行動に及ぼす効果を検討する実験を行い、パス解析によって、感情反応と援助量との間の様々なパスの存在について例証した。方法は次の通りである。自尊心の高低によって分類された 60 人の女性の参加者は、視点取得の 3 種類の教示 (Stotland, 1969) のうち 1 つが付与され、

統制不可能な苦境にある女子学生のプロフィールに接した。この後、参加者は女子学生を匿名で援助する機会に出会い、援助量を応答した。共感と個人的苦痛は、実質的に、各々他者想像と自己想像の視点取得によって喚起された。高自尊心群は、まず、共感に対して女子学生との類似性の否認を行うことで、共感に伴う自己の脅威の可能性を低減し、次に、この自己防衛を経ることで、共感を援助場面の援助量に結び付けることができた。これが、共感から類似性の否認への正のパス、類似性の否認から援助量への正のパスの意味である。一方、個人的苦痛に対して、個人的苦痛から注意を逸らせて、援助場面に則していえば被援助者から逃避して、低減させる対処方法が使用され、個人的苦痛から援助量への負のパスが得られた。低自尊心群では、自己防衛の能力が低いため、共感から注意を逸らせて、共感と共に自己の脅威の可能性を低減しようとされ、共感から援助量への負のパスが得られた。一方、反芻や記憶の活性化拡散によって、個人的苦痛から注意を逸らせるのが困難なため。自己想像した他者の苦境を援助することで軽減し、喚起されていた個人的苦痛を低減しようとされ、個人的苦痛から援助量への正のパスが得られた。以上より、共感—愛他性仮説 (Batson, 1991, 2011) で主張された、共感から援助量への直接パスは得られなかった。共感からの促進効果には、類似性の否認などの自己防衛が共感から援助量への負のパスが存在し、個人的苦痛から援助量へのパスは正負両方存在した。また自尊心の個人差の影響も大きいことが示された。

成果 9: 表現がもつ治療的意味の研究

上記テーマをベースとし、「投影ドラマ法」、コラージュ法の研究、箱庭療法の研究、子育て支援を見据えた幼児のファンタジーの意味の研究、思考場療法の技法の習得および研究を3年間で行った。「投影ドラマ法」に関しては、以前に作成した用具の改善点を明らかにし、改訂を行った。また、この技法の意義を再考し、学会発表を行った。コラージュ法に関しては、実施形態（個別と集団）によってもたらされる気分は異なるという仮説のもと、研究を行い、成果を論文にもまとめ学会誌に掲載となった。箱庭療法に関しては、箱庭制作から得られる心理的体験が個々人のパーソナリティ傾向によって異なるという仮説のもと研究を行い、成果を学会で発表した。幼児のファンタジーの意味に関しては、国内外の幼児教育学および心理学の文献展望を行い、また、関与観察を行った。研究成果は学会で発表し、論文にもまとめ学会誌に掲載となった。思考場療法に関しては、技法を習得し、その効果検証の実験を重ね、現在、学会発表の準備を進めているところである。

社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム

チームリーダー：谷晋二

■チームの概要

実践的な研究を行うチームで、1)支援を必要としている当事者に対する直接支援、2)当事者を支援する支援者への支援、3)支援を継続させていくための情報移行の3分野で実践的、理論的研究を行う。谷晋二をチームリーダーとし、障害者（児）支援、引きこもり、外国人児童への学習支援を実施する研究者計10人で構成される。

直接支援、支援者支援、情報移行の3つの試みを実践してきた。直接支援では、総合支援学校の高校生を対象に学生ジョブコーチによる就労支援に関する研究、介護する男性（ケアメン）を対象とした会や集いなどを主催するグループの全国的な実態把握とそこで取り組まれているプログラムの効果検証、日本語の習得に困難を抱える外国にルーツを持つ児童に向けたデジタル教科書政策の在り方の検討児童養護施設退所者へのアフターケアに関する調査、自閉症スペクトラム障害児を対象とする遊びを用いた療育プログラム開発、ならびに、発達における階層・段階理論を基盤とする発達チェックリストの作成が行われた。また、ビジュアルコラボレーションシステムを利用してPCIT（親子相互交流療法）の実施を行った。

支援者支援の試みでは、ひきこもりの家族を支援する若者サポートステーションの職員の専門性に関する研究を行った。情報移行の分野では、業務内容改変に参加するセルフマネジメント行動を促進する援助変数、そして支援内容を含んだキャリア形成の推移を情報として残せる機能的ポートフォリオの内容やその運用システムが実証的に検討された。保護者や支援に関わるスタッフへの支援としてACT（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）に基づくワークショップが実施された。

支援者支援（継続的（シームレス）な「連携」の在り方）の研究として、私立幼稚園における「（仮称）個別の保育支援計画」の策定（4年計画）及び試行に関しての監修・指導助言、総合支援学校の生徒の就労に向けたキャリアガイダンスにおけるキャリアプラン、キャリアデザイン（個別の包括支援プラン）の活用及び有用性の在り方に関する検証アンケート調査を行った。これらの研究成果は、下記のように公開、報告されている。日本語の習得に困難を抱える外国にルーツを持つ児童に向けたデジタル教科書政策の在り方について、公開シンポジウム（2014年5月10日、トヨタ財団プロジェクトとの共催）、日本デジタル教科書学会での報告（「マイノリティの学習権保障と教科書アクセシビリティ」）バリアフリー教育開発研究センターでの公開シンポジウム、「ケアメングループのマネジメント」シンポジウムの開催、『男性介護者支援の論理と根拠』（本学人間科学研究所）の発刊、自閉症スペクトラム（ASD）児のための遊びを中心とする療育プログラムの開発、ならび

に、②発達における階層・段階理論を基盤とする発達チェックリストの作成は、自閉症スペクトラム学会ならびに発達心理学会、The Association of Contextual Behavioral Science(ACBS)で発表された。保護者及びスタッフの支援では、台湾の支援団体（天使心）との共同研究、研究会を実施した。

■研究成果

成果1：直接的支援に関する成果

直接的支援では、児童養護施設退所者のピアサポートプログラム、ディスレクシアの子どもへの ICT による学習支援、自閉スペクトラム症児を対象にした遊びプログラムの開発が行われた。

ディスレクシアの子どもへの ICT を使った支援 ディスレクシアの子どもに教科書を音声付デジタル化するプロジェクトは学校や民間団体との連携の中で実施された。教科書のデジタル化に必要な著作権の問題の解決や、学校現場との協力によって、いくつかの教科書（保健体育など）のデジタル化を可能とした。本プロジェクトによりタッチパネル PC や iPad を小学校に貸与し、その有用性が明らかとなった(図 1)。

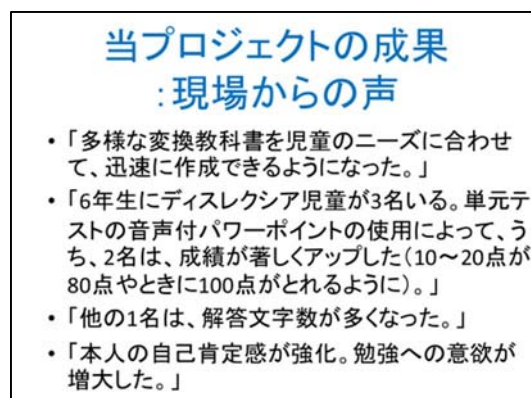


図1 ディスレクシアの子どもへの ICT を使った支援の成果

児童養護施設退所者へのピアサポートプログラムの開発 児童養護施設退所者へのピアサポートプログラムの開発では、まず現在のサポートの課題が明らかにされた。退所者は、仕事の悩み、住宅や金銭問題、人間関係の悩み、孤独感など、様々な悩みや問題を抱えており、施設退所後も生活支援や精神的なサポートを必要とする人が多いことが明らかになった。さらに、施設職員によるアフターケアが重要な役割を担っていることが確認された。しかし、アフターケアのための体制や制度が未整備であり、十分なケアが行えない実態も浮き彫りになった。そして、図 2 のような包括的な支援の必要性が新たな知見として得られた。

まとめ (1)施設職員によるアフターケアとして、以下のような包括的な支援が必要になったことが明らかになった。 1.「精神的支え」…担当職員とのつながりがある人は、自分では一人ではないと思うことができる。 2.「日常生活支援」…家事・育児援助、通所・通院の支援、引っ越しの支援など。 3.「生活問題への対応」…転職・転居の相談、家賃の滞納など。社会資源の活用も促す。 4.「親との関係調整」…親と適度な距離を取れるように支える。 5.「自分史の紡ぎ直し」…施設での生活や体験を新たな視点でふりかえり、自己肯定感を育む。 *施設は実家のような存在であることがうかがえた。	⇒しかし、施設職員によるアフターケアの制度が未整備であり、十分に期待に応えられない現状も浮き彫りになった。また、退所者の人生に伴走し続けることが、インケア(入所中の支援)の向上にもつながることがうかがえた。今後予算の確保や人員増も必要であろう。 (2)自立に必要な力とは…「基本的な信頼感が獲得されていること」「助けを求められること」、「自ら判断して決定する力が育っていること」、「基本的な生活技術を身につけていること」が大切なことが把握できた。 ⇒このことから、何よりも子どもと職員との信頼関係の構築が大切であるといえよう。また、入所中から様々な体験を保障し、自立のための準備を行うこと、自己決定の力を養うことが大切だと思われる。
---	---

図 2 児童養護施設退所者への支援の成果とまとめ

自閉症スペクトラム症児に対する療育プログラムの開発 自閉スペクトラム症児に対する遊びを中心とした療育プログラムの開発では年齢別に4つのグループに分かれたプログラムが開発された。そのうちの3つのグループの研究成果について、活動の構造化とファシリテーターの関与のあり方（支援を段階的に減らして行くこと）の重要性が推測された。

成果2：支援者支援に関する成果

男性介護者の家族・介護組織への支援 この研究では、多くの地域、団体と連携を取りながら家族や介護組織への支援の組織化が行われた。多様な目的を持つ組織と連携しながら継続した実践が行われた。その結果、「教える／教わる」＝ピア・エデュケーション・プログラムの有用性が示唆された。また、組織や組織での活動がケア・コミュニティとして機能していることが明らかとなった(図3-5)。

組織(会)や活動(集い) 「ケア・コミュニティ」①
①同じ立場(介護者／男性)の人との出会いの場 ②プラス、マイナスも含めた介護感情が吐露できる場 ③「ひとりじゃない」ということを実感する場 ④これまでの介護生活の振り返り(reflection)の場 ⑤介護者の経験が「知」として生きる場 ⑥介護者と支援者の協働の力が働く場 ⑦介護者のエンパワメント(empowerment)の場 →「伴走型支援」

図 3 組織会や活動の機能

組織(会)や活動(集い) 「ケア・コミュニティ」②
①相互作用が働く場(各自の介護体験の相対化、共感、他者への気遣い、孤立感からの解放、脱「絶対」) ②ロール・チェンジが働く場(教える／教わる、介護する／される、役割固定化からの解放) ③「知」の発見・「知」の創造がなされる場(経験を「経験知」として、社会の共有財産としていく取り組み。当事者と援助職の「知」の融合、支援プログラムの開発) ④介護者運動の契機となる場(異議申し立て、政策化、運動主体としての介護者)

図 4 組織会や活動の機能(続)

①介護するということで生じる「喜怒哀楽(喜び、葛藤、抑圧、排除、抵抗、争議、交渉、希望、共感等々)」を仲立ちとして相互に気遣う関係性が組織される「場」。一緒に「喜怒哀楽」を潜り抜ける「場」。
 →「打ち克つのではない。切り抜けるのだ」(アルノ・ガイヤー『老王の家』)
 ②その「場」は、介護で失いつつあるあるいは既に失った社会との接点や他者・家族との関係を修復し、そして新たに獲得する機会にも溢れている。
 ③会や集い存在そのものが、当事者による「異議申立」の社会運動
 →介護者もまた「もうひとりの当事者」として支援されるべき。「家族介護者支援」という新たなフレームワークの根拠

図 5 組織会や活動の機能(続)

台湾の障害のある子どもを持つ家族を支える支援者への支援

日本で開発された保護者向けのメンタルヘルス支援プログラムを台湾での支援団体に提供した。そのために予備的なプログラムを台湾で実施し、台湾の支援団体との交流と連携を図った。次に、テキストの中国語化を行い、保護者へのプログラムの提供とスタッフへのプログラムの提供を行った。中国語化されたプログラムは、保護者のメンタルヘルスの改善に貢献することが実証的に示された。また、スタッフへのプログラムの提供は、スタッフのメンタルヘルスの向上に寄与し、スタッフがプログラムを実施することに前向きであることが示された。

成果 3：情報移行に関する成果

対人援助学の視点からの情報移行 「援助」「援護」「教授」という機能連環モデルに基づいて単独能力情報を基本とするプロファイリング型の情報移行から、時系列的な援助つき能力の情報を基本とするポートフォリオ型の情報の生成と移行のモデルが作成された。このモデルでは、援助者のために、次なる「できる」を可能にする具体的な支援を創造しやすくなるような情報の作り方を支援している。このモデルは、京都市の特別支援学校で「できますシート」として試行されている。

社会的包摂に向けた修復的支援の研究チーム

チームリーダー：中村正

■チームの概要

このチームの研究は、インクルーシブ社会の構築にかかわり修復的支援に関する実践の諸相を明らかにすることをとおして理論化を行うことが目標である。修復という概念のもつ社会の再組成についての意義を明確にするという統一的な課題のもとに取り組んできた。その主題のもとに各論を収斂させていくこととした。参加者のサブテーマの追求をとおして修復的支援という考え方の諸相を明示できるという面を重視した。たとえば、①情報の正義による社会的課題の明確化、②東日本大震災の法的救済の心理-社会学的検討、③被害者支援における大学らしいワンストップサービスの内容としての支援者支援のシステム構築の予備的研究、④法と人間科学の見地からPTSDの時効に関する法理の探求、⑤司法臨床・加害者臨床と「治療的司法」の実践（社会実装の取り組み）と理論、⑥社会復帰のあり方の研究、⑦心理学鑑定技術と法理を開発等が修復的支援等である。さらにこれら個別の修復にかかわる研究課題をプロジェクト全体のテーマであるソーシャルインクルーシブへと再接合させるための学=実連環から導き出す実践からの理論化 practice into theory を重視した。

■研究成果

1. 修復的支援チームの研究をとおしてみえてきたことの整理—社会的包摂に向けた修復的支援の意義の理論化として

研究全体にかかわる理念としての「修復的正義・司法」を軸にして社会的現実が学=実連携を求めていることを重視した。とりわけ司法が分担する領域が拡大していることに鑑みた修復概念の意義を実践に活かす理論について共有してきた。上記のサブテーマを修復的支援としてインクルーシブ社会の組成にむけての理論として再構成すれば次のように整序できる。①公私関係領域、主要には私的關係としての家族や親密な関係性への介入後の支援、②触法行為の背景にある要支援者の可視化（障がいのある人、子ども等の問題行動や逸脱行動）、③多様なアディクション（米国の精神疾患が「物質関連および嗜癖障害」と拡大されている）と関わる触法行為と治療的ニーズの齟齬（法と心理・福祉の連携課題）、④予防的防止の課題への橋渡しができていない課題群の整理（高齢者虐待における養護者支援、子ども虐待における養育者支援という課題定立の必要性）、⑤被害の実相にそくしていない制度の点検と修復の見地からの再組成の理論化（虐待のナラティブからみえてきた時効論）、⑥社会復帰のための要支援ニーズの定義の科学的な措置（情状鑑定、心理鑑定技術とそれらを非犯罪的ニーズとして更生保護と自立支援の観点から翻訳 translation することの必要性）、である。これらの諸相を整序できたことが総論としての成果である（図1の相関図を参照のこと）。以下は具体的な成果の記述である。

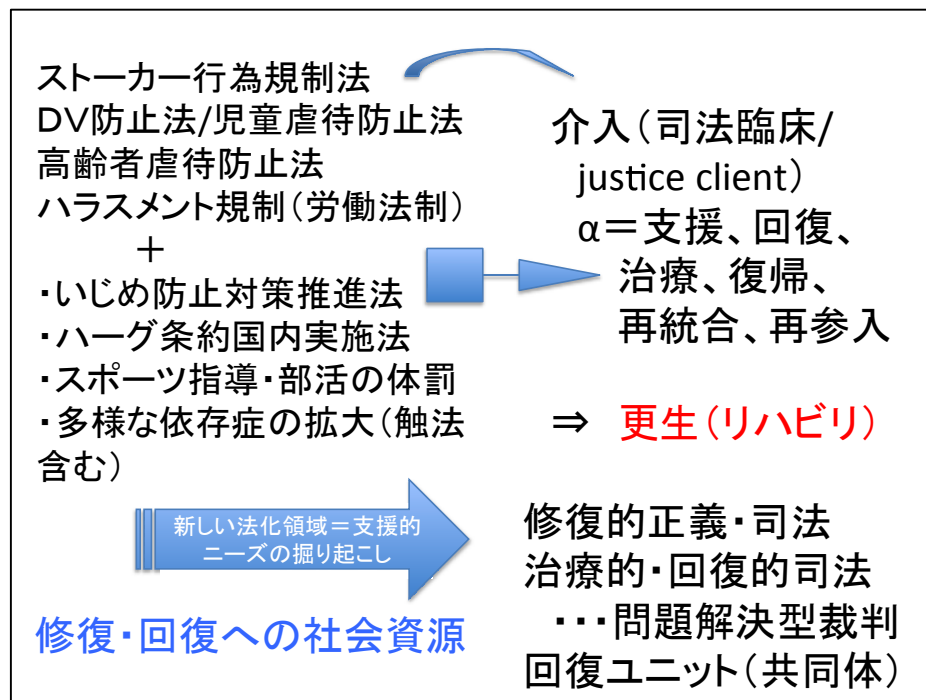


図 1 修復的課題の関連図 (中村作成)

2. 司法臨床の体系にむかう修復の考え方とその実践の諸相—研究の成果

成果の第1は、修復の視点から、対人援助の基本的な理念を構築してきたことである。修復的正義・治療的司法の概念をもとにした司法制度を提案し、犯罪を生まない社会の実現を目指してきた。人間科学に関わる諸学の融合と連携をもとにして、いわゆる加害行動や逸脱行為に表象される問題を「総合的に解決する」ための中軸となる実践的概念を確定することが共有の関心事項であった。とくに家庭内暴力や対人暴力について重点化してきた。配偶者暴力、子ども・高齢者虐待、いじめ、つきまとい行為等、必ずしも刑事罰とまらない暴力が広がりを見せており、新しい法律もでき、法化領域の拡大がすすんでいる。その結果、あぶり出されてきた暴力加害者への対応に苦慮しているのが現状である。この成果はさらに薬物問題等、触法行為と関連する各種の依存症への治療的司法へと応用できる。現行の司法制度は依存症治療へと向かわずに「刑罰」を中心とした法律が中心となって、再発防止という点では根本解決が難しいことは明白になっている。米国の精神疾患の定義が嗜癖問題へと拡大され、治療的回復的な取り組みをハームリダクション政策としてすすめる諸外国に比べ、なおゼロトレランス政策にたつ日本社会の修復に向かう遅れがある。さらに虐待や暴力の場合、被害者に対して医療はもちろん臨床心理や社会福祉によるケアが求められる一方で、加害者に対して心理学や社会・教育的視点からの脱暴力を可能にする仕組みが求められている。しかし司法は人の生き方に介入することを回避する消極主義が基本なので、修復や回復、広い意味での治療に向けた、人間科学の知見にもとづく刑罰とは異なる要支援的ニーズに応答する仕組みを創造し、そこへと架橋することがもとめられていることに鑑み、その要支援ニーズを非犯罪的のニーズとして再構成するリサーチを基本にした対人援助学的な

置き換えとして学＝実連携の意味や修復の概念化を探ってきた。

成果の第2は、修復の見地からの専門職者の研修にも関与し、スーパーバイス等、間接支援に取り組んできたことである。こうしたサポートを一元化し、「ワンストップ」で提供することの意義について、被害と加害の関係、要支援的ニーズの確定、専門家の連携機能、学術分野の連携と融合等、包括的・総合的な問題解決を可能にするための情報提供やネットワークにより、そうした機能を果たす学術情報を実践に環流させるリサーチセンターのような機能を果たせるようにしたいと研究チームの位置付けを考え、実践を提案し、研修を提供し、事例をスーパーバイズしてきたことになる。問題行動、逸脱行動、対人暴力をとおしてアクトアウト（行動化）している人たちや被害にかかわる総合的で人間的な、被害の実相にそくした支援のあり方等を対象にして新しい法と心理、福祉あるいは科学の連携が求められていることの理論的実践的必然性を検証してきた。これは弁護士との連携がかなり進み、情状弁護（近畿弁護士連合会や日本弁護士連合会の研修への協力）や離婚実務における暴力・虐待事案への対応（大阪弁護士会の離婚実務研究会への協力）、全国で整備がすすむ男性問題相談員研修の基礎理論の提供、同じく触法障がい者の社会復帰を支援する地域生活定着支援センターでの事例アドバイス（とくに大阪を中心とした近畿各県）に学＝実連携による修復の概念の具体化として貢献をしてきた。

成果の第3は、そうした修復の内容についての開発実践である。たとえば、諸外国ではDVや虐待の加害者に対してカウンセリングを課す「暴力の脱学習プログラム」への受講命令制度。薬物依存症者に対する「治療的プログラム」への参加を指示する制度（ダイバージョン制度）がある。それ専用の裁判所も構築され、司法臨床が構築され、技法と制度があり、専門職者が養成され、必要な官民の社会資源が整備されている。日本ではいまだこうした制度はない。海外の先進事例を検討し、日本に導入する可能性を探り、自治体と連携して社会実験を実施している（大阪市や大阪府と連携した養育者支援と養護者支援）。また各加害・逸脱・触法行為の特性を見極め、それぞれにふさわしい社会復帰プログラムの構築にも取り組んでいる。暴力行為や少年の性犯罪、薬物依存症など、犯罪の種類や個人によって更生に資する研究としてきた。例えば暴力行為や非行の背景には、多くの場合、加害者自身が子ども時代に暴力・虐待を受けた被害者であったという過去が隠されている。それが暴力性につながっていくことが少なくない。暴力行為に及ぶ加害者の多くは、物事のあらゆる責任を自分以外の他者に見る「認知の歪み」によって、「相手が悪いから」暴力でそれを正そうとする「他罰性」の傾向を強く持っている。また自らの感情を自覚・認知し、表現することができない「失感情症」の傾向が強いために、いきなり暴力という形で「行動化」する。こうした加害者に対しては、たとえば認知行動療法などの治療的訓練によって「認知の歪み」を修正し、感情と行動のバランスを改善しなければ、反省や謝罪、真の更生に結びつかない。それは医学的な意味での治療ではなく、回復という言葉が適切である。チームでは、DVや子ども虐待で離婚・離別した父親に更生を促し、虐待された子どもを含め、再び家族としてやりなおすための「家族統合プログラム」を構築するとともに、その臨床実践として対人暴力加害男性を対象とした「男親塾」を開催した。20代の若者から60代の高齢者まで、職種も、暴力の形態も、家族の事情も異なるDV加害男性たちを集め、グループワークや面談を通して、

自己を見つめ、暴力を認知し、自らの認知の歪みを修正するとともに、自らの感情を自覚し、統制することを学んでもらう。その先に自らの過ちを認め、被害者である子どもに謝罪できるようになるまでの道のりを支援する。児童虐待親の事例のみならず、多様な加害者臨床の実践知を蓄積し、「修復と治療のための司法」の構築に役立てる。

なお追記すれば、この社会実験は、ハーグ条約（国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約）への参画に伴う「国際的な子の奪取」に対し子どもを守る視点から対応策を考えていく際にも活かされ、執行官研修や現場にたちあう臨床心理士や社会福祉士への研修を実施した。専門家として子どもの返還に際して子どもに与える心理的発達の影響を判断し、また暴力の被害を受けた場合にどう対応すべきかアドバイスの体制を構築しつつある。家族紛争時代にふさわしい司法臨床を考えてきた。

成果の第4は、被害にかかわる修復についての成果である。京都における性犯罪被害支援センター開設（SARA）にむけた相談員研修への協力、性虐待にかかわる時効問題についての被害者の利益と権利を擁護する観点からの法理論の再構成、知的障害者の権利を実現する観点からの問題行動防止についてのオーストラリアの事例検討、東日本大震災の復興支援の観点から修復を位置づけなおした家族と地域支援の実践とその理論化である。これらをまとめた修復のコンセプトは「レジリエンス」であり、トラウマケアの新しい視点としても提起してきた。

■今後の課題として

修復的支援チームは、「加害行為」「問題行動」「逸脱行動」に焦点を当て、加害者臨床・暴力臨床を可能にする問題解決型司法やその問題の解決を担う心理、教育、福祉等の具体的な内容の開発、司法との連携の仕方や手続き法等についての新しい考え方の開発と研究について、国際比較も交えながら、その上で成果の社会実証、社会実装をしながら課題に取り組んできた。さらに被害との関連についての課題を設定することにより、研究の広がりが確保できた。修復的正義・司法、治療的司法、問題解決型司法、司法臨床、暴力臨床・加害者臨床、レジリエンスとトラウマケアというコンセプトも明確にできたと考える。今後はこれらを社会政策の課題として、さらに社会臨床の課題としてリサーチを基本にしてさらに精緻にしてトランスレーションさせていくことである。学＝実連携、多職種連携、学術の連携と融合のための「共通言語」としてのエビデンスのあり方について、事例の積み重ねと概念の分析と統合とエビデンスの確定を継続していくこととしたい。

社会的包摂と支援に関する基礎的研究チーム

チームリーダー：小泉義之

■チームの概要

基礎研究チームでは、インクルージョン（包摂）という課題設定にふくまれる困難性や実際の・理論的な課題に対して、哲学・倫理学・社会学といった視点から学際的に研究することを課題とした。基礎研究チームでは、いわゆる文献研究にもとづきながら、外部との研究展開として本学生存学研究センターと連携した公開研究会にも取り組んだ。これらの公開研究会は、おもに障害者のインクルージョンをめぐる＜学＝実＞連関型研究実践として開かれたかたちでおこなわれ、障害者等に対する情報保障もふくめた討議の場としてデザインされ、当事者や地域の実践家・実務家をまじえた基礎的研究として推進された。

■研究成果

1. 障害学国際セミナー

生存学研究センターと韓国・障害学フォーラムとの連携関係を基礎とした障害学国際セミナーを開催した。両国の障害学関連の研究者・当事者を中心として継続されてきた国際研究交流である本セミナーは、日本（2013年11月）、韓国（2014年11月）、中国（2015年11月）で開催された。

2013年度のセミナーでは「差別禁止——どこまで／どのように可能か／妥当か？」をテーマとして、本学・創思館において日本と韓国における障害者差別をめぐる理論的・実践的な課題について共同討議をおこなった。韓国から権利条約の履行や政府・当事者団体との関係に関する報告、日本からは京都における障害者差別条例の取り組みに関する報告や、差別をめぐる理論的な枠組みに関する報告等がおこなわれた。本セミナーでは、創思館施設を用いた情報保障にも取り組み、報告書『日韓研究交流活動 2013 報告書』を刊行した。

2014年度にソウルで開催されたセミナーでは「障害と治療」をテーマとして、韓国から治療経験とアイデンティティに関する報告、日本から難病治療や障害と教育に関する報告等がなされた。また、中国における障害者差別への取り組みに関する報告もおこなわれた。

2015年度には北京で（1）「社会サービス」（2）「障害者の権益保護」をテーマとしたセミナーを開催した。日本から自立生活を目指した地域での社会サービスの国際的な比較研究、中国から地域におけるパーソナル・アシスト・サービスの課題、韓国から精神障害者の権益保護に関する報告等について報告され、議論がおこなわれた。

これまで開催してきたセミナーの情報は Web ページ (<http://www.arsvi.com/a/kjdsf.htm>) に集約しており、各年度のセミナーのページには、日本側の口頭発表・ポスター発表のテキストデータを掲載している。

なお、本セミナーは日本・韓国・中国の障害学関係者をつなぎ、各国の現状と活動のありかたを共同で検討しあう、きわめて貴重な機会として機能した。また、生存学研究センターに関わる（本学先端総合学術研究科の）院生・若手研究者に国際的な場で発表をする機会を提供してきた側面もあり、若手研究者育成という点で一定の意義があった。本セミナーは今後も継続していく予定であり、これから台湾などさらに多くの国の多様な関係者を加え、より充実した研究交流が展開されていくことが期待される。

2. 連続セミナー「障害／社会」

2007年9月の障害者権利条約の署名から2014年1月の同条約の批准にかけた国内の関連する法制度の整備に直接・間接に関与してきた専門家の招聘を中心とした連続セミナー「障害／社会」を7回開催した。この連続セミナーでは、障害者に関する諸法の改正が進められ、包摂と排除に密接にかかわる障害者差別解消法が施行されるという状況の下で、その経緯の理解を深めるとともに、今後の当事者団体・当事者運動の方向を検討することを目指した。その主旨を実現するために、この連続セミナーでは専門家を招聘するだけでなく、地域に生活する人びとや若手研究者（院生）をふくむ参加者とともに公開セミナーとして開催された。

第1回目のセミナーでは、障害者権利条約の制定過程における障害当事者団体の活動について理解を深めた。第2回目のセミナーでは、元内閣府障がい制度改革推進会議担当室長を招き、国内法整備の経緯について議論を進めた。第3回では、第一部で特定非営利活動法人DPI日本会議から講師を招くとともに、第二部では法制度で焦点となる概念「差別」と「合理的な配慮」に関して、京都の関連条例にもかかわってきた講師をファシリテーターとし、ケーススタディをグループワーク形式で進める試みもおこなった。第4回目には、権利条約にある「監視」とそれを実行する機構について国際比較にもとづく議論を進めた。第5回目には、中国の障害者団体であるワンプラスワン障害者文化開発センターの設立者と、知的障害者の組織の設立にも関与している弁護士を招いて交流を深めた。第6回目には、スーダン障害者教育支援の会の活動を事例として開発と支援の問題について議論した。第7回目では、元内閣府障害者政策委員会差別禁止部会委員であった弁護士を招き、精神障害と成年後見制度の枠組みと現在の課題について議論をすすめた。

連続セミナー「障害／社会」はすべて公開セミナーとして開催され、障害当事者、地域の実践家、学部生・院生等が参加し、講演と質疑応答（グループワーク）を通じた＜学＝実＞関連の協働の場となった。また、本セミナーの一部は『インクルーシブ社会研究』第5号と第11号に収録された。講演内容と質疑応答を収録した本誌は、条約や法制度の導入的なガイダンスとしても位置付けられ、同制度の理解を深めるための学部生向けのテキストとしても活用されることが期待される。

3. 「障害」に関する基礎研究推進

障害学国際セミナーと連続セミナー「障害／社会」を基幹としつつ、個別の障害（視覚障害、聴覚障害、精神障害）をめぐるインクルージョン（包摂）にかかわる基礎研究と成果発信として次のような公開研究会も開催した。

2015 年 6 月には視覚障害者への情報保障を課題とする立命館グローバル・イノベーション研究機構特定領域型 R-GIRO 研究プログラム「電子書籍普及に伴う読書アクセシビリティの総合的研究」（IRIS）を主催とする「デジタル時代のアクセシビリティ——障害者政策の展開」を本学創思館で開催した。同研究会ではピーター・ブランク教授（シラキュース大学）を招聘し、図書館等におけるウェブアクセシビリティをめぐる障害者運動と障害者政策について議論がおこなわれた。

2015 年 7 月には研究会「精神障害者の意思決定支援——オランダのセルフヘルプの実践」を開催した。ヨラーン・サンテゴッツ氏（世界精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク・共同議長）を招聘した。京都ユーザーネットワーク、京都精神保健福祉士協会、京都精神保健福祉施設協議会、京都精神保健福祉推進家族会連合会等を後援とした同研究会では、オランダにおける強制医療（強制入院）への反対運動やファミリーグループカンファレンスによる意思決定支援について講演がなされ、当事者や地域実践家をまじえた議論がおこなわれた。

2015 年 10 月に開催した映画「ユニバーシティライフ」上映＋今村彩子監督講演会「聞こえない／聞こえにくい人にとっての大学と情報保障」では、本学の障害学生支援室、京都府・京都市教育委員会の後援のもと、聴覚障害者への高等教育場面での情報保障をめぐる課題について検討した。同上映会＋講演会には地域の実践者や障害学生支援室にかかわる本学の学部生等が参加した。

以上の公開研究会は「障害」全般を対象とした障害学国際セミナーと連続セミナー「障害／社会」に関連した研究・実践課題として取り組まれた。

4. 外国人排除／包摂に関する基礎研究推進

京都での朝鮮学校公園占用抗議事件や大阪・京都でのヘイトスピーチなど、外国人をめぐる排除／包摂は地域社会の課題となっており、基礎研究チームでは「障害」とともにマイノリティとしての外国人に対する排除／包摂に関する公開研究会も開催した。2014 年 1 月に開催した「労働／生存——外国人労働者をめぐる運動と／の連帯」では、日本における外国人労働者とフランスでの移民の空き家占拠をめぐる生存運動について報告・議論がおこなわれた。2015 年 7 月に開催した「ヘイトスピーチに抗する——路上・学校・大学」では、映画上映とともに大学におけるキャンパスヘイトスピーチコード、京都での排斥・抵抗運動に関する報告・議論がなされた。2015 年 10 月に南山大学社会倫理研究所を協賛として開催されたワークショップ「マイノリティをめぐる思想／政治——オーストラリアにおける白豪主義・ネオリベラリズム・アジアとの関係から」では、アボリジニや移民問題におけるマイノリティ政策について議論がなされた。以上の取り組みの一部は、生

存学研究センターが発刊する雑誌『生存学』第9号に特集（「Hate and War」「オーストラリア・マイノリティ・レポート」）として刊行した（2016年3月発刊，生活書院）。

外部評価の結果

外部評価体制について

本プロジェクトでは、事業終了後も継続的に研究を発展させていくことを目指し、以下4名の有識者による外部評価体制を構築した。委員選定にあたっては、テーマに近い研究分野の研究者と、＜学＝実＞連環の「実」の観点からの評価を強化することを念頭に置いた。

その結果、以下の4名に外部評価委員を委嘱することとし、4名それぞれから個別に「外部評価報告書」をご提出いただくこととした。各委員へは、最終年度11月時点での暫定版報告書や成果報告誌『インクルーシブ社会研究』各号、その他プロジェクトの概要や成果にかかわる各種資料や若手研究者の就職状況についての情報を提供すると共に、2014年度・2015年度の公開研究会に招聘し、インタラクティブな意見交換の場を設けた。

＜外部評価委員 委嘱者＞（五十音順）

1. 泉紳一郎氏（国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術開発センター センター長）
2. 河合克義教授（明治学院大学社会学部社会福祉学科）
3. 佐藤友美子教授（追手門学院大学地域創造学部 地域創造学科）
4. 山本淳一教授（慶應義塾大学文学部人文社会学科）

次頁以降では、各委員から受けた評価を掲載する。掲載にあたっては、どの委員が付した意見かは伏せた状態とし、また誤字および文体の統一等の修正を除き、原則、評価報告書そのままでの記載を転載している。

1. 研究組織について

- 5つの研究チームが、学内の有力研究者を糾合しながら、統合的な成果を目指すとともに、医療・介護・障がい者支援・法曹などの現場の実務者との協働による研究デザインや研究実施、さらには成果の社会実装をめざそうとする体制が研究管理・支援も含めてとられている。
- 各研究組織が、研究テーマを大きな視点から設定し、なおかつ研究組織ごとの研究者と実践家が共同研究を積み重ねてきており、研究組織の設計が優れていることを高く評価したい。研究者個人が、それぞれの研究テーマから実践と結びつくことは当然であるが、これだけの他分野をカバーして、それぞれの役割分担をして、それを総合したことの強みが表れている。
- 人間科学を基盤にした基礎学術研究と実践研究の連携を推進するため、分野を融合し、新しく設定したテーマに関するプロジェクトを軸にした組織作りをしている点がユニークである。組織を機能させるうえで最も大切なことは、ミッションを共有することであるが、本プロジェクトでは、ヒューマンサービスという共通テーマを掲げ、それを支える支援の在り方（「予見的」「伴走的」「修復的」）に関するサブテーマの設定がなされている点が創造的である。縦割りのディシプリンを超え、実践現場からの発信を受けて学術研究を進めている点も高く評価できる。
- 研究推進のための組織は司令塔的な位置づけの方法論チームのもと、機動的かつ重層的であり、各チームの連携も図られている。また、学内の既存組織である「法心理・司法臨床センター」「生存学研究センター」ともよく連携がなされている。社会的包括を支援の側面別に研究する予見的支援チーム、伴走的支援チーム、修復的支援チームとし、学際的研究には基礎研究チームがあたるなど、きめ細かく組織されている。また、研究者と実務家だけでなく、両方を理解したコーディネイト役の存在、事務職員によるサポート体制など、研究を推進に十分な組織となっている。

2. 研究施設等について

- 創思館が、実験的側面を含む研究活動や実務の外部組織との連環活動、さらには学会やアウトリーチ活動などを、プロジェクトを構成する5チームがそろって一元的に行える施設として機能していることが見て取れる。多数のチームないしサブプロジェクトで構成される研究が、個々のチーム等が並立するというだけでなく、統合的にプロジェクトとしての成果を出す上でこのような施設運用は重要である。
- 設備面では実験用設備は研究のテーマや進展に応じて、柔軟に改廃を行ったり、人材育成・地域貢献活動への活用を図るような運用が求められよう。
- 研究テーマから派生して、学内で社会的実践を支援する施設を作っていることがユニークであり、価値ある取り組みであると思われる。高く評価できる。
- ただし、現場と大学との関係ということでは、行事的・一時的な施設利用だけではな

く、例えば、障害者雇用の面で、大学が恒常的に社会に貢献できる体制もあり得るのではないか。

- ヒューマンサービス研究に特化した施設づくりがなされている。幼児から高齢者、障害を持つ人たちとの協働の場づくりという目的を持ち、積極的に外部に開いているところがユニークな点である。各部屋が多層的にモニタリングできる点で、基礎研究のデータ収集も可能になっている。また、自由にスペースを伸縮できる実験室、実習室を設置していることで、新規なプロジェクトの立ち上げにも有効活用できると考えられる。
- 5つのチームがそれぞれプロジェクト室を有し、若手研究者や大学院生、プロジェクトに関わる実務家の研究・ミーティング・分析に利用され、これ以外にも3つの実験室、9部屋の実習・実験室、会議室や共有スペースも活用できる状況にある。本プロジェクトで新たに整備された「視知覚鑑定のための実験室」「多機能ブースと観察設備」「多文化臨床ラボ」、学外実務者との連携を進める「支援者支援オフィス」、既存の「模擬住居型トレーニングルーム」など、連携型研究を行うための施設が充実している。

3. 研究成果等について

- 対人支援のクロノロジカルな場面について「予見」「伴走」「修復」というフレーミングができており、高齢者、犯罪の加害者、知的障がい者、発達障がい者といった対人支援の 이슈 に応じてこのフレーミングに解決すべき問題設定とそのソリューションに関するストーリーとアウトプット、特に実務現場において適用可能な成果の創出が期待される。
- 研究期間の中で、それぞれの時期にまとめが発表されているが、それらをまとめて是非1冊にまとめ、公刊することも必要ではないか。個々の研究班ごとの詳しい成果物は見ることができるが、全体がわかる優しい内容の刊行物も必要と思われる。
- 研究成果は、ピアレビューを通した論文というかたちで、定期刊行物として発信されている。また、定期的なシンポジウムの開催とその総括も、手際よく、外部に向けて分かりやすく論述している。国際的な招待講演の成果なども発信もなされている。ただし、学内雑誌からの発信にとどまらず、既存の学問分野を超えた研究として、様々な既存の学会の学術誌に、対抗的な審査を経て発表していく必要があろう。新たな融合領域のプレゼンスを示すために、海外の学術誌にも掲載を進めていってほしい。
- 立命館大学では、学際的な研究テーマをこれまでも積極的に推進しており、その延長線上に今回のテーマが考えられている。様々な領域の実務家と研究を進めることで、学問研究からは見えてこない社会の実態に迫り、多様な視点を取り入れた研究が可能となり、社会に役立つ研究となっている。研究成果発表の手段として、学術論文や書籍、研究発表、学術誌、市民講座、Web 寄稿等がなされているが、せっかくの研究

成果を一般の人の目に触れ、理解してもらう工夫も必要と思う。

4. その他

- プロジェクトを担った若手研究者が、大学の新しい教育研究組織（総合心理学部）の教員として登用されることとなるなど実践性の高い人文社会科学分野の教育研究人材の養成に寄与している。
- えん罪防止にむけて過去の重大事件の膨大な裁判記録を ICT での援用により分析する、犯罪現場に関する目撃記憶の精度を認知科学的手法により検証する、といった従来は自然科学的方法論があまりみられなかった領域にあらたなアプローチを導入しようとしており、文理融合というの意味で興味深いものがあった。
- 大学の研究者と現場の実践家が共同研究することは、簡単なことではない。研究の仕方、役割を相当すりあわせないとできないものであるが、その困難な課題を真正面から取り組む総合研究をされたことは素晴らしいことで、羨ましくさえ思えた。
- 学術研究の成果は、多くの人に読んでもらい、そこから意見を吸収することで実践研究として発展できる。解説書などで大きなポピュレーションに向けて発信することが研究の双方向的発展のために必要である。どのような方たちが、どのくらい研究成果を享受できたかを知りたい。
- 学術研究の継続と発展には、戦略が必要である。実質的な発信という点から考えると、シンポジウムは、学外のより広い範囲の研究者との協働で進められた方が良いと思う。広報部を中心に、もっと学術ワールドおよび実践現場に広くアナウンスし、各所からの参加を促してほしい。
- 学術の発展のために、若手研究者、実践家をどのように育てているかを知りたい。研究自体の持続可能性は、ここにかかっている。
- 若手研究者の独自雇用は行われていないが、22 名が研究に参加し、その結果として研究業績・外部資金獲得が飛躍的に伸び、研究ネットワークが大きく広がり、就職実績に繋がっている点は特筆に値する。また、大学院生の参加も 51 人（2015 年度）と多く、出身研究科も多様であり、教育効果が大きい。

5. 総合所見

- 過去の事業の成果を適切に基盤にしながら、「大学の特色を活かした研究」という事業類型にも則った取り組みがなされ、本研究の目的に照らし十分な成果があがっていると思料される。
- 研究が学際的であり、なおかつ今回の研究が、＜学＝実＞連環型であることが、オリジナリティに富むものであり、高く評価したい。
- 膨大な研究の蓄積がすでにあるので、次は、ぜひ分かりやすい本を刊行し、社会に発

信することが求められているのではないかと思います。期待している。

- ヒューマンサービスというミッションのもと、ユニークなく学＝実＞連携研究が積み上げられてきたと思う。ともすると、このようなプロジェクト型の研究は、異なったディシプリンの縦割りになりがちである。様々な領域を融合して構築された人間科学の共通言語は「教授・援助・援護」の論理であろう。研究者が、人間科学の「論理」を足場に共同研究を実現させているので、私たち外部の研究者もすぐに議論に参加できる点が、高く評価できる。一方、学術領域に向けては、審査のある内外の学術誌への掲載による評価が必要であろう。実践領域に向けては、より広い範囲に向けての発信と双方向的なPDCAの評価が必要であろう。＜学＝実＞連携研究は、その繰り返しによって、「local-global model」としての展開が得られる。また、人間科学を持続可能な社会技術にまで発展させることで、より多くの実質的な社会貢献に寄与できると考える。
- 普遍性を追求する研究者と現実の地域課題と向き合う実務家との連携・協働はこれまでも必要とされていた。今回のプロジェクトはこれまでの立命館大学の実績の上に、人的・物理的・財政的リソースを最大限に活用して推進されており、研究者には実態に即した研究が、また実務者だけでは難しかった研究的アプローチが可能になり、大きな成果を上げている。学と実が連携する中で、共通の目的を見つければ協力できることが確認された一方で、社会的包括を考えるときの目的達成までの道のりの長さや、問題の複雑さも明らかになり、従来の枠組みや視点では不十分なところや、課題も明らかになっている。それは意図された学と実の連環型研究がしっかりと実践されたことによる成果といえるだろう。今後は研究を深めると共に、市民への研究成果の効果的な発信にも期待したい。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」

研究成果報告書

代表：稲葉 光行
(立命館大学政策科学部教授)

平成 28 年（2016 年）5 月 16 日 発行

発 行：立命館大学人間科学研究所
<http://www.ritsumeihuman.com/>
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
T E L (075) 465-8358
F A X (075) 465-8245
